永遠のフィレーナ

青く果てしなく

9

作/首藤剛志
絵/高田明美



AM JuJu

登場人物

フィレーナ	デビス帝国に滅ぼされた国、フィロセラ王国の王女。反乱軍のシンボルとなる。
リラ	フィレーナの元・妻。ネストが倒れた後、首都ボーを脱出し、フィレーナと合流。
ネスト	元・闘技作家。帝国警察に殺されたかに見えたが、密かに更正病院へ収容される。
テス	帝国人民心理更正病院勤務の新米の心理病理観察看護人。ネストの調査をする。
ラズル	帝国のエリートだったが、リラによって全てを失い、首都ボーの反乱軍に加わる。



黒い悪魔をまるで相手にし
ない超人フィス（31ページ）

アニメージュ文庫

永遠のフィレーナ 9

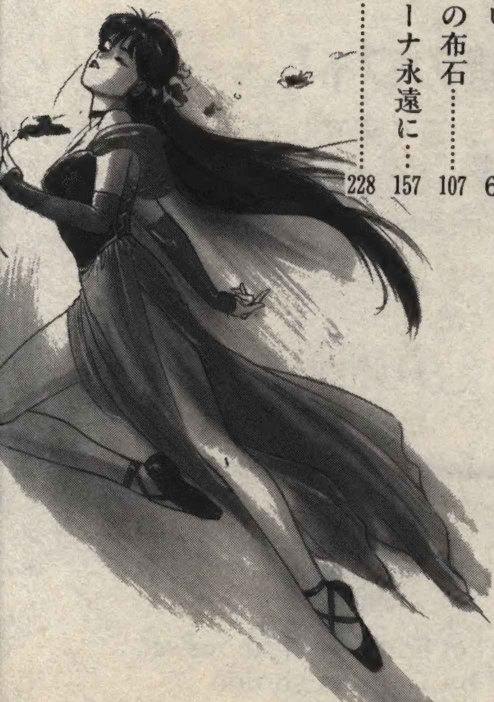
青く果てしなく

首藤剛志

絵/高田明美

Pocket Editions of Animage
by Tokuma shoten

目次



口絵・本文中さしえ／高田明美

プロローグ

海から救いがやってくる。
白い帆の帆船を先頭にした大艦隊が、われわれを海の向こうへ救ってくれる。
艦隊を率いる指導者の名は「海のフィレーナ」。
かつて、ボーの神殿を破壊し、世界中にフィレーナという名を知らしめ、無数の亜流を生み出すもとになった指導者。
いわば、本物のフィレーナ……。
帝国と敵対する人々の意気はあがった。
帝国の超爆弾が、南部海岸地方の反乱軍「狼のフィレーナ」を消滅させたはずだったのに、反乱軍のだれ一人、その猛威に傷つけられることなく脱出させた……。海から現れた本物のフィレーナがそれをやりとげた。
「海のフィレーナ」こそ我らの救世主だ……。
その噂は反乱軍や暴徒の間に、知れわたった。
帝国もその噂の広がりをあえて妨害しようとはしなかった。

むしろ、意図的に、噂を容認しているかのようだった。

その噂に勇気づけられた各地の反乱、暴動はさらに激しさをました。

帝国軍、反乱軍、そして、帝国や異人種の一般市民を巻き込んで、至るところで虐殺、略奪が繰り返された。

それは、この星の人口そのものを、激減させたい帝国上層部にとって、思惑どおりの展開だといえた。

反乱軍はどんなに犠牲をだしても士気は衰えなかった。

「いよいよになれば海岸に逃げろ。きっと『海のフィレーナ』が、救いにやってくる」

それが各地の反乱暴徒たちの合言葉だった。

事実、帝国の海岸線に、神出鬼没に姿を現す「海のフィレーナ」の艦隊は、追い詰められた反乱軍を次々と陸から救出していき、点在する島々に避難させた。

手ごろな陸地のないときは、遠くドラコニア大陸まで、運んで行ったときもあった。

だが、それらの陸地に、長くはいられないことも確かだった。

帝国の大陸の他は、ほとんどが不毛の土地であり、すぐに食糧が尽き、やがては、帝国の大陸へ戻らなければならない時が来る。

さらに、フィアイの民のいる氷の島が、溶けて消える日も迫っている。

やがては帝国と全面的に決戦しなければならない日が来る。

それは、だれの目にも間近だった。

＊

舳先に、波が砕け散る。
波は赤黒く汚濁しているが、空はどこまでも青く、強い風を受けふくらむ帆船の帆は、鮮やかに白い。
艦隊を率いて、旗艦「フィレーナ」は、まっしぐらに進む。
舳先にたたずむフィレーナは、進みゆく海の先を見据えている。
かつて、フィレーナは、夢見ていた。
澄み切った海のたおやかな流れに身も心も任せ、いつまでも浮かんでいたい……。
フィレーナはいつもあこがれていた。
人を傷つけることなく、まして殺すこともなく、無心で波と戯れ遊びながら、流される行方すらしらぬまま漂いつづけていたい……と……。
だが、今のフィレーナは、そんな想いが、頭をかすめても苦笑するだけだ。
もはや、この星には、そんな海はほとんどない。
見回しても広がっているのは、血の色の海……。
フィレーナはこの星にもまだわずかだが青い海が残っているのを知ってはいる。
だが、その希少な海も、このままではやがて、汚濁の運命が待っている。
海を染めていく汚濁を、食い止める手段を知っているわけでもない。
フィレーナが進むのはほとんど絶望の海だ。

けれど、フィレーナは決めていた。
……僕は、帝国と戦う。
戦った結果がどうなろうと僕は戦うんだ。
この星と人類について、ネストとテスの知りうる限りの帝国機密のすべてが、フィレーナに知らされた。
フィレーナは敵対する帝国の存在自体が、末期症状を迎えたこの星で、人類を存続させるために作られたことを知っている。
フィレーナは帝国のおこなってきた戦いが、人類を存続させるために、不要な人種を淘汰する目的でおこなわれていたことを知っている。
そして、人類を継ぐ種は、どんな人類か……。帝国は、帝国なりに、人類の存続のために懸命に努力をしてきたのだ。
そして、人類の未来を継ぐべき種以外は抹殺しなければならない決断の時が迫った。
だが、そのときになって、帝国の上層部は迷った。
本当に人類を継ぐべき種は、計画どおりでよかったのか？……。
人為的に急速な進化をさせた帝国人種で、本当によかったのか？……。
もしかしたら被征服者、帝国にとっての異人種……フィアイの民のように旧態依然とした人類の形でこの星で生き延びてきた人種こそ、人類というういう資質をそのまま受け継いでいる種ではないのか……。

帝国上層部のその迷いが、フィレーナを、フィアイの民を、ネストやテス……そして、心理更正病院に収容されるような特殊変形優秀種などを、今まで生かしてきた理由でもあった。

そう、フィレーナは帝国によって、意識的に生かされてきた。

その事実を、フィレーナは明白にわかっていた。

地方都市ドラの闘技場で、闘技士として戦い始めて以来、懸命に生き、戦い続けてきたフィレーナの生は、生きざまは、どんなに逆らっても、結局、帝国上層部によって、あやつられてきたようなものだ……。

それをフィレーナは、今は、否定する気もなかった。

帝国を、憎む気持ちもなくなりかけていた。

この人類の滅亡寸前の時が、何万年もこの星で生き続けてきた人類という生物の清算の時として訪れた必然だとしたら、帝国を憎むことすら空しい気がするのだ。

そもそもの間違いは、人類というものがこの星に生まれてきたことにこそある……のかもしれない。

帝国人種も異民族もふくめて今を生きる人類の窮地は、長い時間、繰り返された人類の営みの結果だ。

人類の長い時間の中で起きた営みの間違いに、何度となく人類は気づき、指摘も、反省もされてきたはずだ。

だが、それでも、間違いは繰り返され、その膿だけが蓄積されてきた。

そして、どうにもならなくなったとき、そこに、フィレーナの生きている時代がいあわせていた。

今現在を生きなければならない、今を生きている人々がいた。

人々は絶望的な未来がすぐそこに見えながら、それでも、時は未来に向かって容赦なく流れていく。

憎むべきは、そんな今を作り出した過去数万年の人間たちなのかもしれない。

人類の過去数万年分のつけをなぜ、今、フィレーナたちが、清算しなければならないのか。

……なぜ、出会ったこともない祖先の業を、背負わなければならないのか……

そんな今を生きなければならないフィレーナの世代は、この星に人類が生まれてから最も不幸な人間たちなのかもしれなかった。

「私は生まれたいと思って生まれてきたわけじゃない」

こんな想いを、どんな人間も個々の人生のどこかで、大なり小なり一度は持ったおぼえがあるに違いない。

だが、その言葉が、今の人間ほどあてはまる時代はなかった。

……だからといって、生まれた以上、自分から死ぬわけにはいかない……生きていくために、僕は戦う……今までのように……そう思いながらも、自分の思いの説得力のなさに、なんとなく苦笑してしまう自分がいる。

フィレーナは呟いた。

「生きていくために戦うか……元闘技士の僕が言ってもね……」
戦いに負ければただちに死を意味する闘技士にとって、戦いは、とりあえずの明日に息をするためのものであって、生きていくなどという、少なくとも未来にむかったまなざしや、息づかいのあるものではなかった。
フィレーナの呟きに頷くように、ため息に似た息づかいがかたわらで聞こえた。
いつの間にか、かたわらにギャッピーが、うずくまってフィレーナと同じ海の果てを見つめている。
「僕が、生きるために戦うっていうの……なんか笑っちゃうよね……ギャッピー……おまえもそう思わないかい？」
フィレーナは、ギャッピーに言った。
ギャッピーは、何も答えるそぶりを見せなかった。
だが、状況は似ていた。
むしろ、ギャッピーのほうが、絶望的だった。
ギャッピーが、いままで幾多の戦いを生き抜いてこれた力の源は、子孫を残したいという、生物ならどんな生き物も持っている本能だった。
だが、フィレーナとともに北の果てまで行って知り得たのは、ギャッピーがおそらく、この地上に生き残った最後の狼犬だということだった。
ギャッピーが死ぬとき、たぶんそれは、この星から狼犬という種が絶滅するときだった。

牡犬のギャッピーが、子孫を残そうにも、子を産む雌の狼犬がいないのだ。
もはや、ギャッピーが生きていようと死のうと、狼犬という種にとって存在価値はないに等しかった。
雌のいない狼犬は、すでに滅びている種といっても過言ではなかった。
だが、ギャッピーは死ぬわけにはいかなかった。
ギャッピーは、今、別の犬科の種ではあるが、雪上犬の群れのリーダーだった。
リーダーとして、雪上犬の群れを生き延びさせなければならなかった。
狼犬としては、違う生き方だが、それが、今のギャッピーがせめても自覚できる、生きていることとの存在価値だった。
そのためなら、どんな敵が現れようと戦うつもりでいた。
フィレーナも今、自分の存在価値が自覚できるとしたら、人類の未来などより、もちろん自分の未来などより……まず、フィアイの人々や反乱軍が生きていくために戦うこと……。
「そうさ」
フィレーナは呟いた。
……何のためであれ、結局、僕は戦わなければならない。やっぱり、闘技士として育てられた僕は、戦うことが、存在価値なのかもしれない……
「本当に似てるね、僕たち……」
フィレーナは、ギャッピーの頭を撫でた。



フィレーナは決めていた。……僕は、帝国と戦う

「僕らは戦いのプロだ。相手がどんなやつでも、現れた敵に負けるわけにはいかない」
……結局、それしかないよ……それでいいじゃないか……ギャッピーは、そう言いたげに、大きく欠伸をした。
フィレーナは、少なくとも帝国と決着がつくまでは、あれこれ考えるのは止めにし、戦いに徹することに決めた。
それに……もし負ければ、当然、生きていることもなく、だから、あれこれ考えることもなくすみそうだった。
これからの戦いは、この星という限られた狭い空間の中で、生きることを賭けて帝国と反乱軍のどちらかが倒れるまで戦う闘技試合のようなものだ。
どちらが勝とうと負けようと、試合は悲しいが、少なくともフィレーナは、闘技試合に慣れていた。
戦いが始まれば何も考えない。
相手の息の根を止めること。
それが、すべてだ。
そして、フィレーナは、闘技試合に負けたことはない。
戦おうと決めたなら、闘技試合に負ける気はしなかった。

第1章

後を継ぐ者

その少年は、硝子張(ガラスば)りの部屋で眠っていた。
デビス中央高原ジャンガー、皇帝種のいる帝国の城の一室だ。
部屋の中央には、筒状(つつじょう)の硝子の中に柔らかい人工羽毛をしきつめたベッドがあった。
少年は、硝子の見せ物箱の陳列標本(ちんれつひょうほん)のように、横たわってかすかな寝息をたてていた。
少年の肉体年齢(ねんれい)は、十八歳(さい)だった。
だが、母親の胎内(たいない)から生まれて、まだ四年あまりしか経(た)っていなかった。
少年は、一歳にも満たない時期に帝国の実験素材として、その遺伝子(いでんし)に、急速成長促進処置(そくしんしょち)を受けていた。
それは、帝国人の進化形以外に、人類を継ぐべき種を求めて、帝国の最優秀種と皇帝種が、総力をあげて研究開発した、最新の生命技術だった。
実験は、万を越える奴隷(クレチア)や異民族の幼児に試されたが、期待どおりの経過を辿(たど)って成長している者は、わずかにすぎなかった。
しかも、それは、生体に耐久力(たいきゅうりょく)のある女児であり、男児の例はほんの数例にすぎなかった。
その中で最も順調な成長過程を示しているのがこの少年だった。

少年はその実験番号から一四九二と呼ばれていた。
だが、少年は番号で呼ばれるような無機質な存在には見えなかった。
屈強で精悍な体格を持ち、引き締まった四肢の筋肉には、作られたものではない敏捷さが見てとれる。
その顔立ちも整っていたが、繊細で美形な皇帝種の男たちとは違い、意志と個性が表面にでた力強さがあった。
そして、知能も帝国の最優秀種を凌駕し、皇帝種に拮抗できるほど高かった。
けれど、今の少年の寝顔だけはその容姿に似合わず、歳相応にあどけない部分があった。
今、少年は、夢を見ていた。
少年の耳に一人の女性の声が渦巻いていた。
「さあ、坊や、あの男の顔をしっかり憶えておくのよ」
少年の脳裏に青年の顔が浮かぶ。
少年の屈強な体に比べると、あまりにきゃしゃで小柄な青年だ。
悲しげに少年を見つめていた。
青年の足元には血にまみれた男の屍体がある。
青年の手は男の屍体の返り血に染まっている。
もう一度、女性の声が耳元でする。
「さあ、坊や、あの男の顔をしっかり憶えておくのよ」

少年は頷く。
「おぼえたよ。わすれるものか」
女性が青年の名前を、叫ぶ。
「お父さんを殺したフィレーナを」
「フィレーナ」
少年は、その名を飲み込むように呟く。
少年はいきなり、目を開いた。
少年は、眠りから覚めた。
あどけなさは消えていた。
そして、呟いた。
「忘れるもんか、私はあの男を殺す」
そして、俊敏に立ち上がると、寝台のかたわら、机の上にある立体映像写真の、操作盤に手を触れた。
立体写真が、テーブルの上に浮かびあがった。
赤ん坊を抱いた若い女と、顔を絵の具でぬり分けた道化が、並んで写っている。
「父さん、母さん……フィレーナは、必ず私が殺してやる」
青く澄んだ少年の目に、憎しみが膨れあがる。
「目が覚めたようだね。一四九二……いつもより目覚めが早い」

硝子の壁面の画像装置に、皇帝種のひとりが浮かびあがった。
雌雄両性の皇帝種だ。
「憎しみが、フィレーナの面影が、私を目覚めさせた」
十八歳の体をした少年の声は低く、感情を抑えていた。
両性の皇帝種は、立体写真を一瞥して言った。
「その男を殺したフィレーナを、当時、乳飲み児だったおまえが覚えているとは思えないのだがね……」
少年は無表情に答えた。
「私は、実験動物として、四年間で十八年分、成長させられた。実験というものは、何が起こるかわからないから実験するのでしょう。私の覚えているはずのない幼児の記憶が実験によって覚醒させられても、不思議はない。幼児の中には、出産時はおろか母親の胎内にいたときのことすら覚えている者もいるといいますから……なにしろ、私に起こることのすべては実験の結果です。予想できないことも起こりえるでしょう」
両性の皇帝種も、無表情に答えた。
「もはや、おまえは実験動物ではない。おまえは人間だ。人類存続の鍵を握ることの帝国で最も重要な人間の一人といえる。それは、自覚しているね？」
「最も重要な人間……ですか」
少年の口元が、かすかに歪んだ。

それはせせら笑いとも苦笑ともとれた。
少年は両性の皇帝種を見つめて言った。
「いまさら言わずとも、帝国のもくろみは、四年の間に十分教育されています」
両性の皇帝種は頷いた。
「その教育を理解できるだけの頭脳……おまえの頭脳の新皮質も、四年間で皇帝種の成人なみになっている」
少年は、冷めた笑みを絶やさず頷いた。
「ええ……よく理解できますよ。私の頭脳は帝国の思惑を十分了解しています。……帝国が、滅びかけた人類の存続を考えるのは、人類の進化の最先端をいく種族として当然のことでしょう。この世界を支配する帝国人には、人類という種に対する責任も義務も、そして、存続すべき人種を決定する権利もあるのかもしれない。どんな手段で、どんな人種が作られようと、人類存続のためには致し方ない。そのために私が実験素材として使われ、こんなふうに成長したことにも、今さら、文句を言う気はありません」
少年はもう一度、同じ言葉を繰り返した。
「ええ……よく理解できますよ。帝国の思惑はね」
そして、両性の皇帝種を見据えて言った。
「けれど、私のような人間に、人類を継ぐ資格があるかどうかといえば、その自信があるとはいえません。私のように急成長させられた人間は、その分、老化も急速にやってくるでしょう。

私の一年が人の四年半分だとすれば、まともに生きて二十年とは生きられない」

　両性の皇帝種は無表情に頷いた。

「確かにその懸念はある。だが、そうと決まったわけでもない。なにしろおまえたちが、この育成法をとり成功した最初の人間だ。生まれてからまだ四年……寿命が、あと何年あるかは、未だ結論が出ていない。おまえたち自身が指標見本になる」

「寿命は未知数でも、生殖と出産の能力は見当がつく。私のような人間が、子供を作れるのは、並の人間の雌なら十四、五から四十半ば過ぎまでとしても、私たちにとっては、ほぼ三歳半から、十歳ほどまでの期間にすぎない。生殖出産能力のない年齢になった生物は、生存する価値がないという生物界の法則を、われわれに当てはめるなら、私たちの寿命は十年そこらということになる」

　両性の皇帝種は頷いた。

「人間という動物は、もともと成長するのが遅く、繁殖に不要な老いの時期が長すぎる生物だ。寿命が長すぎるから増えすぎる。無駄に生きる時間が多すぎるから、生物としてはよけいなことを考える。人間という動物は、歳をとると、枯れるか欲ぼけするかのどちらかだが、人間の頭脳は、老いて枯れる方を選びたがらない。その結果が、欲得がらみの文明などという厄介なものを進歩させてしまった。

　あげくが、現代のこの有様だ。のろまな亀ならともかく、知能の高い行動力のある生物は、寿命が短いほうがいい。世代交替も早いし、間違いをやりなおすことも簡単だ。人間の歴史は、

老人が多すぎ、本来の生物としては生きる価値のない老人によって支配され過ぎた。人口増加を防ぐためには、産児制限よりも老人制限をすべきだった。戦争は若者でなく、それを企てた老人こそ出兵すべきだった。無用に伸びた寿命による、無用な老人こそ、人類にとって無用の極みだった。人は老いを恐れる。恐れるならば生きているべきでない。そもそも、老いた人間は、生物として美しくない」

両性の皇帝種は、溜め息を漏らし言った。

「という……意見もある」

そして、付け加えた。

「私も、あと、数年で、美しいという形容詞とは無縁になる」

「美しい？」

少年は首を振った。

「たとえ、人間が若かろうと歳をとっていようと、私は、もともと人間そのものを美しいとは思わない。二本足で、大きな頭を支えてよたよたと歩く、醜悪な生き物だ」

「醜悪か……確かに」

両性の皇帝種は、かすかに笑みを漏らした。

「今、話しているのは、その醜悪な生き物の存続の話だ。帝国人のように、急速に進化を追い求めた人間が存続すべきか。人間旧来の資質を持ちながら、寿命が短く世代交替の激しいおまえのような人間か。それとも、フィレーナのような昔のままの人間か」

「あなたのような人間はどうなんですか……？」

「ん？　私のような人間？」

両性の皇帝種は少年を見つめかえした。

「つまり、雌雄両性の……」

両性の皇帝種は、感情のない口調で答えた。

「男と女が同一体なら、なにかと便利だろうという軽薄なご都合主義で生み出された人間が雌雄両性だ。そんなものを生物と呼べるかね？　先刻、おまえは人間を醜悪な生き物と言ったね。人間が醜悪なら、私など拙劣だよ。雌雄両性の生き物としてはアメーバーにも劣る。仮に存続しても、人間とは呼べないだろうね。人間を素材にした奇なるものだ。亜流にすぎないよ。人類の存続とは呼べないね」

「存続か……人類の……」

少年は呟いた。

「そのために、おまえはここにいる。おまえは、存続できる人類の候補の一種としてこの時代にいる」

少年は、テーブルの上の立体写真を見つめた。

帝国にとっては、急速成長促進処置した少年、標本番号一四九二を生み出した母体と父体の資料写真にすぎなかった。

だが、少年は、参考文献につけられた母体と父体の名を、しっかりと覚えていた。

若い女……踊り子のミリカ……母体は母だった。
顔に絵の具を塗(ぬ)りたくった男……道化のフィコス……父体は父だった。
少年にとって両親だった。
少年は、少しだけ笑みを浮かべ、そのままの表情で両性の皇帝種を見た。
その笑みは、両性の皇帝種を哀(あわ)れんでいるようにも見えた。
「あなたたちは、人類の存続だけを考えていればいい。だが……」
「だが……？」
両性の皇帝種は、少年を見返した。
「私は……人類である前に……フィスだ」
「フィス……？　ああ……」
両性は肩を竦(すく)めた。
「おまえを生んだ奴隷(クレチア)の男と女が、付けた名前だったね」
「フィコスとミリカが生んだ、私の名前です。それだけが、あなたたち帝国が、作らなかった私自身です。そして、私がここに今こうしているのは、あいつが父を殺したからだ」
「フィレーナか……」
「そうです。私はあの男を殺す」
「いずれ、フィレーナと、戦う時がくる。人類の存続をかけてな」
「それはあなたたちの都合だ」

フィスは、きっぱりと言った。

「あなたたちは、四年間、人類の滅亡と存続を私に語り続けた。けれど私にとって、そんなものにふり回されて生きようとは思わない。私のたかだか二十年の人生を、人類が何万年もかけてやってきたことの帳尻合わせに使うのはばかげている。私は私自身の中につきあげてくる唯一、自分が自分であると感じられるもののために生きる。私は人類である前に、私自身です。私が私の感情の中で、唯一、本物だと感じられるのはフィレーナに対する憎しみです」

両性は、フィスを諭すように言った。

「今は憎しみだけに流されているときではない。フィレーナと戦うにしても、その目的は人類の存続のためだ」

フィスは首を振った。

「憎しみだけですよ。私がフィレーナと戦いたいわけは……私は人類などという能書きに夢中になる帝国人ではありませんからね」

「帝国人は能書きの夢を見る……か」

両性の皇帝種は、フィスに語るでもなく呟いた。

フィスは、続けた。

「私は、この硝子の城の中の四年間で、あなたたちから教えられたこの時代のことも、この時代を支配する帝国も、まして人類などという大げさな観念を愛せないし憎めもしない。教えられた知識は知識です。なるほどとは思う。けれど、私の頭の中に覚醒した母の言葉とフィレー

ナの顔、そして、足元に倒れた血まみれの父に、観念的な知識は勝てない。私はフィレーナをなにより憎んでいる。それが、私の感情のすべてです。私は、フィレーナを殺す。そんな私を、あなたたちがどう解釈しどう使おうとあなたたちの勝手だ。ただし今の私には、あなたたちの言う人類の都合など、関わりのないことです」

フィスはそう言うと、部屋の片隅に行き、立てかけてあった中型剣に手をやった。

「父の胸を貫いて命を奪ったのは、この手の中型剣だったそうです」

フィスは、鞘から剣を抜いて、硝子の切っ先を見つめた。

「フィレーナをただ殺すのではない。どうせ殺すならこの剣で、胸を貫いてやる」

そして、屈託のない笑顔で、両性の皇帝種に言った。

「できればそのとき、フィレーナのそばに、あの男の妻と子供がいてくれるとうれしいのですがね」

「フィレーナの妻と子供か……」

フィレーナが女であることを、両性の皇帝種は知っていたが、それをあえて言おうとしなかった。

男が女に対するとき、女が男に対するとき、自分の知ることのできない感情が生まれるかもしれない……敵対する両者に、万が一芽生えるかもしれぬそんな感情が、両性の皇帝種には、わずらわしくうとましく思えたからだ。

フィスは、両性のそんな気持ちに気づくはずもなく、続けた。

「フィレーナを殺すには、私が父の死を見た同じ状況が似つかわしい。そのためにも……最強の闘技士を超える技術が私には必要です。また、一汗かかねばなりません」
　フィスは、剣を持つと、部屋の外に出ていった。

*

　フィスは、硝子の城の中庭にある無人の闘技場の中央に立っていた。
　鎧兜の類はいっさい身につけていない。
　剣を抜いたフィスが、叫んだ。
「六人、いや、七人お願いする」
　起きたままの薄着だ。
「昨日は五人だったが二人も増やしていいのかね」
　競技場の、拡声器が聞いた。
「昨日は手応えがなかった。本当に昨日の五人は中央闘技士級の腕前なんでしょうね」
　フィスが答える。
「帝国機密情報兵団、黒い悪魔の精鋭でした。中央闘技士に勝ることはあっても、劣るはずはありません」
　拡声器の声が言った。
　フィスは苦笑した。
「その黒い悪魔を、フィレーナは今まで何人も倒しているはずですよね」

「確認できたもので、十人は越えます」
フィスは笑顔のままで言った。
「では、一度に十人お願いします。鎧(よろい)つきでね」
「十人……昨日の倍ですよ。危険です」
「私は、フィレーナほどのんびりした寿命は持っていないんですよ。実戦体験は、効率よくこなさなければなりません」
「皇帝の許可が必要です。あなたの体は、今のところ、人類存続のために大切な存在です」
「フィレーナに負ければ、あなたたちにとって大切な存在の私も、ただの屍体にすぎなくなりますよ。おそらく、フィレーナは黒い悪魔とやり合っていたときより、さらに強くなっていると思っておいたほうが間違いはない」
「しかし、必ずしも、フィレーナと闘技まがいの一騎(いっき)うちをするとは限りませんでしょう。敵は反乱軍、大集団です」
「いいえ、私の敵は、フィレーナです。フィレーナをおびき出すためには、反乱軍の大集団も叩(たた)かねばならないでしょうが、そこで、フィレーナに死んでもらっては困る。フィレーナには、反乱軍の将としてではなく、私の父、フィコス殺しの報復で死んで貰います」
フィスは繰り返した。
「私の相手を十人、出してください」
拡声器はしばらく黙っていた。

やがて、フィスに話しかけた。
「皇帝の許可が出ました。鎧をつけた十人にあなたの相手をしてもらいます」
フィスは頷いた。
「頼みますよ。手加減なしでね」
競技場の四方の扉が開いた。
黒い悪魔がそれぞれの武器を持って現れた。
黒い悪魔の一人が、場内に進みでた。
待ち受けるフィスの姿を探した。
だが、場内にフィスの姿はない。
……おれたちの相手はどこにいるんだ？……
そう聞きたげに、黒い悪魔は仲間のほうを振り向いた。
答えるように仲間たちの兜の向きがこちらを向いている。
だが、そんな仲間たちの様子に、黒い兜は、一瞬戸惑った。
仲間たちは、自分を見ているわけではないことに気づいたのだ。
……おまえたちはどこを見ているんだ？
彼らの見ているのは、黒い悪魔のわずかに頭上だった。
頭上？……おれの頭上になにが……
次の瞬間、黒い悪魔の脳天に何かが弾けるような音がした。

その音が、黒い悪魔の男がこの世で聞けた最後の音だった。
男は頭から顎の下まで切り裂かれた。
……なにが……なにがおきたんだ……
喉から血塗れの息が吹き出し、意識が途切れた。
兜ごと頭を叩き割られた黒い悪魔は、ゆっくりと崩れ落ちた。
黒い悪魔が、場内に入ってきた刹那に、跳躍したフィスが、頭上から中型剣を振り下ろしたのだ。
普通、中型剣の一撃ぐらいで大型の兜は、砕けはしない。
へこみがつくのがせいぜいだ。
だが、フィスの中型剣は、かすかに白熱光線を帯びていた。
中型剣の出力で発射する白熱光線では、その直撃を受けても、大型の兜は破壊できない。
だが、フィスは、白熱光線を発射したわけではなかった。
中型剣の硝子の刃先に、光線を薄く帯びさせたのだ。
光の粒子の細かさから硝子剣のきっ先まで、剣は、驚異的に鋭利な刃物になった。
そして、剣を兜に叩きつけるのではなく、切り抜いたのだ。
本来、砕けもせず壊れもしない兜が、カッターで紙でも切るように、すっぱりと裂かれていた。
切り口は、髪の毛のように細かった。

それは力ワザではなかった。
なみならぬ気合いと精神集中がなければできない技だった。
相手を倒そうとしたらいっさいの雑念を排除できる、体と知力は十八歳とはいえ、四歳の精神構造を持ったフィスだからできることかもしれなかった。
フィスは倒れた鎧には目もくれず、次の獲物に向かった。
フィスの気合いがこもった中型剣は、もはや、刀ではなかった。
俊敏な生きものだった。
一撃で獲物の喉元に食いつく毒蛇の牙のように研ぎすまされていた。
白熱光線の光を帯びた刃は、大型の鎧を、竹を割るように一文字に切り裂いた。
黒い悪魔たちの持つどんな飛び道具も、フィスをとらえることができなかった。
ねらいをつける前に、懐に飛び込まれ息の根を止められた。
とてつもなく早かった。
十人のうち、意識のあるうちに自分のからだが切り裂かれたのを自覚できた者は、ほとんどいなかった。
気づかぬまま屍体となって、転がっていた。
フィスは、十人を倒すのに、十回しか剣を振らなかった。
文字どおり、一撃一殺だった。
汗もかいていなかった。

フィスは、平然と剣を鞘に収め、呟いた。
「これじゃ、何人相手にしても同じだ。練習にならない」
そして、場内の拡声器に向かって言った。
「本当に、この人たちは、中央闘技士よりも強いのか?」
「技術的には、上でしょう……」
拡声器から、今までの闘技場の係とは違う皇帝種の声が戻ってきた。
女性の皇帝種だった。
皇帝種たちは、皇帝の広間から映像を通して、闘技場のフィスを、観察していたのだ。
フィスは肩を竦めた。
「だとしたら、私に勝てる闘技士はいないことになる。私が殺そうとしているフィレーナは、こんなにも手応えがないのか……」
「かもしれませんね。ただ、問題があるとしたら……」
「問題があるとしたら?」
フィスは聞き返した。
「たとえ、戦闘技術は中央闘技士をしのいでいるとしてもしょせん、黒い悪魔は暗躍する情報兵団です。相手を秘密裏に殺すことには慣れているでしょう。けれど戦いの一挙一動が生死を決する、死に物狂いの土壇場の経験は少ない。それに加え、黒い悪魔たちは、与えられた命令を失敗すれば、死で、つぐなわなければならないことを知っている。それを教育されすぎてい

る」

「何を言いたいのです？」

フィスは拡声器越しの皇帝種に聞いた。

「死を覚悟しているがために、それほど生に執着もしていない。死に物狂いで相手を殺そうとはするが、死に物狂いで生きようとはしない」

「生きようとはしない？」

「よく言えば、潔い。往生際が悪くない。さらに言えば死に際にもろい。失敗は死、負けることは死だと納得してしまっている。けれど、闘技士の戦いは、一日一日を生き延びるための戦いです。彼らは、死に物狂いで相手を殺すのではなく、死に物狂いで生きぬこうとしているのです。それが、黒い悪魔の戦いと闘技士の戦いの違いでしょう」

「そうですね」

フィスは、さわやかな笑顔で言った。

「私は、死を覚悟して戦う人間を殺すのではない。生きようとして戦う人間を殺そうとしている。生きたいと願っているフィレーナを……」

フィスは、拡声器に向かってきっぱりと言った。

「死を納得した屍体をいくら積み重ねても、練習にならない。私には実戦が必要です。生きようとしている人間と戦いたい」

「実戦体験を望むのかね……」

「いくら死を覚悟している黒い悪魔たちにしろ、やっても無駄だとわかっている練習での死を望みはしないでしょう。私も、人命を無駄にしたくはない。どうせ死ぬのなら、その命は、この星の人口を減少させるために、一人でも多くの反乱暴徒を抹殺するために……使われるべきでしょう。私が、黒い悪魔を殺せばそれはこの星にとって一人の減少。その黒い悪魔が死ぬまでに百人を殺せば、百一人の減少。どちらが、この星にとって有利か馬鹿でもわかる計算でしょう。もっとも、そんな計算はあなたたちのすることです。私は、フィレーナが、父を殺した以後に、望み願い、生きようとしてきたすべてを潰し、そして、この剣を、胸に突き立てる。私はそのために生きる。黒い悪魔はもういらない。一日も早い実戦体験を私は望みます」

皇帝の一人が答えた。

「しかし、今のところ、フィレーナたちは、追い詰められた反乱暴徒を救うために、海岸線には出没するが、決して内陸部には入ってこない」

「入ってこなければ、こちらが出ていけばいいでしょう」

「帝国人の多くは、海水が耐えられない体質だ。戦いはきわめて不利になる」

フィスは、あくまでも屈託なくさわやかな表情で微笑した。

「不利……？　この戦いの目的のひとつは、帝国人、反乱軍を問わずこの星の人口を減らすことでしょう？　各地区の個々の勝敗は二の次のはずです。私に言われるまでもなく、皇帝種の皆さんは、海の戦いを考えているはずです。その戦いに私を加えてほしいのです」

「一四九二……」

皇帝種は、フィスを実験媒体番号で呼んだ。

「フィスと呼んでください」

フィスはただちに言い返した。

「フィス……」

皇帝種は、フィスの名を言ってから続けた。

「おまえは、私たちのやろうとしていることをよく理解しているようだ」

フィスは肩を竦めた。

「私の頭脳は、四歳の子供ではありませんからね」

「敗けるとわかっている、いや、全滅さえ予想できる海の戦いに参加したいのだね」

「私は、海に弱い帝国人ではありません。異人種……フィレーナと同じ奴隷出身ですよ。帝国軍が全滅しても、私自身の命は、そうはいかない。いかせない。フィレーナを殺すまでは……」

「フィス……」

皇帝種は、フィスに言った。

「おまえの帝国軍参加を考慮しよう」

「考慮しなくても、私はいきますよ……ね」

軽くそう言い置いて、フィスは、闘技場から出ていった。

＊

立体映像に映るフィスの後姿を見つめながら、皇帝種の一人が呟いた。
「ほとんど、凶器ですね」
「あの男の行動原理には、われわれの願う人類の未来も存続もない。あるのはフィレーナに対する憎悪だけのようです」
「そんな人間に、人類の存続が、未来が、託せますか？」
「人間という意味なら……」
両性の皇帝種が言った。
「われわれよりよほど彼のほうが、人間かもしれない」
「え……？」
皇帝種たちは両性を見つめた。
両性の皇帝種は、いつものように無表情な声で続けた。
「われわれは、憎しみや悲しみや、怒りや、いや、喜び、快楽……なんでもいい……およそ人間が持つという喜怒哀楽の感情で、何か動こうとしたことがありましたか……？」
一同は、しばらく黙っていた。
やがて、一番若い女の皇帝種が呟いた。
「感情に流され、理性を失ってはいけない。これが帝国人の理想像です」
「そうでしたね……」

両性の皇帝種は頷いた。

「そして、その理性的なわれわれの最大の願い……望みは、人類の存続です。しかし、万が一、それが、うまくいったとして、われわれは本当に喜ぶのでしょうか。逆に、もし、存続が不可能と結果が出たときに、われわれは本当に悲しめるのでしょうか……おそらく、どちらもない」

両性の皇帝種はきっぱりとそう言った。

「われわれは喜びも悲しみもしないでしょう。きっと理性的に思うのでしょうね。われわれは、帝国皇帝種として、人類の最高の進化形として、人類に対してやるべきことは終わったと……。ただそれだけのことでしかないような気がします」

両性の皇帝種は、黙って自分を見ている他の皇帝種を見渡した。

「だとしたら、人類の存続などというわれわれ帝国の主題は、われわれの本当にやむにやまれぬ感情から、本当に湧き出たものといえるのだろうか……われわれ、人間はこの星で一番優秀であり存続すべきだという理屈。生物の生きざまとしては、何の根拠もない理屈に頼って、動いていたにすぎないのではないか。理屈が優先し、感情を塗り固め隠し続けた結果、われわれは感情で動くことができなくなった。……人間のほんとうの姿は、どうあるべきだったのか……感情と感性で動いてしまうフィスのような人間と、理屈の裏打ちに頼って動こうとするわれわれと、いったい、どちらがより人間らしいと呼べるのだろうか」

「どちらであろうと、今までも、これからも続くのは、膨大な数の殺戮ですよ」

皇帝種の一人が投げやりに言った。
両性の皇帝種は頷いた。
そして、呟いた。
「人類の存続のための殺戮……過去にもありますよね……民族の存続のため……宗教の存続のため……そんな集団の存続のための殺戮と、フィレーナ個人に対する憎悪によって起こる感情による殺戮……どちらが人間的ですか……」
「ともかく……」
最年長の皇帝種が口を開いた。
「あの男が人間的であろうとなかろうと、われわれは何かに人類存続の可能性を見つけなければなりません。手札はもはや三枚しかないのです。フィレーナかフィスかわれわれの進化形、超皇帝種か……」
「どうなんです？　われわれの切札は……」
両性の皇帝種が皮肉っぽい口調で聞いた。
「数日中には、誕生するはずです」
そのときだった。
……ここにいます……凄まじい圧力の波長が、皇帝種の脳裏を走った。
いきなり頭を殴られたような衝撃に皇帝種たちは思わず耳を押さえうずくまった。
だが、それは、外から耳に聞こえる音ではなかった。

まるで、均衡調整の壊れた音響装置のように、頭の中を縦横にかけ回っている。

……驚かないでください……あなたたちにどの程度の波長で話しかけたら快く伝達されるのか、その加減がわからなかった……。

皇帝種たちにとって、耳鳴りに等しい波長が、しだいに衰えていき、頭の中の左右上下を飛び回っていた声が、それぞれの皇帝種の前頭部に定位した。

……これで聞きやすくなったようですね……いいえ、何も答えなくて結構。あなたたちの考えていることは、言葉にしなくても、脳波から直接、解読できます。そう、もうおわかりですね。……私はあなたたちが超皇帝種と名づけた人間の意識です。……誕生したのは数日前ですが……自分がなんなのか、納得するまでにいささか時間がかかりました。……いいえ、私の実態に会いにこなくても結構です。ご存じのように、超皇帝種の部屋の養育管のなかの私は、人間の並みの美意識からすれば、あなたたちほど美しくはない。無理に会うことはありません。どうせ、今現在の私の能力では、この城の全域、どこにいても私と意志の疎通ができますから……もし、私に聞かせたくない思いがあれば、少しコツがいるでしょうが遮断してあげることも可能です。

皇帝種は互いの顔を見つめ合った。

いきなり始まった超皇帝種との会話にどうしたらよいのか戸惑っていた。

超皇帝種が、皇帝種を超えた能力を持っていることは予想された。

もしかしたら、世捨て人さながらに生きていた砂漠の森の民のように、特殊な能力によって

精神感応で対話する力もありうるとは考えていた。
だが、これほど唐突に、しかも、皇帝の広間に現れるとは思っていなかった。
しかも、すでに誕生して数日経っているという。
超皇帝種の部屋には、三十個の養育管があった。
人工子宮と呼んでもいい養育管には、人工の胎液が満たされ、その中に入っている超皇帝種は、いわば、胎児の状態だった。
養育管のなかの胎児に誕生の兆候はあった。
しかし、注意深く観察していたにもかかわらず、誕生の確認はできていなかった。
とすれば、超皇帝種は、胎児の状態で、すでに誕生していたことになる。
そして、誕生して、わずか数日で、皇帝種と意志を疎通できるほどの思考言語を習得している。
……予想された超皇帝種を超えている。これで、人間と呼べるのだろうか……あなたたちがそう思うのも無理はありません……私も生まれた瞬間、それを感じました……超皇帝種の意志は、それぞれの皇帝種の脳裏でそういった。
そして、やさしさを込めた波長で付け加えた。
……そんなに堅くならずに気楽に疎通しましょう。どうぞ楽な姿勢でおすわりください……
皇帝種たちは、言われるままにそれぞれの安楽椅子に座った。
超皇帝種の意志は、嚙んでふくめるようなゆっくりとした速度で、皇帝種の脳内に、言葉を

送り込んだ。

……帝国が、どのような意図と経過を経て、超皇帝種を生み出すにいたったかは、すでに、理解しています。私が、誕生した事実を、あなたたちに隠したのは、誕生したばかりのわれわれの意識に、あなたたちの持つ帝国的な既成の価値観を植え込められて、私たちの誕生にかたよった評価をしたくなかったからです。私は私自身で自分の誕生の価値を見つけたい。私はこの世界にとって何なのか、私は何のために生まれてきたか。私は、この世界に生まれたいと願って生まれてきたわけではない。ならば、私にとって、願いもせずに生まれてきた私の前に広がるこの世界は私にとって何なのか……私は生まれたばかりで、考えねばならないことが多すぎました……

両性の脳裏にふっと思いが浮かんだ。

……生まれた瞬間から、自己存在を哲学する人間……

生きたいと思う前に生きる価値を考える人間……それが超皇帝種だというのか……超皇帝種が答えた。

……当然のことでしょう。人間は、自分というものがこの世界に存在していると意識したとき、それは、なぜなのか……を思索します。それが、人間というものです……超皇帝種の生み出された目的を、皇帝種たちは当然用意している。

……それは、人類の存続……一様に浮かんだ皇帝種の思いに、超皇帝種は答えた。

……あなたたちの思惑と期待はわかります……しかし、生み出したあなたたちと、生み出さ

れた私とは別の存在です。あなたたちの期待にそえる存在かどうか……すなわち、超皇帝種に人類を存続できる資格があるか否か……の判断は、あなたたちが決める以上に、私自身が、結論を出さなければならない。なぜなら、私は私自身であり、あなたたちではないからです……

……で、その資格が超皇帝種にあるのかないのか……超皇帝種自身はどう評価するのか……

皇帝種は、その答えを知りたかった。

……さあ……まだわかりません……帝国の目的は、私を生み出すことにあった。私に資格がないとすれば、帝国勃興以来の歴史は、すべて無駄だったことになります。私としても、帝国と人類が費やした時間と、消えていった膨大な数の命を無駄にはしたくない。私も、また人類の一種として、人類の存続を望みたい。けれども、本当に人類がこれ以上、存続すべきかどうかの客観的判断による結論は、まだでていません……

超皇帝種の言葉は、皇帝種たちをとまどわせた。

……人類の一員としては存続したい……と、今、超皇帝種は言った。

……それが、人類としての主観的判断なら、客観的判断とはだれの判断のことなのか……まさか……

超皇帝種が皇帝種の頭に浮かんだ単語を先取りして伝えた。

……神……創造主……私は、そんなものを気取る気はありません。私は、まだまだ、人間から生み出された命にすぎませんよ……私は、その立場から、私は何のために生まれ、何のために存在するか……そして、私は何なのかをやがて摑むでしょう。私が何をするかはそれからで

す……

皇帝種たちは、超皇帝種に、聞きたかった。

……では、あなたを生み出したわれわれは今、何をすべきかね……

超皇帝種は、答えた。

……あなたたちがやりたいようにやりなさい……それがどんなものであれ、私は、何も言いません。それが、あなたたちの進んできた道であり、進む道でしょうから……ただし、私が誕生したことをあなたたちに示したのは、あなたたちの思うように、私が動くとは限らないと……それを、言っておきたかったのです。……あなたたちが、私に、なにかをしようとしても、なにかをさせようとしても……それが、私が、望むものでないかぎり、無駄です……

皇帝種のひとりが思った。

……それは、帝国は超皇帝種に手を出すな……ということだね……

超皇帝種が答えた。

……あなたたちは私を生み出した親です。だが、私は、誕生した瞬間から、親から自立した……そういう存在であることを認識していただきたいのです。私にとって不利になる、手出しをすれば、自衛のために、親の命であろうと奪うでしょう。この城の機能は、すでに、あなたたちの意志とは別に、私の意志でも動きます。あなたたちの邪魔もしませんが、邪魔もさせません。それに、私は、あなたたちとの接触を拒みはしません。ただし、その接触は慎重に行ってください。親と子という関係は、そこに一切存在しません。私は、人間ではありますが、

帝国人種ではないつもりです……

「帝国人の進化は、皇帝種で終わったということだね」

両性の皇帝種が口に出して呟いた。

……そう思っていただいて結構です……

超皇帝種は、そう答えた。

「かまわない……」

最年長の皇帝種がいった。

「人類が存続できるなら……それが、どんな人間であろうとも、人間でありさえすれば……もともと、帝国も、帝国人種もそのために作られたのだから……」

もう一人が言った。

「しかし、超皇帝種は、本当に人類を存続させたいのか？」

超皇帝種は、何も答えなかった。

いつのまにか、広間から超皇帝種の意識は、飛び去っていた。

皇帝種たちは、互いの顔を見つめあいながら、しばらく黙っていた。

「ともかく……」

皇帝種のひとりが口を開いた。

「われわれの考えていた存続すべき人類の候補は、出揃ったわけです」

もう一人が、頷いて言った。

「われわれは、今までどおりにやるしかありません。少なくとも、この星には、人間が多すぎる。この星が許容できる数まで、人間を減らさなければ、人類は、存続できないのですから」

一同は、ため息をついた。

だが、彼らの表情は、いつになく安らかだった。

超皇帝種は、帝国人であることを否定した。

しかし、皇帝種の進化形であることに変わりはなかった。

超皇帝種が誕生した今、帝国の価値観において、皇帝種はこの世界における、もっとも進化した人類ではなかった。

人類の存続と滅亡を握る次の世代が誕生したのだ。

皇帝種は、人類の最高位にいるという自覚ゆえに、今までどれだけ苦労したろう。

少なくとも、人類滅亡の直接の責任者にだけはなりたくなかった。

だが、その重荷は次の世代に移り変わったのだ。

しかも、その超皇帝種は、皇帝種の力をあてにしないとわざわざ宣言してくれている。

それならそれでいい。

……人類が滅びようと存続しようと勝手にやるがいい。

……後継者が、フィレーナのような人間か、フィスのような人間か、超皇帝種なのか、それは、彼らが、勝手に決めるがいい。

……これで、人類存続遊戯(ゆうぎ)の主役から降りることができる。

無責任なようだが、人類は、いつでもそうだったのだ。
その場さえ切り抜ければ、積もり積もった問題は、次世代にもちこされていく。
あとは、次世代が解決すればよいことなのだ。
「ほんとうにこれでよかったんですか」
両性の皇帝種が、いささか放心状態で呟いた。
だれもが、かなりの後ろめたさを感じていた。
だが、そんな後ろめたさより、責任を未来を担うだれかに先送りできた解放感は、なにより大きかった。
そして、人類の未来は……ここまで、関わってしまった以上、気にはしている。
気にはしているが、だから、なんだというのだ。
われわれは降りたんだ。
もう、傍観者なのだ。
あとは、残っているわれわれに残されたやるべきことをやればいいのだ。
皇帝種たちは、反乱軍と帝国軍の全面衝突……この星の人口の激減をさらに急ぐことにした。
皇帝種は帝国軍に、反乱軍に対する総攻撃を命じた。
帝国創設以来、上層部が初めて帝国軍の全軍に出した統一絶対命令だった。
……反乱軍……ならびに、反乱軍の疑いありと見られる異民族を徹底的に掃討せよ……敵の降伏投降は、認めない……

それは、敵の生存を許すなという意味だった。
さらに、帝国軍にとっても苛酷な命令も含まれていた。
……掃討のため、必要とあれば、海への出撃も辞すべからず……海への出撃は、海水に拒絶反応を示す並みの帝国人の体質を思えば、生きて帰るなというに等しかった。
今まで反乱軍は、不利な戦況になると、帝国軍の苦手な海岸線に逃げ込んでいた。
だが、統一絶対命令により、帝国軍は躊躇なく海岸線に、雪崩込んできた。
帝国軍の兵士たちの中には、汐気を含んだ海辺の空気に倒れる者や、症状のひどいときは死に至る者も続出したが、攻撃の手は緩まなかった。
もともと、命令系統が統一されているわけではない烏合の衆の反乱軍は、みるみるうちに東、南、そして、北の海岸地帯から追い払われ、残るは西の海岸線を残すのみとなった。

＊

三つの月が、海面に光を映し揺れている。
「海のフィレーナ」の全艦隊は、西部海岸地方の沖にいた。
海のフィレーナ軍の旗艦「フィレーナ」の指令室では、フィレーナを中心にした会議が行われていた。
一同の間には、先刻から重苦しい空気が漂っている。
帝国軍の動きは、フィレーナ軍にも手に取るようにわかっていた。
その情報は、リラが、分身のように操っている携帯通信電算機の、暗号盗聴解析能力に頼

るまでもなかった。

帝国軍は、作戦行動を秘密裏には行わなかった。

帝国の作戦内容は、通常の通信で行われ、フィレーナに、聞いてくれといわんばかりに垂れ流していた。

「もっとも聞かれて困るような命令じゃない。このやり方はただ、ひたすら力まかせに反乱軍を叩き潰せ……作戦と呼べるような代物じゃない」

フィレーナ軍の作戦参謀、バンニルは、帝国地図の西部海岸地方を指差しながら言った。

「確かに、帝国は、反乱軍を西部海岸地方に追い込んだ。しかし、強引な攻撃で戦死者は、帝国軍のほうが、圧倒的に多い。この戦いのやり方を見れば、明らかに、帝国上層部のもくろみが最終段階に入ったことを物語っている」

「最終段階かぁ……」

リラは、そう呟くと、携帯通信電算機の鍵盤を弄ぶように、「どんづまり」と、打ち込んだ。

「そう思って間違いない。だれが次の世代を継ぐかはともかく、人類がとりあえずこの星で存続可能な数まで、帝国はこの星の人間を敵味方構わず、無理やり減らすつもりだ」

ネストが言った。

「僕らの船で西部海岸地方に追い詰められた人たちを、助け出せるね」

フィレーナが、みんなの意見を聞くようなふうでもなく言った。

聞くまでもなく救出を、決めていたのだ。

「不可能ではないが、それが、おそらく帝国の狙いでもあるだろう」
　バンニルが言った。
　リラが、携帯通信電算機を見つめながら言った。
「西部海岸地方に追い込まれた反乱軍や流民は百万を越える。全艦隊二百隻の定員は十五万、もっともそれは、半永久的に、船で暮らせる数のことで、短期間運ぶだけなら、百万の乗船も無理じゃないわ。それに各母船に収容されている小型船を全部出して、手際さえよければ、ほぼ一日で、百万を海岸から海へ脱出させることもできるわ……計算上はね……でも……」
　リラは、ふーっと溜め息をついた。
「救出している間、帝国軍がぼんやり見逃してくれればのはなしよね……帝国軍のおじさんたちは、そんなにやさしい甘ちゃんかな……」
「甘くはない。しかし、この戦いが、帝国が勝つための戦いでなく、人類の存続という御大層な目的のためだとすれば、救出を黙ってみてくれるだろう。帝国軍と反乱軍では、まだまだ、帝国軍が圧倒的に勢力が強い。五分五分の戦いにするためには、これ以上反乱軍に減ってもらっちゃ困るだろうからな」
　そう言ってバンニルは、肩を竦めた。
「おいおい。そんなのありかよ」
　鯱のフィレーナことオルカが、すっとんきょうな声を上げた。
「あんたは、帝国の野郎がおれたちと五分の戦いをするために、見逃してくれるっていうのか」

「見逃してくれるわけじゃない」
バンニルは、首を振った。
「むしろ、フィレーナを次の戦いに誘い出すために、今回は見逃すだろう」
「たぶん……そうだろうね」
フィレーナは頷いた。
一同も溜め息まじりに頷く。
「どうやら、おれだけがわかってないようだな。持って回った言い方をせずに説明してくれ。あんたたちほど物わかりのよくないおれにもわかりやすいようにな」
オルカは、頭をかきながら一同を見回した。
「説明は、元闘技評論家のおれがしよう」
ナスカが苦笑しながら言った。
「たとえ、百万の人間を救い出せたとしても、それは、一時的なもんだ。いいか、今までおれたちは、五百万以上の反乱軍を助け出した。それに加えて今回百万だ。こいつらは、いったいどこで、生きていく？」
「どこでって……」
口ごもるオルカの代わりに、リラが答えた。
「どこでも生きられないわ。生きていくのに必要な食糧(しょくりょう)の採れる土地は、この星に帝国しかないもん。氷の上のフィアイの土地だって、あと、数か月で溶けてなくなっちゃう」

「帝国の上層部は、フィレーナと帝国の戦いで、人類の次世代を決めたいと考えている。しかし、もし、フィレーナに戦う気がなく、船に乗ったまま、海を漂う道を選んだらどうする？」

ナスカがオルカに言った。

「戦いも起こらず決着もつかん……」

オルカが答えた。

ナスカは、頷いて続けた。

「しかし、五百万以上の人間は、船の上だけでは生きれるはずがない。ましてドラコニアのような不毛の土地や、汚染された帝国の周辺の島々もとうてい生きていける場所ではない。帝国の土地が必要だ」

「その土地は、この星の中には、帝国の領土しかない。われわれは、帝国の土地を掴み取るしか生きる場所はない……」

バンニルが言った。

フィレーナは、黙って、帝国の地図を見つめている。

ナスカは、そんなフィレーナの様子に肩を竦め、オルカに言った。

「とはいっても、フィレーナが勝つ見込みのない帝国と正面からぶつかるような自殺行為をする無謀な男にも見えない」

「無謀を絵にしたようなおれとは違うか……」

オルカは、苦笑した。

「急激に人口を減らしたい帝国としては、それでは困る。しかし、帝国軍の勢力が、反乱軍とせめて五分五分ほどの力に落ちたとしたら……おそらくフィレーナは、未来への存続を賭けて帝国に戦いを挑むだろう」

「でも……」

リラが、口をはさんだ。

「仮に、無事に百万の反乱軍や流民さんを助け出せたとしても、帝国軍の力はまだまだ私たちよりも強力だわ。五分五分とはとても言えない。とんでも八分かな」

そして、げんなり言った。

「しゃれにもなんない……」

オルカも頷いた。

「そりゃそうだ。やつらがわれわれの救出を黙って見過ごせば、西部海岸に戦いは起こらない。こちらも無傷なら、あちらも無傷。帝国軍は弱くはならん」

オルカは、顎をなぜながら付け加えた。

「そもそもだ……。人類存続のためだかなんだか知らんが、せっかく敵に勝てるのに、わざわざ自分の強さを弱くして、相手と五分五分の勝負をしようなんて発想を、帝国人が持つかね。強いやつに負担をつけて、平等な戦いなんて……闘技試合じゃあるまいしな」

ネストが、ぼそりと言った。

「闘技試合は、帝国人がもっとも気に入っている趣味さ。いろいろな趣向を凝らして、戦いを

楽しむ。今回の闘技試合にも趣向があるとしたら、気になることが一つある」
「気になること？……実は、私もそれを考えていた」
パンニルがネストに言った。
フィレーナが、呟いた。
「なぜ、西部海岸なのか……」
「フィレーナ、おまえもそれを？」
ネストが聞いた。
「ええ。帝国軍の勢力が一番強いのは、首都のある東部地方です。だから、反乱軍が追い出されるのはよくわかります」
フィレーナは、立ち上がって帝国の地図の前に行った。
「けれど、反乱軍が逃げるとしたら、辺境の東北部海岸か西北部海岸、でなければ、つい最近まで僕らが占領(せんりょう)していた南部海岸地方ということも考えられる。でも、現実には、西部海岸地方に追いつめられてしまった。西部海岸地方は北や南ほど、帝国軍の手薄な地区じゃない……それに……」
フィレーナは、地図の西部海岸地方……その背後にある砂漠地帯を指差した。
それは、かつてフィレーナが、狼犬(ウルフドッグ)のギャッピーとともに、横断した砂漠だった。
「ここでは、僕と出会った森の人たちが帝国軍隊を全滅させた事件がありました。それ以来警(けい)戒(かい)した帝国上層部は帝国軍を補強しているはずです。帝国の西部は、反乱軍が避難(ひなん)するのに、

適した地方じゃありません。にもかかわらず、反乱軍が追いつめられてしまったのは、なぜなのか……」

オルカが答えた。

「当然、西部に追い込まれるように、帝国軍が動いたからだろう。自分の有利な位置に敵を追い込むのは闘技のイロハだ。なあ……フィレーナ」

「なぜ、西部なんです」

フィレーナが、オルカに聞きかえした。

そのときだった。

部屋の壁際で、一同の話を黙って聞いていたラズルが口を開いた。

「西部海岸にはルシベという街がある……」

ラズルが、それまで話に加わらなかったのにはわけがあった。

フィレーナのかたわらで、携帯通信電算機を操っているリラをじっと見つめていたのだ。

ラズルは、リラを一目見たときから、自分の人生を変えたあの娘であることに気がついていた。

だが、まだリラは気がついていないようだった。

無理もないのかもしれない。

ラズルは、あれから変わり過ぎた。

自分でもそう思う。

それに比べ、あの娘は、あのあと何があったのかは知らないが、少しも変わっては見えない。確かに、大人にはなっているのかもしれないが、淀んだ空気を弾ましてしまう。溌剌とした眩しいほどの明るさは、どんなに暗い話題を語っていても、淀んだ空気を弾ましてしまう。

変わってしまった自分と、変わって見えないあの娘との落差に、見つめれば見つめるほど呆然としてしまうのだ。

どこに逃げようと、何年かかろうと、必ず捕まえて凌辱の限りをつくし、踏み躙り、おれの人生を狂わせた償いをさせてやる……かつてはそこまで思っていた娘を目の前にして、今はもうどう対処していいのか、自分でもわからなかった。

そんなとき、耳に飛び込んできたのが、自分が必要とされるかもしれない問題だった。

ラズルは、リラへの感情から逃げるように、一同を見回してから地図を指さして話し始めた。

「ルシベという街には、帝国の他の都市には見られないものがある」

一同はラズルに注目した。

ラズルは自分を見つめるリラと視線を合わさぬようにしながら話し出した。

「まあ、これも帝国機密の一つといってもいいかもしれない。おれは、かつて、帝国の税務局員だった。そこで聞いた話だが、四十年前、幻の脱税という事件が、ルシベで起きたそうだ」

「おれたち反乱軍には、税金の話は無用な気がするがね」

オルカが肩を竦めた。

「税金を払う、払わぬは……この話を聞いてからにしてくれ」

ラズルは、オルカに釘をさして話を続けた。
「税務局の人間は、人に嫌われがちだが真面目なやつが多くてね。ある熱心な税務局員が、首都からルシベに膨大な量の金属が流れこんでいるにも関わらず、金属税の払われていないことに気がついた。税務局員は、当然調査した。優秀な税務局員から逃れられる脱税はない……叩けば必ず埃だ」
ラズルは、地図の上のルシベを指ではじいた。
それはラズルが脱税を摘発するときに見せる癖だった。
思わず昔の癖を出してしまったラズルは、指を見つめ、自分にしかわからない苦笑を漏らした。
「ルシベという街は、海が苦手でない帝国人以前の人間たちにとっては、海岸の保養地として栄えた街だ。大量な金属を必要とする産業はなかった。それは、帝国勃興以後も変わらない。帝国の時代になって、保養地としての価値もなくなった街は廃れる一方だった……。では、大量の金属は、いったい何に使われていたか」
「優秀な君の仲間は、埃を見つけたわけだ」
パンニルが話の先を見越して言った。
「埃どころか巨大な粗大ゴミだった」
ラズルは続けた。
「調査結果は信じられないものだった。その税務局員はその結果に当惑した。発表すべきか、

そのままにしておくべきか……第一、結果を発表してもだれも信じなかっただろう。結局、迷っている時間は短くてすんだ。その税務局員は、その年、原因不明の死を遂げた」
「帝国お得意の、心不全ですね」
テスが呟いた。
帝国において、病名が心不全と名づけられた死は、ほとんどが暗殺、抹殺と同義語だった。
「おれは医者じゃない……でも、まあ……あなたの言うとおりだろう」
ラズルは、テスに頷き返した。
リラに対する感情よりも、より大きな気持ちがそこにあった。
ラズルはそんな自分に照れて、それからいささか慌てて先を続けた。
「その税務局員は、死の間際、うわごとのように繰り返していたそうだ。信じられないことをね。あまりにも信じられないから、彼のうわごとは、税務局内の隠語的な諺になった。ちなみに調べれば必ず出てくる脱税を、建物のトイレには税金が流れているというんだが、一方、調べても出てくるはずのない脱税にふり回されて無駄足を踏むことを、ルシベの船を調べるような真似をするなというんだ……」
そこまで言って、ラズルは苦笑した。
「税務局員の諺など、みんなには関係ないかね……？」
だれも笑わなかった。
ラズルは、一同の気持ちを代弁するような溜め息をついてから言った。

「海を嫌う帝国人は船など造らない。だが、ルシベでは鉄の大艦隊が作られていたというんだ。……だが、今思えば、作られていても不思議はない。一般人は知らされていなかったが、その当時、帝国にはフィロセラという敵国があった」

ラズルは、フィレーナに言った。

「フィレーナ、あんたの国だね。帝国は、ルシベで作った艦隊で海からフィロセラを攻撃しようとした。だが、その計画は実行されなかった。おそらく、フィロセラの海軍にかなうだけの船ができなかったのかもしれない。結局、フィロセラは、陸から攻撃されて滅ぼされた。帝国は、無駄に作ったものは秘密にする。優秀な帝国人が無駄なものを作るはずがないからね」

ラズルは、指令室の窓辺を見た。

海面に反射する月の光が揺れていた。

「月か……あの月だって……帝国が作ったものでないにしろ、空に浮かぶ月の三つのうちの二つが人工のものだということすら秘密だからね。おそらく、税金の帳簿にものっちゃいないだろう」

「それが、事実だとすれば」

バンニルが言った。

「われわれの前に四十年前の帝国艦隊が現れる」

「フィロセラで造られた僕らの船は、氷の中に眠っていたとはいっても、四十年前の、帝国の造船技術に比べれば……」

フィレーナは、そういってから溜め息をついた。
「帝国の艦隊は……僕らの船に勝てる……？」
そこまでいって……フィレーナは黙った。
帝国の統一絶対命令をフィレーナたちは知っていた。
……必要とあれば海への出撃も辞せず……
彼らは、苦手の海に……何のために出てくるのか……
帝国の戦力がフィレーナたちの戦力と五分五分になるために……
おそらく、乗船している帝国兵はその目的を知らないだろう。
だからといって……
フィレーナは、一同に言った。
「海で戦う……でも、帝国がその気なら……やるしかない。海岸に追われてきた人たちは、ろくに食べるものもない。このまま海岸線にいても、帝国と勝ち目のない戦いをするか、戦わなくても飢えて死ぬのを待つだけです。海岸の人たちを海へ運びましょう」
だれも、他の意見を見つけ出せなかった。
ネストが、ぽつりと呟いた。
「海へ運ぶか……」
いままで、追われた反乱軍を海へ救出する……いままで救出と呼んでいたことが……運ぶとしか言えなかった。

人間が海に出たところで、食糧を手に入れ生きていける場所は、帝国の土地以外、この星にはほとんどないのだ。

フィレーナは頷いた。

「陸と海……帝国が、わざわざ僕らに有利な海を、戦いの場に選んでくれるなら……それを断る手はないでしょう。……場所がどこでも、僕らが生きていくためには、帝国と戦わなければならないんですから……帝国のお望みどおり……今度の戦いは、……海です」

フィレーナは、窓の外を見た。

三つの月に照らされた海が揺れている。

薄暗い夜の今は、海面をたゆたう月の光しか見えない。

昼間見る海は汚濁した血の色だ。

けれど、それはあくまで汚濁であって、血そのものではない。

しかし、戦いが始まれば、本物の血の色に染まる。

フィレーナの海は、そんな姿を、夢の中ですら見せたことはない。

フィレーナは、呟いた。

「でも……次の戦いは海だ……」

そして、自分に言い聞かせるように、もう一度きっぱり繰り返した。

「海さ」

もう一度きっぱり繰り返した。

第2章

海の戦い

西部海岸に朝がくる。
赤く汚濁した海の向こうから燃えたぎる日が昇る。
海面に漂っていた霧が晴れていく。
一本の燐寸のような棒状の線が、霧の向こうからかすかに姿を現す。
地鳴りのようなどよめき……。それは、海岸線を埋めつくす百万を越える人々の声だ。
やがて、だれかがひとつの名前を呼ぶ。
「フィレーナ」
どこかで、もう一人が叫ぶ。
「フィレーナ!」
たちまち、その声は、波のように広がり海岸すべての声になる。
「フィレーナ!」
「フィレーナ!」
「フィレーナ!」
海に現れた燐寸棒のようなそれは、一つ、また一つ、海面の陽炎に揺れながら数を増してい

く。
それが数え切れないほどに海を埋め、しかも帆船の帆柱だとわかるまで、長くはかからなかった。
海辺の人々は、手に持った荷物を浜に置いた。
できるだけ荷を減らし、乗船できる人数を増やさねばならない。
しかし、だれ一人、手に持った武器は捨てなかった。
「乗船は着のみ着のまま……ただし、武器を各自一つだけ携帯すること……」
前もってフィレーナの艦隊から、そんな注意事項が、海辺で船を待つ人々に伝えられていた。
それは、仮に海岸から救い出せたとしても、次に待っているだろう帝国との戦いに備えて、人員分の武器を確保しておくべきだ……というバンニルの提案だった。
海辺の人々は、海の上で……そして、海岸から救出されたあとに、武器が必要な戦いがあるのかどうかはわからなかったが、ともかく、言われたとおり人々は老若男女問わず、それぞれに、武器を持っていた。
逃亡の途中に武器をなくし、周囲の人から調達できなかったものは、死んだ帝国人の屍体から武器を奪い取ったものもいた。
一つだけと決められた以上、それぞれの能力体力に合った、最も使いやすい武器を持っているのは当然のことだった。
だが、少なくともその海岸線で、武器を使う必要はなかった。

今まで、苦手の汐風が強く吹こうが、人体に確実に害のある波を被ろうが、猪突猛進で反乱軍を追撃してきた帝国軍が、この時だけはなりを潜め、海岸線に姿すら見せなかった。

帝国は、フィレーナの邪魔をせずに反乱軍を救出させようとしている。

そして、海を戦いの場にする。

その意図は明らかだった。

リラの計算どおり、海岸に追い詰められた反乱軍と流民の群れが全員フィレーナの艦隊に救出されるまでまる一日とかからなかった。

フィレーナの艦隊は、四倍の定員を載せて西部海岸を離れた。

どこへ……向かって……？

どこへも行き場はなかった。

今までの救出で、帝国以外に人々を一時的にも収容できそうな土地は、すでに満杯だった。

帝国のほかに船に乗った百万以上の人間が、生きていける場所など、もうどこにもなかった。

フィレーナの全艦隊は、沖に出ると、ただ風に任せて漂っていた。

そして、一日が経った。

翌日は晴天で、風もなく、汚濁した海は淀んだ沼の水面のように動かなかった。

「いつまでも、ここに浮かんでいるわけにはいかないわ」

リラは、携帯通信電算機を見つめて唇を嚙んだ。

実は、乗船した百万人の食糧は一日分もなかった。

今は、海岸から脱出したばかりで、人々は興奮し、食糧のことなど気にする余裕はなさそうだったが、二三日もすれば、飢えのために、暴動が起きても不思議はない状況だった。

　もちろん、フィレーナにも、それはわかっていた。

「帝国の出方をぎりぎりまで待つしかない。海で戦うか、陸で戦うか。僕らは帝国の誘いに乗って海を選んだ。このあとの帝国のもてなしがどんなものか、やつらに任すしかない……だろ……？」

「気が変わって、帝国さん、私たちをすっぽかしたらどないしょう」

　リラが、呟いた。

「もしも、帝国がこのまま僕らを海の上にほうっておくつもりなら、僕らは食糧を求めて帝国に戻るしかない。そして、陸の上で戦いが始まるよ。そんなことは帝国もわかっている。とすると、僕らが、みんなを海の上に運んできたことも無駄になるし、帝国が、あの海岸で、僕らを見逃したことも無駄になる。みんなが乗船している最中に、僕らを攻撃すれば、簡単に僕らを叩くことができたはずだからね」

「帝国は無駄なことはしない……。でも、この遅刻は何？……海の上の戦いを望むなら、なぜ、出てこないの……？」

「確かにそうよね……」

　船の舳先で、風の様子を見ていたフィラーレが、指令室に入ってきて言った。

「今日は風もないし、波もない。私たちの帆船は、風がないと素早く動けないわ。帝国が攻撃

を仕掛けるなら、今が絶好の機会のはずだわ」
「今、艦隊の真ん中に超爆弾を撃ち込まれたら、ひとたまりもないぞ」
オルカは、大型剣の柄を、何度も握り締めながら言った。
「あいつが爆発したら、おれの剣なんぞ子供のつまようじだ」
オルカはいらついていた。
オルカの脳裏には、昔、フィレーナと戦ったとき、帝国の撃った超爆弾のために軍のほとんどを一瞬のうちに失った記憶がはっきりと甦っていた。
フィレーナの留守中、反乱軍を、南部海岸地方の各地に分散させたのは、帝国が、万が一、超爆弾を使用して攻撃してきたときに、その被害を最小に防ぐためだった。
だが、今、この海域には、フィレーナの全艦が集結していた。
オルカの言うように、超爆弾が一発あればフィレーナと反乱軍を、全滅させることも可能だった。
「落ちつくんだね」
パンニルがオルカに言った。
「帝国が超爆弾を撃つなら、われわれが海に出る前、あの海岸でとっくに使っている。海上で使ったんでは、沈む船やら吹き飛ばされる船やら……何人が生き残り何人が海の藻屑になったか、戦果の確認がやりにくい」
「おそらく帝国が超爆弾を使うことは、もうないと思います。これ以上の超爆弾汚染は、この

星自体の命取りになります……ですよね？」
テスが同意を求めるようにネストに言った。
ネストは頷いた。
「帝国は、人類の存続のために作られた。その基盤であるこの星の環境を、これ以上痛めつけはしない」
「じゃ……帝国はいったい何を待ってこんなにぐずぐずしているんだ」
オルカは、ラズルを見ていった。
「この税務局反乱軍殿の話じゃ、帝国だって船を持っているはずだろう。なぜ戦いに出てこない？」
そのときだった。
「あの……」
フィラーレが小声で言った。
「お願いです。少し静かに……」
一同は、フィラーレを見た。
フィラーレは、入ってきた扉のほうを振り返った。
扉は微かに開いていた。
フィラーレは、扉から甲板にでて、船首のほうを見つめた。
青空はどこまでも晴れわたっている。

だが、かすかに、フィラーレの髪が揺れた。
「風です……それも……この風は普通じゃない」
「普通じゃないって……」
フィレーナが聞いた。
「嵐です……それもかなり大きな……」
「そんな……雲一つないのに……」
リラはきょとんとした顔で空と海を見回した。
フィラーレは、ほほ笑んで言った。
「忘れたの？　私の名前の意味を……」
「フィラーレ……海の声？」
「私は通訳……でももともとは、帝国の言葉を通訳するという意味じゃない。海の声、海の風、海の波を通訳するの。私は、海の天気が読めるの」
「うん。だって、言ってたね……」
リラは頷いた。
「もうすぐ嵐がくる。あなたの通信機で、向こうの船にいるファンドナに伝えて。戦いはともかく、嵐の海を乗り切るのは、私たち、フィアイの民にまかせて……」
そして、指令室の一同に言った。
「みなさんもそれぞれの船に戻ったほうがいいと思います。嵐がきてからでは、乗り移れない

かも知れません」

そして……フィラーレの予想どおり……その日の夜から、海は荒れ始め、夜明けには暴風雨になった。

その嵐は、この星で起こる最大規模の暴風雨に数えられるほどのものだった。

風雨は海を狂暴な悪魔に変えた。

膨大な海の力が渾身の力をふりしぼって襲いかかった。

さかまく波にまかれ、巨大な帆船艦隊は、風に舞う木の葉のようにふりまわされた。

甲板に出れば雨と風と叩きつける波で、流されないように、柱や綱にしがみつくので精いっぱいだ。

だが、生まれながらに海とともにいたフィアイの人々の熟達した操船技術は、巧みに波を乗りこなし、二百を越える大艦隊でありながら一度の衝突も起こさなかった。

「ぶつからないなんて信じられない……これって魔法……？」

リラは、フィレーナに携帯通信電算機を見せながら驚嘆の声を上げた。

「だって、私たちの藻の船は電探にも映らないってのに。外は目も開けてられない嵐だってのに……どうしてごっつんしないでいられるわけ……？　これはすごいぞ」

フィレーナは、携帯通信電算機を覗きこんで言った。

「電探にも映らないって言ったよね……？」

「うん……藻は金属じゃないもん」

「じゃ……これなに……」
フィレーナは携帯通信電算機の画面を指差して言った。
「え……？」
リラは、改めて携帯通信電算機の画面を見た。
無数の点がひしめき合って、動いていた。
「嫌だ。いつのまに……何これ……」
そして、呟いた。
「私たちの船じゃない……だって、この電探に反応するのは金属の船……」
そこまで言ってリラはフィレーナを見た。
「これって、もしかして……もしかしなくても……帝国の船……」
携帯通信電算機の画面に映ったその数は、フィレーナの全艦隊よりも多かった。
四十年前に作られ、使用されることもなく眠っていた帝国唯一の大艦隊が、出動したのだ。
「リラ……通信で、全艦に迎撃態勢を……」
だが、その言葉が終わらぬうちに、携帯通信電算機から、フィラーレの声が聞こえた。
「敵艦隊、接近確認……以後、敵に位置をさとられぬため、すべての通信を遮断。……各艦の独自判断により迎撃してください。フィレーナ……船を操るのは私たちに任して。この嵐が止んで生き残っていたら会いましょう」
続いて別の艦からバンニルの声が聞こえた。

「これより艦隊単位の行動は解除。あくまで、各自の艦の生き残りを図られたし。帝国は海に弱い。嵐は、われわれにとって願ってもない味方だ。各艦の奮闘を祈る。では、これにて、通信を遮断する。各艦の諸君……フィレーナは、いつも諸君とともにある」

そして、通信は切れた。

荒れ狂う海の咆哮だけが耳を圧していた。

＊

「ルシベの帝国艦隊が、フィレーナの艦隊に突入しました」

西部海岸地方の地図を見つめながら皇帝種の一人が言った。

地図の上には熱帯性低気圧の気圧線が渦巻いている。

「予想どおりの嵐かね」

もう一人が聞いた。

「予想を遥かに超えた規模の低気圧です」

「予想を超えた？……帝国の計算がずれるのは珍しいことだね」

「気象にかんしては珍しくありませんわ。帝国は、世界征服達成まで、気候天候など度外視して各地を侵略し続けました。帝国の科学力は自然の力に左右されるほど弱くない。事実、雨が降ろうと、風が吹こうと超爆弾は爆発する。帝国の持っている武器は太古の火縄銃とは違う。たとえ干魃が続こうが冷夏が続こうが、帝国の合成食品には関係ない。帝国の食品工業は、太古の農作地とは違う。科学は、とうの昔に、この星の自然を凌駕した。そんな科学伝説が罷り

通っていましたからね。この星の気象観測は、この数百年、一歩も進歩していません。さらに、数百年前までは、無数にこの星の上空を回っていた気象衛星も、とっくに寿命がきて、いまや、大気圏外のごみに過ぎませんもの」

皇帝種の女が、皮肉を込めるわけでもなく、きわめて事務的に説明した。

「まして、今回の嵐は、帝国とは直接関係のない海上の気象です」

「しかも、刻々と疲弊しているこの星の自然だ。それによって、どんな気象現象が起きるか、予想できるはずがない。天候に関する限り何が起きても不可抗力だ。……ということで、経験不足の帝国艦隊は出撃してしまった」

皇帝種の男の一人が無表情に言った。

「現存する帝国軍勢力の三分の一を乗せて……ね」

「もし、この海上の戦いで帝国艦隊が全滅すれば……帝国軍全体に致命的ともいえる動揺が起きる。軍を離反して、反乱側につく者が続出するでしょう。この星の気象は予測できなくても、軍からの離反は帝国内部のこと……完璧に予想できます」

両性の皇帝種の言葉が、抑揚なく聞こえる。

「そして反乱軍と帝国軍の数はほぼ五分と五分になる」

「帝国滅亡への最悪の脚本ですな」

「人類存続への脚本です。最悪であることには変わりありませんがね」

皇帝種たちの表情は、もう、無表情というよりこわばっているとさえ見えた。

「けれど……」
一番若い皇帝種が呟いた。
「生物にとって、これほど疲弊した星の自然の中だというのに、発生した熱帯性低気圧が、これほど成長しようとは……」
「この際に限って、予想以上の嵐は、計画を完璧にするだけです。帝国艦隊の全滅の可能性はさらに高まったのですから」
「超皇帝種は、この戦いをどう思ってみているんでしょう」
あの日以来、超皇帝種は皇帝種たちの意識の中に現れなかった。
この日も、超皇帝種は黙ったままだった。

*

暴風雨の海で何が起こっているのか……フィレーナとリラは自分の乗る旗艦フィレーナ以外のことは何もわからなかった。
敵艦が、近くにいることは携帯通信電算機の反応でわかる。
だが、それがどこなのか見当がつかない。
旗艦フィレーナは波に翻弄され、自分の位置さえ定かでなくなっていた。
今、前方だった方向が、次の瞬間、船尾に変わる。
前後左右、東西南北の方向が、くるくる変わる。
船体が動き過ぎるから、敵が携帯通信電算機に映っていても、位置関係がさっぱりわからな

い。

画面に映っている敵艦の数さえ、瞬時にこちらの位置が変わるから数え切れない。

リラは、敵の位置確認を諦めるしかなかった。

波涛はふくれあがり山となり、たちまちのうちにふかい谷に変じる。

旗艦フィレーナは、波乗りの管路を滑るように巧みに崩れ落ちてくる波の壁をすり抜けていく。

艦橋の操舵室で、黙々と、舵と帆の向きをあやつっている船長はフィアイの獣皮艇乗りの一人だ。

フィレーナの乗る旗艦の船長だという役目上、操船の技術よりも、むしろ、帝国語が話せる獣皮艇乗りという理由で、フィラーレから白羽の矢を立てられた男だった。

獣皮艇乗りとしては、取り立てて優秀な男ではなく、普通の腕前だと言われていた。

旗艦フィレーナは、艦隊の中で比べれば大きな船ではない。

優秀な獣皮艇乗りは、もっと操舵の難しい巨大な帆船に回された。

だが、普通の腕前だといわれても、フィレーナはその男の技術に舌を巻くしかなかった。

どう操れば、これほど巧みに船を動かせるのか、フィレーナには見当もつかなかった。

しかも、外はまるで見通しのきかない暴風雨の海なのだ。

ただ、わかっているのは、他の船にはさらに操舵に巧みな男たちが乗っており、それぞれの船が、少なくとも、嵐の脅威からは身を守れているだろうということだった。

数時間が経った。
嵐は衰えを見せるどころか、さらに激しさを増していた。
そのときだった。
「あれは……」
今まで一言もしゃべらなかった船長が、目の前に盛り上がる波涛の向こうを見つめ、呟いた。
「え……」
フィレーナは、船長の見つめる方向を見た。
青白い稲光が、強風に乱れ飛ぶ雲間に見えた。
「敵だ」
船長が言った。
リラが、携帯通信電算機に目を落とす。
画面に反応がある。
「嫌だ！　右舷前方に、金属反応。距離は……」
「目の前」
船長が言った。
いきなり目の前に膨れ上がっていた波が、逆落としの谷に変わった。
旗艦フィレーナは、波の坂を一気に駆け降りていく。
谷の底に、船がいた。

棺桶のような鉄の固まりだ。
無数の砲塔が針山のように鉄の固まりを覆いつくし、それぞれの砲塔の先からは白熱光線が無闇やたらと放出されている。
それは帝国の戦艦だった。
白熱光線のあまりの放射量に、船自体が、白熱しているようにすら見える。
暗い嵐の海の中、それは亡霊のように見えた。
そして、その姿はみるみる巨大になっていく。
よく見ればその戦艦は斜めに傾いていて、甲板には波が叩きつけている。
旗艦フィレーナが、波の壁を、落ちるような速度で鉄の船に向け進んでいく。
戦艦は、近づけば近づくほど大きく、フィレーナの船のゆうに三倍はある。
発射される白熱光線が、旗艦フィレーナのまわりの海水を、蒸発させる。
船はわずかのところで光線をすり抜けているがこのままでは、正面衝突だ。
ぐんぐん鉄の船が迫ってくる。
「たまるか！」
冷静だった船長が、初めて叫んだ。
そして、力任せに、帆の操作装置を引いた。
旗艦フィレーナのすべての帆が開いた。
逆落としに落ちていく帆船の速度が落ちた。

一瞬、波の壁から帆船の船体が離れた。
帆船は宙を飛んだ。
鉄の船の艦橋と砲塔をすり抜け、次の瞬間、向かい側の波涛の波頭に着水したときには、鉄の巨艦の姿は、後方の波の向こうに消えていた。
それが、フィレーナが初めて見た帝国の戦艦の姿だった。
ほとんど瞬間の擦れ違いだった。
フィレーナとリラは、顔を見つめあい思わず大きな息を漏らした。
「フィレーナ司令官……」
何事もなかったように船長が話しかけた。
フィレーナは即座に、思ったとおりのことを言った。
「……すばらしかったよ。あなたの運転は……ありがとう」
「運転ちゅうのか……操縦というのか……ともかくさいこー」
リラが付け加えた。
「これからです。すれちがったあの船ですが……なんとかしなければいけません」
船長はぼそりと言った。
「なんとかする？」
「あの船は、どこか変です。光線をがむしゃらに発射しているが、別にどこを狙っているわけでもない。ただもう、死にものぐるいで、あたりかまわず発射している。まるで手負いの獣を

見ているようです」
「あの船が手負いの獣……？」
フィレーナは聞いた。
「喫水線を見ればわかります。何かの理由で浸水し、もう少しで沈みます。鉄の船は、長くは浮かんでいられませんからね。けれど乗員が避難する様子もなく、光線を発射しまくっている。近寄るものには敵味方かまわず、なんにでも噛みつく手負いの獣と同じです。手負いの獣ほど怖いものはありません。われわれの船は、身が軽いからなんとかかわせたけれど、他の大型船は、不用意に出会うと光線をかわしきれない。とても危険です」
船長にリラが聞いた。
「携帯通信電算機で味方に知らせるべき？」
「いえ」
船長は首を振った。
「この嵐の海で、あの船のいた位置を正確に伝えることは不可能です。仮に知らせることができたとしても、今は、どの船も、波を乗りきるのに精いっぱいで、針路は風と波任せです。あの船を避けろと言っても思うようにはいかないでしょう」
「どうすればいいと……？」
フィレーナが聞いた。
「擦れ違った今なら、あの船のあとを追えます。手負いの獣はだれにとっても危険です。フィ

アイの民はだれが傷つけた獣にしろ、手負いの獣を見つけたら、責任をもって始末する。それが、海と山と森で生きるもの、獣も人間もふくめたみんなの礼儀です」

「始末をつけろって言ったって……」

リラがいささかあきれて言った。

「あれは、獣でも人間でもない。帝国の戦艦なのよ」

船長は静かに言った。

「海の上で生き物のように動いている以上、同じです」

フィレーナは頷いた。

「傷ついて危険なことも同じだ。それにまだ傷ついていない人間が乗っているかもしれない」

「傷ついていない人間か……帝国人、助ける気なんだ」

リラは、そう言ってふーっと息をはいた。

「この船は、旗艦だ。身軽に動けるように、海岸から脱出した人を乗せていない。今の乗員の四倍は乗れるはずだ」

「ま、帝国人にも、ネストのおじ様やテスのようなお姉さんいたしね」

リラはしょうがないなとでもいうように肩を竦めほほ笑んだ。

フィレーナは船長に聞いた。

「今ならあの戦艦を追いかけられる。そう言いましたよね」

「もちろん。あの光線をかわしながら近づくこともできます」

船長が言った。
「もう一度、あなたの腕前を見せてください」
「まかせてください。たいした腕前じゃありませんがね」
そう言い終える前に、船長は舵を回していた。

*

暴風雨の中、旗艦フィレーナは、船長の巧みな操船技術で戦艦に接近していった。
戦艦の傾きはさらに激しく、左舷がほとんど海上に剝き出しになっていた。
そのため、相変わらず撃ちっぱなしの白熱光線は、右舷方向に偏り、襲いかかる波と無駄な戦いを続けていた。
波にぶちあたった白熱光線は、けたたましい煮沸音で蒸気をあげ、まるで、今そこに海底火山が噴出したような様相だった。
斜めになった戦艦の斜面には、人影らしきものは見えない。
旗艦フィレーナは、白熱光線の発射方向からはずれ、戦艦の艦橋から死角にもなっている剝き出しの左舷に接艦した。
「鉄の船も藻の船も、水に浮く原理が同じだとすれば……」
リラは、携帯通信電算機を使って、帝国戦艦の構造を計算した。
「戦艦の左舷のこの位置に水が入れば、船はひっくりかえって沈没するわ」
リラは、携帯通信電算機の画面に映った戦艦の図の左舷部分に印をつけた。

「高性能携帯爆弾で爆破できるね」
フィレーナが聞いた。
「ええ……」
リラは頷いた。
「ただし、百五十個はお土産に置いてこなきゃ」
フィレーナは、旗艦にいた闘技士出身の兵士を十人募り、携帯爆弾を持って戦艦に乗り込むことにした。
暴風雨の中、揺れ動く帆船から戦艦へ乗り移るのは、帆船を戦艦の左舷にぴったりくっつけて離れない船長の巧みな操船技術も手伝い、元闘技士たちの運動神経からすれば、それほど難しいことではなかった。
注意深く戦艦の甲板によじ昇ったフィレーナたちは、叩きつける波や雨を絶えながら、甲板から艦内へ通じるらしい扉のそばにへばりついた。
いつ、帝国兵と出会ってもいいように、小型剣を握り、構えを忘れない。
だがそこまで来て、フィレーナたちは拍子抜けしたように互いの顔を見合わした。
防水用に二重になっている扉が、外側も内側もふたつとも開いていたのだ。
横殴りの雨が、そして、甲板にぶち当たり斜めの甲板を駆け上がってくる波が、そのまま、流れ込むに任している。
扉の中は、明かりが点きっ放しだ。

「万一のときは援護射撃を頼む」
フィレーナは兵士たちに頼むと、小型剣の光線出力を上げた。
白熱光線を扉の内部に乱射する。
だが、なんの応戦もなかった。
扉の中へ飛び込む。
床はびしょぬれだ。
戦艦の傾きそのままに奥へ向かって傾斜している。
だれもいない。
艦内の通路の明かりが、奥へ続いている。
扉から、フィレーナのあとを追って兵士たちが飛び込んで小型剣を構える。
フィレーナは、兵士たちを手で制して言った。
「敵はいない」
そのとき、扉の外に叩きつけられた波が、兵士たちの背後から流れ込んできた。
海水は、通路を走り、奥へ奥へと流れていく。
フィレーナと兵士たちは注意深く前進を開始した。
後ろから、また海水が流れ込んでくる。
海水は、通路の奥の階段を滝のように流れ落ちていく。
フィレーナは、階段の下を見下ろした。

二階ほど下は池になっていて、それより下にはいけない。
「あそこまで水がきている」
「爆破するまでもなく、そのうち沈みますよ」
兵の一人がフィレーナに言った。
艦全体が震えるような不気味な金属音がして、艦の傾きが増した。
兵士たちは浮き足だった。
「長居をすると、おれたちまで沈没だ」
フィレーナは頷いた。
「先に戻ってくれ。僕はもう少し調べてみる」
フィレーナは兵士たちを帆船に帰すと、戦艦の階段を上に昇っていった。
だれもいなかった。
……これほどの巨艦で一人も見当たらないなんて……いったい、帝国兵はどこへいったんだ……フィレーナは、艦橋にやってきた。
指令室と書かれた扉が開けっ放しになっている。
中を窺ったフィレーナは身構えた。
そこに、二人の鎧兜が背を向けて座っていた。
鎧兜にはフィレーナの見たこともない、豪華な装飾が施してあった。
まるで、艦橋の窓から荒れ狂う海と砲塔からほとばしる無数の白熱光線を見下ろすようにし

て、二人は座っていた。
二人が息をしていないのが、フィレーナにはすぐにわかった。
二人の体は、椅子に縛りつけられていた。
そして、その足元にうずくまるようにして、男の屍体があった。
両手で中型剣を支え、きっ先を頭に向け、しかし頭から上が蒸発している屍体だった。
それは、自分の頭にむけて白熱光線を発射した、明らかに自殺死体だった。
おそらく、鎧兜の二人を椅子に縛り、そのあとで自害したようだ。
その男は、鎧兜こそ着ていないが、着用している帝国軍服はかなり上級の物のようだった。
フィレーナは、昔、闘技場の貴賓席で似たような軍服を着た帝国人を見た覚えがあった。
貴賓席に座れるような軍人は、地方でも将軍級以上の帝国人だった。
……すると、この鎧兜は……
鎧兜のひとりは、椅子の横にある操縦桿のようなものを右手で握り締めている。
よく見ると操縦桿と右手は、帯のようなもので縛りつけられている。
帯の先には、小さな勲章がぶら下がっていた。
おそらく、首に架けた勲章の帯を取って手と操縦桿を縛ったようだった。
フィレーナは、操縦桿をそっともとの位置に戻した。
窓の外を雷光のように飛びかっていた白熱光線が止まった。
操縦桿のようなものは、白熱砲の発射装置だったのだ。

操縦桿を握り締めていた手から勲章が滑り落ちた。
フィレーナは勲章を拾い、裏に刻まれた文字に気がついた。
帝国軍人最高機密栄誉章……フィロセラ討伐の最高責任司令官としての栄誉に……
……この鎧兜がフィロセラを滅ぼした責任者……
この人が、僕の国の息の根を止めたのか……
だとしても、だから、今さらなんだというんだ。
フィレーナは肩を竦めた。
勲章をそっと、鎧兜の膝の上に置いた。
ぐらっ……
戦艦がさらに傾いた。
勲章の男の兜が落ちた。
首ごともげたのだ。
兜の中の顔は、ゼラチンのように半透明で溶けかかっていた。
その表情は潰れてわからなかった。
ただ、こびりついている白髪が、年齢を物語っていた。
……フィロセラが滅びたのは僕の生まれた年だ。その時最高責任者なら、確かに今は相当な歳だよな……
フィレーナは、その老人の名前も知りたいと思わなかった。

フィロセラを滅ぼされたことに対する遺恨など、今は影も形もなく消えているのが、フィレーナ自身不思議だった。
フィレーナは、もう一人の鎧兜の手元に目をやった。
折りたたんだ紙があった。
無造作に「手紙」と書かれてあった。
書き物は電子盤に記憶するのが常の時代に、筆を使う手紙とは……そういえば……闘技士養成所のころ、指導員のゼナは、筆の使い方、文章の書き方をよく教えてくれたものだった。
妙に懐かしさを覚えたフィレーナは折りたたんだ紙の表を見た。
フィレーナは手紙を開いた。
「この手紙は、おそらく海の底に消えていくだろう。だが、それでも書き残したい。いったい、この戦いはなんなのか……帝国上層部は何を考えてこんな作戦をたてたのか……私たちにはわからないことばかりだ。この艦隊は四十年前、フィロセラ攻略と攻略後の海洋支配を目的に作られた艦隊だ。……海はこの星のあらゆる生命の源であり、海を制する者は世界を支配する……何千年も昔から言い古されてきたこの星のしごくまっとうな常識を保持するために作られた。いまさら、汚濁が限界にまで達した海を、時代遅れの大艦隊をもって支配しても無意味だという大多数の意見を押し切ってまで、秘密裏かつ強引に……海洋軍事最高司令官である私とフィロセラ討伐最高司令官がこの艦隊を作ろうとしたのは……」
フィレーナは、そこまで読んで、手紙の主の鎧兜を見た。

……この二人が、帝国の艦隊を作った……反対を押し切って……意外だった。
帝国は、種の進化を急ぐために、優秀種以降は海に拒絶反応を起こすような種を作り出していた。進化の過程で、海の存在を無視し切り捨てていたはずなのだ。
フィレーナは、手紙の先を読んだ。
「この大艦隊の目的は、征服や侵略、支配という帝国好みの言葉のためではない」
そのとき……艦橋を震わせる鈍い音がして、さらに艦橋が傾いた。
いきなり艦橋の警報灯が点滅を始めた。
無表情な計算器の声が聞こえる。
「この艦は、もはや、浮力を維持できません。転覆、沈没します」
床の傾斜がますますひどくなる。
鉄の壁が歪み、窓硝子が粉々に吹き飛んだ。
強風と豪雨が、なだれ込んで混んでくる。
椅子に座っていた鎧兜の身体が、ばらばらに吹き飛んだ。
フィレーナは手紙を握ったまま、転がるように指令室を飛び出し、艦橋を駆け降りた。
フィレーナは、戦艦から帆船に飛び移ると、船長に叫んだ。
「あの船から離れて！　沈没に巻き込まれる」
「わかりました」
船長は、冷静に頷くと、舵と帆を操りすみやかに自分の仕事を果たした。

帝国の戦艦は、波にもまれながら、ゆっくりと倒れていく。
艦橋はもう海の下だ。
フィレーナは、旗艦の窓から、波に見え隠れする戦艦の横腹を見つめ、そして、手紙に目を落とした。
「私たちが、艦隊を作ろうとしたのは、……海には、人間にとって帝国上層部の考えている以上の意味があると信じるからだ。海は単に、環境、資源、航路等、実質的な面にのみ価値があるわけではない。
人間は海を見るとき、その果てに思いをはせる。
人間の心の中に、海は永遠な広がりとして存在する。
通俗な表現を使えば、人は海の果てに、希望を夢見る。
小国であるフィロセラが、強大な帝国に屈せず頑張り続けた理由は、彼らには海があったからだ。
どんな絶望的な状況であっても、いや、現実は絶望そのものであっても、彼らは海の果てに夢を見る。
海に永遠の広がりを見る。
これは、帝国的な思考で割り切り説明できる理屈ではない。
だからこそ、フィロセラとフィロセラの人々は、帝国に最後まで屈することはなかった。
そして、帝国にも、そんな海が必要なのだ。

帝国の艦隊は、実質的な価値はない。

造船技術に優れたフィロセラに比べたら、勝つものはひとつもない。技術的にはわれわれの艦隊は、こけおどかしな鉄の固まりにすぎない。われわれの旗艦デビスは世界最大の金属艦であるが、手榴弾一個の大きさの超爆弾の破壊力にはひとたまりもない。最大の単管白熱砲十門を搭載しているが、動きの敏速なフィロセラの最新帆船に命中させることは難しいだろう。大砲で鼠を狙うようなものだ。

わが艦隊は帝国の実務的価値観から見れば無用の長物である。

しかし、それでも、帝国には海を行く堂々の艦隊が必要なのだ。

どんなに汚濁しようと海は人間にとって海なのだ。

帝国人が人間である限り、やはり海は海だ。

海という永遠の広がり……永遠の果てを目指し、突き進む艦隊の姿が人間には必要なのだ。

人は、船に夢と希望と未来を乗せる。

帝国人にも夢と希望を乗せる艦隊が必要なのだ。

もう、おわかりだろう。

艦隊の企画者であるわれわれは、フィロセラ攻略のためにこの艦隊を作ったのではない。

艦隊によるフィロセラ攻略は、口実にすぎない。

仮に戦ってもわが艦隊は、フィロセラ艦隊には勝つ見込みはなかっただろう。

だからこそ、フィロセラ討伐最高司令官と私は、艦隊をフィロセラ海軍と戦わせず温存して、

象徴としての艦隊を帝国の後世に残そうとした。
だが、勝つ見込みがないと判断された艦隊は全く無視された。
帝国が無用のものを作るはずがない……艦隊は秘密裏に封印された。
それ以後、帝国上層部は艦隊を全く無視した。
船は、いうまでもなく動かせるものがいなければただの廃品、浮遊物でしかない。
当時、帝国人の中には、まだ海に拒絶反応がでない種も多くいた。
異人種との混血を図れば、優秀な乗員確保も可能だったろう。
だが、そのあと、急速に進化した帝国人に、船を操れるものはいない。
それどころか、海辺の波打際にいてさえ、海に拒絶反応を起こすようになった。
もう、帝国人は、海も船も捨てたのだ。
捨てたものを、いまさら取り戻そうとしても戻っては来ない。
それでいながら、今になってこの出撃命令はなんなのか……。
私は帝国軍人だ。
命令には従う。
元フィロセラ討伐司令官もまた軍人だ。
彼もまた同じである。
だが、この艦隊を知るものは、今、われわれ二人しかいない。
われわれにとって、蘇った艦隊は感慨深いものがある。

しかし、他の乗員は……。
簡単に記そう。
ルシベ出撃後、ただちに乗員の半数が船酔い。
これは軽症である。
残る半数は、気管、内臓器異常……で、歩行不能。
不用意に汚濁した海水を浴びたものは、皮膚異常……。
この症状は、この艦隊を企画した元フィロセラ討伐司令官にすら現れた」
フィレーナは、半透明になった司令官の顔を思い浮かべ、顔を思わずしかめた。
手紙は続いた。
「帝国人の旧世代である討伐司令官ですらこの有様だから、新世代の帝国兵は、推して知るべしだ。
さらに、出撃直後の天候急変により、状況は見るも語るもおぞましいものになった。
荒れ狂う汐風、海水まじりの雨に発狂者が続出……最初は船倉に閉じ込めたが、それで、収まる数ではなかった。
船員たちは、脱走を図った。しかし、艦隊に救命艇など備えつけられていない。
各艦船に操縦者はなく、船は、反乱軍の艦隊を攻撃すべく自動操縦化している。
しかも、その操縦は荒れ狂う海域における操船には対応していない。
乗員は、陸に戻ることも、海に逃げることもできない。

海水自体が、帝国人にとって危険物だからだ。
この絶望的な状況の中で何が起こったかは、書くに忍びない。
各艦によって状況は多少異なるだろうが、起こったことに変わりはないだろう。
この艦においては、発狂した兵士たちは、扉を開け放して船から飛び降りた。
正気なものは船を止めようと機関室を爆破した。
陸へ進路を戻そうとしたが、防御された自動操縦装置は破壊できなかった。
絶叫と罵声と怒号と狂気のあと、だれもいなくなった。
彼らは殺されたか、海に飛び込んで死んだか、拒絶反応で悶死した。
今、この艦には、私と司令官とこの艦に乗船した帝国軍反乱討伐大隊司令官しかいない。
この艦隊は、こんな結果を生むために作られたのではない。
企画した私たちにとって艦隊は帝国の希望と夢の象徴のつもりだった。
艦隊は死んだ。
艦隊は帝国人の棺桶でしかなかった。
せめて、帝国の希望と夢の棺桶でないことを願う。
『かつてただの一度も発射されなかった世界最大の単管白熱砲をもって、わが艦隊の弔砲とし
たい』
これは元フィロセラ討伐最高司令官の遺言である。
『帝国軍に敗北による生はない。生は勝利者のみにある』

これは、帝国軍反乱討伐大隊司令官の遺言である。
それもよかろう。
われわれの責任のもとに作られたわが艦隊とともに果てるわれわれは、幸せである。
やるべきことはやった。
私は死を悔やみはしない。
今後の帝国と人類の繁栄を祈る」
フィレーナは、手紙から目を上げた。
もう、嵐の海に、帝国最大の戦艦デビスの姿はなかった。
「人類の繁栄か……」
フィレーナは、力なくリラに手に持った手紙を渡した。
手紙に目を通したリラは、肩を少しだけ竦めて呟いた。
「かっこいい……でも、いつでもこうよね」
「え……？」
リラは、手紙をひらひらさせて……
「偉い人の遺書って……どこか決まってる。おれはやるべきことはやった。あとは子孫の幸せを祈る……未来の幸せを祈るってね。ほんと……偉そうに……早い話が、これって、あとはおまえら、勝手にやれってことだもんね。ろくでもない世界、子孫にほうり出しておいてさ、やるべきことをやったなんて台詞、死ぬ間際になって言うんだもんね。どうして、生きているう

ちに言わないんだろう。ほんと無責任だわ。困ったもんだ。しかも、沈むとわかった船の中で、こんな紙っぺらに書いて、いったいだれが読むと思ったんだろ」

「書きたかっただけさ。書きたい気持ちはわかるよ」

「せめて、お墓の石にでも刻めば、漬物石の代わりにはなったかもしれないけどね。紙っぺらじゃ何の役にもたたない」

「少なくとも、僕らが海の戦いで負けないことはわかったさ」

「戦いじゃないわ……こんなの」

「ああ……」

「帝国の艦隊なんて、帝国兵を減らすだけのただの棺桶じゃない」

「ああ……これでたぶん、帝国の力と僕らの力はどっこいどっこいになるはずだ」

「こちらに逃げ回る理由はなくなった。急いでいるんだ、帝国さん。どうしても、フィレーナと帝国の間で白黒つける気なんだね。そこまで、この星はさし迫っちゃったんだよね」

「ああ……そして、また、ずいぶんの人間が死ぬ」

リラは、頷いた。

「携帯通信電算機によれば……今この瞬間に人類の数がぎりぎり二千万以下にならなければ、この星は、環境は人類を維持できないって……」

「それだけじゃないんだろ」

「まあね……」

リラは、口に出したくない計算を言った。
「来年は、もっと状況は悪くなって五百万そこそこにならないといけない。そして、この星の許容度はどんどん先細っていって、結局、二十年もすれば滅亡してしまう。助からない病気を告知されたようなものよね。そこで、大手術……。人類をあと百年以上もたすとしたら、今のうちに、二千万どころか、百万程度に抑えなければなんない」
　フィレーナは呟いた。
「それで帝国はまず自分の尻尾から切った」
「この手紙は、しっかりその裏話を物語ってくれちゃってるわけだ。書いた御本人たちは、気づいていないかもしれないけれど……どうする？　この手紙」
「みんなに読ますこともないさ。帝国は海に出たときに負けていた。こんな結果は敵も味方も気がめいるだけだ」
「だね……」
　リラは、手紙をくちゃくちゃに丸めるとフィレーナの手のひらに置いた。
「駄目だよ。フィレーナ」
「え……？」
　フィレーナは丸めた手紙を見た。
　リラは言った。
「嫌よ……僕のやるべきことは終わった……あとは、みんなにおまかせよ……なんて、……フ

イレーナは、こんな手紙書いちゃ嫌だよ」
フィレーナは、何も答えなかった。
黙って、丸めた手紙を海に投げ捨てた。
……最初から僕にやるべきことなんてあったんだろうか……あったとしても……それが終わったとき、みんなにおまかせできるようなものが、この星に残っているのだろうか……だが、
フィレーナは、リラにほほ笑んで言った。
「ともかくやることはやるよ」
そして、どす赤く濁り、泡だち吠える海を見つめた。

＊

嵐が収まったのは、その日の夕暮れだった。
波は嵐の余波で、かなり荒れていたが、夕陽に染まった空を背に浮かび上がった船影は、そのすべてが、帆船の主柱を持っていた。
鉄の船は一隻も浮かんでいなかった。
帝国艦隊は、嵐の海で、全滅した。
帝国の艦船は、船そのものの欠陥ではなく、海戦の結果でもなく、乗員たちの異常が引き起こした事故がその原因となって沈没した。
荒れ狂う嵐の中で常軌を逸した乗員たちは、われ先に、船の外へ逃れようとした。
沈んだ船のほとんどが、嵐の中では開けられるはずのない、扉や窓が開け放たれていた。

多くの沈没原因は、そこからの浸水だった。
かろうじて沈没しなかった船も、岸に辿りつけず座礁した。
砂浜に乗り上げた船にしても、乗員たちは打ち寄せる波を浴びずに逃げられるものはいなかった。
西部海岸地方の波打ちぎわは、海水を浴び、拒絶反応を起こし絶命した帝国軍兵士の溶けかかった屍体で埋めつくされた。
帝国軍の艦船と遭遇し、直接戦った反乱軍の帆船は、わずか数隻にすぎなかった。
もっとも、嵐の海上で、帝国軍の艦船は敵の帆船にであっても発砲する力はなかった。
船酔いと汐風。そして降りかかる海水に体調を狂わせた帝国軍砲手に、敵を見定めて白熱砲を発射する余裕のある者はいなかった。
鉄の艦船は反乱軍の帆船にやすやすと横づけされ、雪崩込んでくる反乱軍の人々にほとんどなすがままに蹂躙された。
船内の帝国兵たちは、海水への拒絶反応で、まともに戦える余力のあるものはほとんどいなかったのだ。
病人と精神に異常をきたした帝国兵との戦いは、戦いと呼べるものではなかった。
とはいえ、帝国兵にとって敗北は死を意味する。
捕虜になることは、帝国軍人にとって、もっとも恥ずべきことだった。
帝国兵たちは、ろくに動けない体でありながら死にものぐるいで抵抗した。

降伏を求めてもとても無理だった。
病人と知っていても下手に近づけば、剣をふりまわしむしゃぶりついてくる帝国兵に、こちらの命まで危ない状況だった。
結局、防衛のために相手を殺すか、船を見捨てて退却するしかなかった。
結局、帝国兵はだれひとり、嵐の海の上で生き延びることはできなかった。
反乱軍の踏み込んだ帝国艦船の中で行われたことは、戦いというよりは病人と心理に異常をきたした者の処理……言い方を変えれば見殺しに近かった。
鯱のオルカは、戦闘用の高速帆船の指揮をとっていた。
それだけに、海上で敵艦に遭遇するたびに、接近し横づけして殴り込んだ数は一度や二度ではなかった。
だが、どこの船でも、結果は同じだった。
オルカの大型剣を振るうだけの敵はいなかった。
オルカの自慢の剣は、いままで少なくとも、敵と呼べる相手をなぎ倒してきた。
襲いかかる病人たちを処分するのに、数々の強敵を打ち破ってきた自慢の大型剣を使う気はしなかった。
「こんな後味の悪い戦いは初めてだ」
嵐が収まり海戦の勝利を知ったとき、鯱のオルカは、使い慣れた超大型剣を甲板に叩きつけて、吐き捨てるように言った。

＊

帝国人のテスは、反乱軍の帆船の中で、最大規模の輸送帆船にいた。

特殊変形優秀種と呼ばれていたテスは、嵐の間も看護の女性たちを率いて、海岸から救出した反乱軍の怪我人の手当に没頭していた。

船の揺れや、船倉に流れ込んでくる汐の匂いは、体調を狂わせるに十分だったが、酸素吸入面をつけ、吐き気を堪えながら懸命に看護を続けた。

同じ帝国人の優秀種でも、進化の先端をいっていたラズルは悲惨だった。

酸素吸入面も、酔い薬も役にたたなかった。

汐風の吹き込まぬ奥の船室に閉じ籠もり、ベッドにしがみつき、船酔いの苦痛と戦っていた。

血が逆流し、毛穴の一つ一つから吹き出してきそうな、じっとしていると今にも気が狂いそうな気分が続いた。

体の部分部分が、ちりぢりに分解しそうだった。

胃の中のものはおろか、体中の水気がなくなるほど吐き続けた。

嵐が終わったとき、ラズルは、生きている自分が不思議に思えた。

船室の外に出て結果を見ずとも、この海戦が帝国の完璧な敗北に終わることを確信した。

そして、今さらながらに思った。

……この星は半分以上が海だ。そこで生きられぬ帝国人の、何が優秀種と呼べるんだ……帝国が進化と呼んだ人種の改革は、この星に生存するのに、より劣等な生き物を作り出したにす

ぎないんだ……そして、その優秀種にこだわって生きてきたおれは……

今やラズルは、自己の存在を嫌悪していた。

そして、嵐の収まった夜は、一歩も部屋の外に出なかった。

彼の今までの人生の記憶に、泣いた覚えはなかった。

嵐の間、体中の水気が消えるほど吐いたはずなのに、その夜は、目から涙が溢れて止まらなかった。

テスは夜になり、船の揺れがなくなったのを確かめてから、看護の手を休め、甲板に出てきた。

甲板には、嵐との戦いに疲れた船員たちが、そこかしこにくつろいで座っている。

テスは、酸素吸入面を取った。

汐風はいがらっぽかった。

しかし、耐えられないものではない。

テスの体は、心理更正病院の、人工とはいえこの星の古代の空気に慣らされていた。

そのためか、知らず知らずのうちに並の帝国人より、空気の変化に対応できる体になっていたのかもしれなかった。

テスは、深呼吸とはいかないまでも、大きくのびをした。

昼間の嵐が嘘のように静まり返った海面に、三つの月が映っている。

ふと、気がつくと、甲板にぽつんと坐って、じっと海を見下ろしている老婆がいた。

両手を合わせて拝んでいるようだった。

テスは何げなく声をかけた。

「やっと、海がおさまりましたね。こんな海で戦いがあるなんて嘘のようです」

「海の戦いは終わったよ。帝国の船に乗っていた兵隊はみんな死んでしまった」

「みんな……？」

「ほとんど戦わず、海のもくずだそうじゃ。帝国の人たちは、海が苦手なことぐらいわかっていたはずなのにねえ。何万人いたか知らないが、ごみ箱に捨てられるように海で死んでいったそうな……私ゃ、帝国人ではないけれど、ルシベの街で奴隷として街頭トイレの掃除をしとった。帝国人はわしらをいじめたが、みんながみんなじゃなかった。特に、帝国の兵隊さんは、民間の帝国人とはちがって、規律が正しくて、意味もなくわしらをいじめはしなかった。軍のトイレへ掃除にいくと、食べ物やお金を恵んでくれる軍人さんもいた。『ばあさん……長生きしろ……』ってね……わしゃ、帝国は憎いけれど、帝国人みんなが憎いわけじゃない。奴隷だって、異民族だって、悪いやつ憎いやつはいるもんなあ……。特にわしのような老人は、どこでもだれにでも厄介ものにされる。そんなわしが生き残って、帝国人とはいえ、軍人というだけで、苦しくてつらい海で死ななきゃならんかった。ふびんでなあ……なんでこんなことになあ……若い人たちが死ななきゃならんのかなあ……」

……なんで死ななきゃならないのか……

テスは知っていた。

……この星で人間が存続するには、人間が多すぎる……だから帝国は人減らしのために、帝国人兵士を海へ出した……まるで、よけいなごみのように、海に捨てた……

「帝国人じゃって……せっかくこの世に生まれてきたのにのう……むざむざ、死ぬことはなかろうにのう……いったい何人がこの海に沈んでいったんじゃろうのう」

老婆が呟いた。

テスは、おおよその数は予想できた。

……反乱軍と対等の勢力になるためには、少なくとも百万以上の帝国兵が消されなければならない……百万の生命がこの戦いで捨てられた……？　この海の底に百万……。私たちが数十人の病人を看護している間に……百万人が死んだ……

テスはいきなり吐き気に襲われた。

そして、吐いた。

止まらなかった。

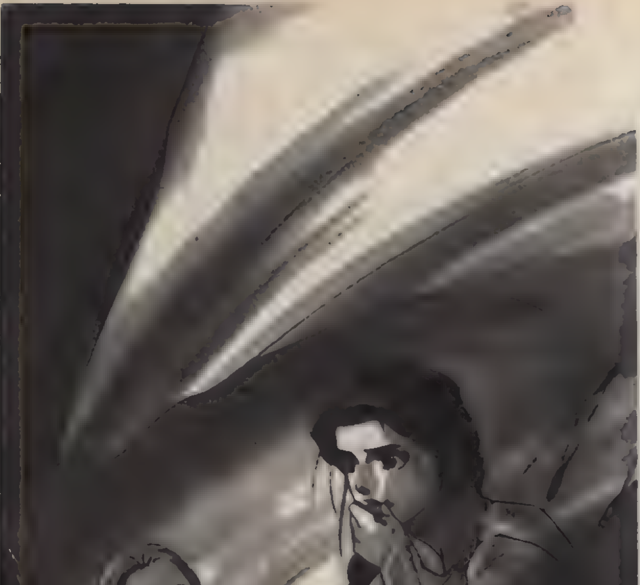
嵐の海には耐えられたが、今は我慢できなかった。

「大丈夫かね……お嬢さん……」

老婆が、テスの背中を擦りながら言った。

「ええ……」

テスはあえぎながら答えた。



「私のやることは一つだ。一人でも多く助けてみせる」テスの決意は堅い

「大丈夫です……それに……私決めました。これから何をしたらいいのか」
「そうかいそうかい……それはよかった」
テスがいったい何を決めたのか聞きもせず、老婆は何度も頷いた。
テスは、手のひらで口を押さえながら吐き気を堪え、かろうじて言った。
「ごめんなさい。よごしちゃって」
「かまわんよ……あんたは何かを決めたんじゃろう？　本当の決めごとは、きれいごとでは決心できないものだよ」
テスは、頷きながら、さらに吐き続けた。
「人類の存続のために、どれほど人間の死が必要だろうと……私のやることは一つだ。一人でも多く助けてみせる」
吐くたびに、テスの決意は堅くなっていった。

＊

「もはや、流策士の出る幕はなくなった」
ないだ海を見つめながらバンニルは呟いた。
これからの戦いは、結局この星の人を減らすための戦いだ。
帝国軍にとっても、反乱軍にとっても、人を減らすことによって、人類の存続に賭ける。
そのあとをだれが継ぐかは、なりゆき次第で決まるとしか思えない。
勝っても負けても、大量の死を背負いこんで生き延びることになる。

いかに損害を少なくして敵に勝利するか……バンニルはそれが作戦というものの醍醐味だと思っている。
作戦とは、戦いにおいて、いかに人命を大切にするか……に価値がある。
そう思おうとしてきた。
たとえ優れた作戦で勝っても、その勝利が、大量の死によって補償されるものだとしたら、作戦自体がバンニルにとっては無意味だった。
……もっとも……戦いなんてものは、作戦があろうとなかろうと、結局この海のように血の色から逃げられない……おれの作戦に対する思いなんぞ目くそが鼻くそに能書きをたれているようなもんだ。
……バンニルは一人で苦笑し、それから、なんとなく海に飛び込みたくなった。
だが、見つめているとあまりに海が汚そうなので……止めた。
そんな自分が可笑しくて、思わず溜め息が出た。

＊

別の船から同じ海をみつめるネストも、思いはバンニルに似ていた。
「この先、この戦いにつきあってなんになるのか……。しょせん、行きつく先は海の色だ。おれが、いまさらやれることといったら、この戦いを記録に残すぐらいしかやることはない。記録に残してなんになる。人類が二度と過ちを繰り返さないため?……よせよ……記録が、書物が……愚行を繰り返さないために役にたったことがあったかね……そんなものをいまさら一冊

付け加えたからといって何になる……」

ネストは海に飛び込みたくなった。

だが、やはり、海があまりに汚そうなので……止めた。

結局、できるだけ最後までフィレーナたちを見つめ、記録につけることにした。

それぞれに広がる海は、けだるく汚濁し、終末の水平線まで続いて見えていた。

第3章

決戦への布石

嵐の中の海戦……少なくとも反乱軍の幹部級に、帝国海軍の自滅といえるその勝利を喜ぶものはいなかった。

帝国と反乱軍の勢力が五分と五分になった今は、帝国との全面衝突を拒む理由は何もなかった。

一時的に救出したものの、四倍の定員で乗り込んだ反乱軍や難民は、もとの帝国のどこか別の場所に戻すしかないのだ。

夜陰に乗じてこっそりと上陸させるか、決戦覚悟で正面きって堂々と上陸するか、二つに一つだ。

どちらの上陸方法をとったところで、限られた帝国の土地をめぐっての戦いは避けられない。

そして、どちらが勝利するにしろ途方もない数の人命が失われ、その犠牲がなければ、人類が、この星で生存していける見込みはない。

しかも、早い時期での、急速な減少でなければ、この星の衰弱の速度に間に合わない。

海戦のあったその日の夜……ただちに反乱軍「海のフィレーナ」の幹部を旗艦に集め、今後を決める会議が開かれることになった。

「ナスカ……会議にはおまえがいってくれ。面倒な話はもうたくさんだ」
戦闘用の高速帆船に乗っていたオルカは、椅子にがっくりと、腰を落として溜め息混じりに言った。
「おれ一人でか？」
「どんな作戦が決まろうが、おれは従うよ。おれは、この戦いで、決定権を握りたくない。闘技士だったときのように、言われたままに戦いたくなった」
「闘技士の時のようにか……」
ナスカが聞くでもなく呟いた。
オルカは肩を竦めた。
「おれが、一人で十万人ぐらい殺せばすむっていうなら、残忍な殺戮者になってやってもいい……でなければ、おれ一人が死んだだけで、人類が助かるというのなら、今すぐ死んでやってもいいがね。おれ一人が何をやっても、人類の滅亡とやらに対してはどうにもならない。おれはおれの剣で、目の前に来た敵を……いや、敵じゃないな。敵だと思えと言われただれかだ。せめてその日一日を生きるために、そいつを倒すしかない。この戦いは奴隷同士が戦う闘技試合と同じだ。おれは、帝国人を敵とは思えなくなった。一日一日を生き延びるために必死な奴隷と同じだ。おれが反乱軍を作ったときには、けっこう格好のいいお題目があった。帝国に虐げられた奴隷たちを解放し自由な国をどこかにつくりたいってな……おれは、案外、真面目だったんだよ」

ナスカは頷（うなず）いた。

「わかっている。だから、奴隷（クレチア）ではないおれも、つきあいたくなった。おまえたちの反乱は絶望的に不可能でも、姿勢は未来に向いていた。生まれたときの種で、本人の行く末の決まってしまう帝国人は、人間の生きざまについて何を言っても、評論にしかならない。他人を評論するならまだしも、自分の生きざますら評論しかできないとしたら、それは自分を生きていることにならない。自分でありながら自分を傍観（ぼうかん）する。こいつは、けっこう、切ない」

「まあ、おまえには、おまえの考えがいろいろあるだろう。だが、今の戦いは、おれの最初に目指した戦いじゃない。ただの生き残り戦争だ。生き残りの戦いなら、おれは中央闘技士としての誇りがある。おれは、相手を選ばない。戦いの場も選ばない。目の前に出てきた相手を倒す。どんな強い闘技士だろうと与えられた敵と戦う。文句は言わない。負ければ死ぬ。この戦いが帝国への反乱でも奴隷（クレチア）の解放でもなくなって、ただの生き残りのための戦いなら、おれは、この世界で一番強い中央闘技士に戻る。それが鯱（しゃち）のオルカだ」

「そこにこだわるわけだ」

ナスカはほほ笑んだ。

「でなきゃ、やってられるか、こんな戦い。なんでも決めてきてくれ。文句は言わん」

「では……」

ナスカは頷いた。

「鯱のオルカにふさわしい戦いを持ってくるよう、努力するよ」

「楽しみにしている」
オルカは、戦闘艦から旗艦に向かうナスカの小船を見送ると、再び指令室に戻り、戸棚から酒瓶を取り出した。
「くだらん戦いだ……」
瓶ごと、呷ろとしたそのときだった。
「くだらない戦いかもしれないが……」
「ん……？」
振り返ったオルカの前に、若い男が立っていた。
鎧も兜もつけていない身軽な服装だ。
鞘に入っていない中型剣を無造作に持っている姿が、明らかに戦意を表しているが、その表情は気安く妙に無防備を感じさせた。
「酒を飲んだんでは、動きが鈍くなりませんか」
若い男はほほ笑みながら言った。
むろん、オルカはむきだしの中型剣を見せられたからといって、脅えるような男ではない。
「見ない顔だな、どこから入った」
オルカはそういいながら、酒瓶を口に持っていった。
瞬間、酒瓶が粉々にはじけ、中の酒が飛び散った。
若い男が、小刀を投げて瓶を割ったのだ。

オルカは顔色一つ変えず、若い男を見た。
「不作法が過ぎないか」
「酒を飲んだせいで、私に負けた……そう言われるのは困りますから」
若い男は、冷たくほほ笑んだ。
「おまえに負ける?……ということは、おまえ、帝国のまわしものか……」
「ま……いろいろ事情はありますが、そう思っていただいたほうが話が早いでしょう」
「話が早いといっても話をしにきた態度ではないな」
若い男は笑みを絶やさず頷いた。
「戦いにきました。あなたと……この船が、私の乗っている船を攻撃している隙に乗りうつったんです。……僕の名はフィス……帝国奴隷フィコスとミリカの息子です」
「ほう、名乗ってくれるわけか。名乗られても奴隷の名など知らんよ。それとも、おれも名乗らんといかんのか」
「いいえ、あなたは鯱のオルカ、別名、鯱のフィレーナ。……あなたですよね」
「ほう、かなり詳しいわけだ」
「元中央闘技士としての不敗記録は知っています。史上最強の闘技士の一人だそうで……フィレーナという男は、あなたより強いのですか?」
オルカは苦笑した。
「どうしてそんなことを聞くのかね」

若い男フィスは、当たり前のことを聞くなとでも言うように、肩を竦めてから答えた。
「そりゃ、フィレーナを殺すつもりだからです。フィレーナの闘技士時代の記録では、あなたより強いとは思えない。けれど、逃亡以後、少なくとも、十人を越える黒い悪魔が、フィレーナに殺されている。記録によれば、並の闘技士では殺せるはずのない黒い悪魔たちを、フィレーナは確かに殺している。逃亡以後、どれだけ腕を上げたか聞いてみたかったのです」
「おまえは、フィレーナが、おれより強いと思うのかな」
「でなければ、あなたがフィレーナの部下になるはずがない。一流の闘技士は、自分より弱い男の後ろにはつかない」
「なるほどね」
オルカは、一度だけ、フィレーナと一対一で戦ったことがある。
鯱のフィレーナ軍と狼のフィレーナ軍が、統合されたときのことだ。
半日がかりの戦いで、オルカはフィレーナに勝った。
だが、本当に勝った気持ちにはなれなかった勝利だった。
そのとき、フィレーナは勝負を捨てていた。
あの時、フィレーナは死んでもいいと思っていた。
生を諦めている相手を倒しても、勝ったとは言いがたい。
だから、闘技士としての強さという意味では決着がついていないが、こと闘技に関してなら、フィレーナに負けるとは一瞬でも思ったことはなかった。

今も世界一の闘技士は自分であるという自負があった。
だが、フィレーナは闘技だけの存在ではない。
「確かに……」
オルカは、フィスに頷いた。
「フィレーナは……ああ……強い。おれよりもな……おれに勝てんようじゃフィレーナには勝てん。海の戦いで生き残ったことを幸せだと思って……おれの前から消えろ……もう、海の上の戦いは終わった。命だけは助けてやる」
「勝ちますよ。あなたに……」
「ほう……ずいぶん、調子に乗っているようだな」
「調子に乗って油断しているのはあなたかもしれません。鎧兜をつけないでいいんですか？あなたが一番使いやすい鎧と兜を着る間、お待ちしましょう」
オルカはあきれた。
「若造一人の相手に、このおれに鎧を着ろと言うのか」
「あなたと戦うとき、あなたが最高の状態でなければ、本当の強さはわからない。それに、この部屋は、あなたの超大型剣を振り回すには、狭すぎる。甲板に出て戦いたい」
「おれの剣の餌食になるには、おまえは百年……いや千年早いと思うがな」
オルカは、フィスを無視するように、戸棚に向かい新しい酒瓶を出した。
フィスは、真顔で言った。

「やめてください。酒は……どうも、あなたは私を嘗めているようだ」
「嘗めるのは酒だけで十分だ」
「その酒もなめさせません」
言葉の終わらぬうちにフィスの中型剣が、酒瓶をまっぷたつに裂いた。
見事な切り口だった。
「ほう、少しはやるな」
きれいに割れた酒瓶を見て、オルカもいささか真面目な顔になった。
「ええ……少しはやります。あなたに本気になっていただくためにね」
フィスは、戸口にあった警報装置を押した。
けたたましい音に、船内にいた兵士たちが続々と甲板に飛び出してきた。
オルカはあきれた。
「何を考えているんだ。おまえは」
「少しだけ、私の腕をお見せしますよ。参考のためにね」
フィスは素早く甲板に出た。
そして、兵士たちの真ん中へ踏み込んだ。
月影に、フィスの中型剣が一瞬光った。
しかし、その光が見えたのはオルカだけだったろう。
敵の俊敏な動きに慣れているオルカだからこそ、見のがさなかったのだ。

「よせ……！」
オルカは思わず叫んだ。
兵士たちの動きが凍りついた。
オルカの声のせいではなかった。
甲板の上の兵士たちは、すでに息をしていなかった。
そして、ゆっくりと甲板の上に崩れ落ちた。
倒された兵士たちに続いて、甲板に出てきた兵士たちにオルカが叫んだ。
「出てくるな！　おまえたちの相手ではない」
フィスは肩を竦めた。
「出てこなければこちらから行きます」
フィスの体が、甲板の出口の中へ飛び込んだ。
戸口の中から呻き声が立て続けに漏れた。
すぐに、フィスの姿が出口に現れた。
そして、オルカにほほ笑みかけた。
「こちらの通路の人たちはみんな死にました。オルカさん。早く鎧兜を着て、甲板に出てきてください……でないと、この船は屍体の山になる」
「わかった」
オルカは、フィスを睨みつけて言った。

「おまえの望む姿で、相手をしてやろう。他の者には手を出すな」
「ええ……私はここで待っています」
フィスはこともなげに答えた。
オルカは、闘技士時代、愛用していた鎧兜に身を包んだ。
久しぶりだった。
血が騒いだ。
フィスという男の闘技が、超一流であることはよくわかった。
だが、負けるとは思っていない。
闘技の世界で一番強いのはおれだ。
「世界一の実力を見せてやる」
オルカはあふれてくる笑いを堪えようがなかった。
久しぶりに骨のありそうな相手と剣を交わせる。
その喜びが大きかったのだ。
そして、自分の手よりも巧みに操れる超大型剣の鞘を抜き、柄の感触を確かめると、ゆっくりと甲板に出ていった。
甲板に一歩出ると、もう、その顔に笑いは無用だった。
オルカは完璧に中央闘技士だった。
油断はない。

獲物を狙う鯱のように、全身が凶器になっていた。
フィスはオルカを見つめ呟いた。
「確かにあなたは強そうだ」
剣を構えた。
それまで、何人もの兵士を倒しながら、どこか無防備に見えていたその姿に、真剣な殺意がみなぎり、それがオルカにも読めた。
二人は、じりじりと間合いを狭めていった。

＊

数時間後……旗艦フィレーナでの会議は結論を出した。
答えは、だれもが予想して、別の答えが見つからないものだった。
「帝国に上陸し、正面から決戦を挑む」
結論を急がせたのは、フィアイの島からの知らせだった。
温度の上昇で氷が溶け、島が四つに分裂したというのだ。
氷が小さくなれば、さらに溶ける速度は加速される。
フィレーナの艦隊の母港ともいえる氷の島が消えるのは間近だ。
そして、そこは氷の上とはいえ、帝国の大陸以外で人間が生きていける唯一の陸地らしい場所でもあった。
「決戦と決まったら……」

バンニルは、一同に言った。
「乗員に艦隊の食糧不足をさとられる前に、この海戦の勝利の余勢をかって上陸すべきだ」
流策士のバンニルでなくとも、考えは同じだ。
もはや、時間は残されていなかった。
反乱軍にも帝国にも……そしてこの星にも……。

＊

……確かにオルカのいうように、会議にいてもいなくても、答えは決まっていた……旗艦フイレーナから戦闘艦に戻るナスカの暗然とした気分は、ほかのだれもが同じだった。
だが、戦闘艦に戻ったナスカにはさらに衝撃が待っていた。
ナスカは戦闘艦の甲板に上がるなり、戦慄し立ち竦んだ。
文字どおり屍体の山だった。
船には一人をのぞいて、だれも生きていなかった。
そのたった一人がオルカだった。
オルカは鎧兜を着て、部屋の椅子に座っていた。
ナスカが声をかけたが、答えはなかった。
息はしていたが動きはしなかった。
駆け寄って鎧に触れたとたん、鎧は分解して床に落ちた。
動かないオルカの体に髪の毛のような筋が何本も見えた。

「生きてはいるけれど、身体中が切り刻まれています。下手に動かすと傷口が離れ、出血して取り返しがつかなくなるわ」
「動かさないで……」
治療のために戦闘艦に呼ばれたテスが、オルカの体を見るなり言った。
「生きているなら……助かるよね」
駆けつけたフィレーナがテスに、祈るように聞いた。
「わからない。でも、やってみます。これだけ斬られたら動けないどころか、悶え苦しむだろうし、普通なら生きてはいないはずです。それが生きている。変な言い方ですけれど、死なないように斬っているんです。だったら助かる見込みもあります」
「死なないように斬る？　そんなことって……」
「なぜ、そんなことをしたのかわかりません。たぶんオルカさんは死ぬ以上に苦しい痛みのはずです。でも動けない。運動に関わる神経を狙って斬っているんです」
「助けてくれるよね？」
フィレーナはテスに念を押した。
「助けられる命です。助けなきゃいけません」
テスはきっぱりと言った。
テスは、ありったけの医療器具を部屋に持ち込むと、傷口や神経を縫合する手術を始めた。

それは、動けず声も出せないオルカにとって、テスの言うように死に勝る苦痛を伴った手術だったが、テスにとっても苛酷な仕事だった。

海上の空気に慣れてきたとはいえ、帝国人の体質には変わりがない。

しかも、嵐の間は病人たちの治療を続けていたのだ。

その疲労は体力の限界をとっくに超えていた。

「助けなきゃ……助けなきゃいけない……」

まるでうわごとのように呟きながらオルカの体を縫合するテスの後ろ姿は、近寄りがたく、声をかけることもできなかった。

「すごいな……」

リラはだれに言うでもなく呟いた。

「女の子はがんばるんだよね……こうと決めたら……なにがなんでも」

それは、自分に呟いている言葉でもあった。

＊

翌朝……。

フィレーナの艦隊は再上陸を狙って、西海岸のルシベを目指した。

それは、バンニルの指示した作戦だった。

「ルシベは、帝国艦隊の出撃した街だ。しかも、その出撃は、帝国軍の人員を減らすための、全滅を計算した出撃だった。戻ることを考えていないならば、船には最小限の食物しか乗せて

いないはずだ。ルシベには艦隊に乗った兵士たちが残していった食物があるはずだし、兵士を送り出したあとの街は、警備も手薄なはずだ。上陸するのに最適の場所だ。もっとも、こんな作戦はだれでも思いつくことだがな」

「だれでも思いつくなら当然、迎撃の危険性もあるな」

一応、疑問を投げかけたナスカに、バンニルはきっぱりと言った。

「ありえない……なぜなら、ルシベで戦いが起これば海岸線の戦いになる。今までの戦いは、われわれと兵力を互角にするために計算されていた。海戦での全滅で、ほぼその目的は達成されたと見ていい。そして、これからも、敵味方の数を計算しながらこの星全体の人間を減らしていくつもりだ。そのためには海岸線の戦いは避けたほうがいい。帝国人の苦手な海岸線は何が起こるかわからないし、双方がどれくらいの損害を受けたか、計算がしづらい」

「これからの戦いも、しょせんは帝国の計算ずくってことか」

「計算できないこともあるさ」

ネストがぽつりと言った。

「だれがこの星を継ぐのかの答えだ。……答えが出ないから、われわれを戦わせている。わかっていたら、とっくに爆弾で、資格のない人間たちを抹殺してただろう……」

「その答えがやがて出たら……？」

ナスカがこれも答えのわかりきった疑問を投げた。

わかりきった答えを口に出すものはいなかった。

わかりきった答え……。

＊

ジャンガーの城には、帝国各地に備えつけられた新爆弾の発射管理装置があった。

新爆弾は、任意の人類の種だけを狙い撃ちして消失させる力のある兵器だ。

もしも、超皇帝種に人類の後継者としての資格があれば、超皇帝種を生み出せる皇帝種以外の人類をすべて消すこともできるし、また、逆の結果が出て、もし、フィレーナのような異人種に後継者の可能性があれば、帝国人種のすべてを消すこともできた。

超皇帝種と異民族のどちらが後継者になろうとも、人類存続の土壇場に来れば、邪魔になる側の生存者を一掃するために、発射されるに違いない兵器だった。

だが、その、わかりきった答えがゆらぎだす出来事が起こった。

突然、発射装置が不能になったのだ。

皇帝種たちがどう操作しても、発射できそうにない。

「超皇帝種が装置に介入していることは明らかです」

皇帝種の一人が調査の結果を言った。

「われわれに何も言わずにか……？　生み出したわれわれに何も報告せずにか……？」

もう一人の皇帝種が、うつろな口調でいった。

「まったく最近の子供は、親のいいなりにはならないもんですね。もっとも、彼らの進化は、猿と人類ほどもわれわれと差がある。猿のいいつけを守る人類がいるとも思えませんが、たぶ

ん彼らはわれわれのことは、全く相手にしていないのでしょう」
両性の皇帝種が、肩を竦めた。
「猿と人類ほどの違いか……それほどの違いがあって超皇帝種は人類と呼べるのでしょうか」
皇帝種の一人が、だれに聞くでもなく言った。
一同はなにも何も答えず、ただ、黙っていた。

＊

旗艦フィレーナの行く手に、ルシベ付近の海岸線が見えだしたところ、オルカの戦闘艦からテスの連絡が入った。
……オルカは命をとりとめた。フィレーナに会いたいと言っている……
フィレーナは、リラと小船に乗って、オルカに会いに行った。
オルカの部屋で二人を迎えたテスは、憔悴しきった顔で言った。
「まだ、自分で体を動かせる状態ではありません。ただ声帯だけはなんとか動きます。オルカさんがどうしてもというので、二分だけ……。お願い、二分だけです。声を出すだけでも、痛みの呻きが、体にひびきます。話が終われば、すぐに、声帯の神経を閉じますから……」
オルカは、硬直し蠟人形のように椅子に坐っていた。
首筋から管が出ていた。
フィレーナを見るなり、管から喘ぎ声が漏れた。
「黙って聞け。敵はひとり……名前は、フィス。ミリカとフィコスの息子。やつはその名をお

まえに知らせ腕前を見せつけ……おまえを脅えさせるためだけに、おれを生かした。闘技士にとって、負けても死ねないこんな姿は最低の屈辱だ。やつは、おまえにそれ以上の屈辱を味わわせると言っている。フィレーナ、フィスという名だ。その名の男がいたら、相手にするな。逃げろ……」

「フィス？」

フィレーナは聞きかえした。

忘れたわけではなかった。

……この子はあんたをいつか殺す……

ドラの闘技場で、踊り子のミリカに見せつけられた赤ん坊の名前を……だが、オルカの口から突然出てきたその名が、すぐには結びつかなかった。

「そこまでです」

テスは、首筋の管に、点滴管を素早く繋いだ。

オルカの瞼が、ゆっくりと閉じた。

「助かるんだね……」

フィレーナはテスに聞いた。

「ええ……。オルカさんの傷は、ぎりぎり命だけは助かるように、怖いぐらいに正確に切り刻まれています。命が助かっているのなら、私だってもとの体に戻してみせます。帝国の最新医学と頑丈なこの人の体なら一カ月……いえ……私なら十五日……」

そこまで言って、テスはよろめいた。
「テスさん……」
リラが抱き止めた。
テスはほほ笑んだ。
「いやだな……肝心の私が、すぐにでも寝ないと死んじゃうかな」
そして、リラの肩に頭をもたせかけた。
テスの体から力が抜けた。
テスを支えて、リラは、いささか呆れ、しかし感動を隠せず言った。
「あらら……本当に寝ちゃった。うん……あげよう……寝させて……」
リラは人差し指を唇に当て、……静かに……とフィレーナに合図した。

＊

フィレーナは旗艦に戻る途中、ネストの乗っている船に立ち寄った。
「フィス……？　なんだね……そいつは？」
ネストはフィレーナに聞き返した。
「僕に心当たりがあるとしたら、ドラの街でした道化のフィコスさんとの試合です。あの人を助けようとして、あなたの作った筋書どおりにやったけれど……結局、僕はあの人を殺してしまった」
「あの試合か……。あの試合の演出家ごと……覚えているよ」

フィレーナは頷いた。

「バラバさん……でも、あの人はもういない。あの時の赤ん坊……どうなったか知っていそうなのは、今はネストさんしかいない」

「あの赤ん坊は、確か、バラバが闘技士養成所に預けたはずだが……闘技士養成所は……」

「ええ……黒い竜に焼き払われて生存者はいなかった……だとしたら、あの子も僕が殺したようなもんですね」

「たとえ、その子が生きていたとしても四、五歳だ。オルカを倒すことなどありえない」

「でも、僕に対する挑戦か脅しでもない限り、反乱軍で一番強いといわれるオルカをせっかく倒しながら、生かしておく理由もわからない。だって傷が治れば、手強い敵になって甦ってくる」

「いや反乱軍に対する効果的な脅しでもある。敵の一番手に死に勝る屈辱を与え、軍全体の動揺を誘う」

「それにしたって……なぜフィスの名を……」

「フィレーナ。聞くんだ……」

ネストはフィレーナの肩に手をおいた。

「その男がだれであれ、帝国にはどんな化け物が棲んでいるかわからん。ともかく、そいつが一人であの船の全員とオルカを切り刻んだことは確からしい。あのオルカが出会ったら逃げろ、と言っている化け物だ。いいか……フィレーナはもう闘技士のフィレーナじゃない。反乱軍の

指導者、海のフィレーナだ」
「ああ……言いたいことはわかっている」
「挑発や脅しに乗るほど小さいやつじゃない。フィレーナは……」
「そいつに会ったら逃げるよ僕は……。逃げることには慣れている。最初の闘技試合は逃げまくっていた」
ネストはほほ笑んだ。
「そして、最後には勝った。よく考えてみると……おまえは意外と……」
「え……？」
「往生際が悪いんだな」
フィレーナもほほ笑んだ。
「かもしれない。でも、往生際がよかったか悪かったかは、僕が本当に死んでから言ってよ」
「それは、確かにそうだ」
二人は笑い合って別れた。
……大きくなったな……
ネストは、旗艦に向かっていくフィレーナの小船を見送りながらそう思った。
その思いはフィレーナが女であることを忘れていた。
息子のようにさえ思えた。
息子ならば守ってやらねばならんと思った。

娘を守ってやろうなどという父親の湿った気分とはまるで違っていた。
ネストは心理更正病院の資料で、帝国に幼児を急速に成長させる研究があることを知らないわけではなかった。
だが、それをフィレーナに言う気はしなかった。
それが、本当にフィス本人であろうと、フィレーナに対する復讐にどれほど固執していようと、今のフィレーナという存在からすれば、取るに足らぬことだ。
剣でかなわぬほどの強敵なら、大砲でも爆弾でも使って倒せばいい。
フィレーナができぬならおれがやってやる。
あいつを守るために、大立ち回りをするのは、この戦いのけちな記録を書くよりは、よっぽど楽しいだろう。
ネストは妙に明るい気分になって、船の武器庫に行き自分にあった剣や手榴弾や白熱砲を探し始めた。
ここ数年、たいした武器は握っていなかったが、もともと軍人の家系に生まれたネストは、闘技に関しては自信があった。
事実、数年前まで黒い悪魔と差しで戦える実力はあった。
……歳はとったが、酒を飲んでいない分、今のほうが動けるかもしれない……
ネストが武器を手にしながら、これほど浮き浮きした気分になれるのは、三歳の誕生日祝いに母親から、古風な火薬式だが十分殺傷能力のある自動拳銃を贈られた時以来のことだった。

＊

西部海岸地方ルシベ……汚濁(おだく)した波を蹴(け)たてて、二百を越えるフィレーナの大艦隊が港湾に入っていく。

すでに上陸した先行部隊によって、ルシベの街に、帝国軍は一兵もいないことが確認されていた。

兵隊どころか、帝国人の市民さえ一人もいなかった。

反乱に荷担しなかった奴隷(クレチア)と、近くの街から戦災を避けて流れ込んできた流民と浮浪者(ふろうしゃ)が、申し訳程度の小旗を振って、力なく歓迎の意を表した。

反乱軍は、ルシベに無血で上陸した。

いつもの戦いなら定例行事のように起こっていた掠奪(りゃくだつ)や暴動も、今回の上陸では発生しなかった。

都市の倉庫には、信じられない量の食糧が貯蔵されていたのだ。

街に残された奴隷(クレチア)たちの話だと、ここ数か月のうちに全国各地から集結し、艦隊に乗船して消えていった帝国軍兵士たちが運び込んだものだという。

帝国軍兵士たちは、おそらく自分たちが食べるつもりで運んできた。

だが、実は、やがて上陸してくる反乱軍の食糧を用意して、自分たちは海に呑(の)まれて消えていく結果になってしまった。

その量は、五百万人が一カ月は食べていけるだけあった。

飢えていた反乱軍や流民は、腹を満たすのに夢中で、掠奪や暴動を起こす余裕もなかったし、彼らを妨害する敵もいなかった。

　それぞれの船から上陸したフィレーナ軍の幹部たちは、ルシベの市庁舎を仮の反乱軍本部にした。

　集まった一同は、さっそく会議を始めた。

「やはり、帝国上層部は、われわれがここに上陸するのを予想していたんだ。最後の晩餐まで用意してな」

　バンニルが溜め息まじりで言った。

「最後の晩餐？　なるほどね」

　ナスカが頷いた。

「この食糧で英気を養って、最後の戦いに元気に出ていってことさ。元気でなければ帝国軍と対等に戦えんからな」

「そして、もうひとつ」

　バンニルはつけくわえた。

「今、どこの都市にもこれほどの食糧は蓄積されていないだろう。ということは、あと先、かえりみずの大判振る舞いだ。このあとの食糧は、必要ないってことさ。次の戦いで、それだけの人間が消える。おそらく、帝国は決着をつける気だ」

「おれたち反乱軍は結局、帝国から逃げた。勝ったと浮かれていても、結局は、帝国上層部の

手のひらで踊っているだけか」
「帝国人だっておなじさ。最後の戦いにまっしぐらだ……」
「いったい、何人の命が失われればいいというんです？」
やつれきった顔だが、しかし怒りのこもった声で、テスが聞いた。
「いやあな計算……それでもやらなきゃ駄目？」
リラが、溜め息をつきながら言った。
「嫌なら止めておけ。私が考えたとおり、帝国上層部が動くとしたら、そのうちあちらから教えてくれるよ」
「どちらが勝つかはともかくとして、戦いまでの手順は、帝国にまかせていいよね」
フィレーナがパンニルに聞いた。
パンニルは頷いた。
「残念ながら、それしかない。帝国がこれほどわれわれを優遇してくれるんだ。妙な作戦をたてて、裏をかいちゃ失礼だ。要するに相手が決めた場所で、戦うしかない。そこはけっして帝国に有利な場所ではない。双方、都合よく数を減らせるような、公平な場所を選んでくれるだろう。その前に、われわれが救出して世界各地に運んだ反乱軍を、この街に、集結させねばならない」
「そう……だったら……裏をかくわけじゃないが、戦いの前にもう一つだけやっておかなきゃ……」

フィレーナはフィアアイの民の代表、ファンドナとフィラーレに言った。

「ありがとう……いろいろ……。みんなをこの街に集め終えたら、船に乗って海へ戻ってください」

「どういうこと？」

フィラーレはけげんそうにフィレーナを見た。

「もう、僕らに船はいらない。あとは陸の戦いだけです。そして、たぶんすべてが決まります。けれど、船があれば、少しの間でも海に逃げようとする者がきっと出てきます。船に人間が殺到して争いが起こる。助かると思えば、海に弱い帝国人ですら、船に乗りたがるかもしれない。藁にもすがるっていうけれど、それじゃ本当に、藁が沈んでしまいますよね。あの艦隊は、フィアアイの人たちの人数だけ乗せているなら、自給自足でいつまでも海を漂っていられます」

「いいえ。陸が滅びれば海もやがて滅びてしまうわ。私たちも戦うわ。海だけで生きていけるほど、海はもうきれいじゃない」

「かもしれない……いつかは……でも、それは今じゃない。これから始まる戦いは、陸に住む人たちの責任で起きたものだ。戦いのやりかたさえ知らない海の人たちが、関わることじゃない。陸の争いに関わらずに少しだけでも多く生きてほしいんです。それに、あの艦隊は、フィアイの人たちがいなければ、今、この海に浮かんじゃいない」

「でも、もともとはあなたの国、フィロセラの船だわ」

「フィロセラは海の国でした。大昔はね。でも、陸と関わり、陸を利用し、陸を牛耳ろうとし

て、結局、海までめちゃくちゃにした。世界全部をおかしくしちゃった。昔、海で生きていたフィロセラが、海に対してできたことといったら……」

　フィレーナは、かたわらにあった剣を握った。

「水槽一杯分の汚れた水を綺麗にする、ちっぽけな剣……フィレーナ……海の魂なんて名前をつけても、これっぽっちのものでしかないんです。フィロセラはいつの間にか海の国ではなくなった。お金という武器を使う陸の国です。そして、フィロセラは滅びてしまった。船は、海に生きる人のものです。それが、一番幸せです。あの船は、昔も今も海で生き続けてきたフィアイの人たちのものでいいんです」

「私もそう思っちゃう。陸に上がって棒振り回したって似合わない。海で鯨、追っかけているのが素敵。だれも文句なんていわないよ」

「しかし……われわれはここまでつきあってしまった。最後までやる」

　口数の少ないファンドナが、とつとつと言った。

「生きていてほしいんだ。あなたたちに！」

　フィレーナは叫ぶように言った。

「僕は、海のフィレーナだ。陸に上がっても、海のフィレーナでいたい。どこかの海で生きているあなたたちと気持ちだけは一緒にいたい。土地を失ったあなたたちのために戦っていると思いたい……そのためにあなたたちには生きられるかぎり、生きていてほしい……」

　フィレーナをじっと見つめていたファンドナは……やがて頷いた。

「わかった。生きていよう。海のどこかで……そして、いつかどこかで、フィレーナがフィアイの海のように青い海をみつけたら、そこにおれたちはいる」
そして、リラに言った。
「あんたはどうする？　フィレーナが万が一の時……海に来る？……」
リラはほほ笑んだ。
フィレーナとファンドナの交わした約束を思い出したのだ。
それは、どちらかに何事かあったときは、お互いの妻の面倒を見るというものだった。
「ありがとう……でも」
ファンドナは頷いた。
「わかってる。あんたはフィレーナの、いつまでも妻だね」
「そうでーす」
リラはおどけて言った。
そして、フィラーレに肩を竦めてみせて……
「奥さん二人になっちゃ困るよね」
フィラーレは、わざと真面目な顔を作って言った。
「正直言って……困ります」
二人は互いの顔を見て吹き出した。
「ギャッピーは連れていって……ね」

リラはフィレーナに同意を求めた。
「ギャッピーには、犬たちが待っているもの」
「ああ……、この戦いは、人間たちの戦いだ……ギャッピーや犬たちが巻ぞえをくうことはない……それに、人間は飢えると……」
犬や猫のように人間に親しい動物にとって、実は食糧のなくなった人間たちは一番危険な存在だった。
そんな場にギャッピーをいさせたくなかった。
ギャッピーは、その声が聞こえたのか聞こえないのか……知らぬふりをして、フィレーナのかたわらで横になっていた。

*

昼夜を通した艦隊の往復輸送の結果、世界中に散らばっていた反乱軍はルシベに集結した。
そして、すべての反乱軍の集結が確認された夜……フィレーナの大艦隊は、静かにルシベの港湾から姿を消した。
船にはギャッピーも乗せられていた。
他の兵士たちに感づかれないよう、幹部はだれも見送りはしなかった。
ギャッピーは、船の船尾の甲板から遠ざかっていく街の明かりを、じっと見つめていた。
そして、船の進んでいく舳先を振り返った。
そこには、三つの月に照らされた海が広がっている。

その先には、仲間の犬たちが待っている。
だが、仲間はいても、そこは海の上だ。
犬たちだって、船の上では狩りをする必要はないし、陸の氷原ほどの危険はない。
ギャッピーは、再び船尾の街の明かりを見た。
あの陸地に、ほとんど動物が生き残っていないことをギャッピーは知っていた。
武器を持った人間たちが飢えたら、その土地から動物は消える。
ギャッピーがどんなに獰猛（どうもう）な獣に見えても、飢えた人間には、動く食糧にしか見えないだろう。
危険は承知していた。
だが、そこにフィレーナの戦いがあることも知っていた。
狼犬（ウルフドッグ）は戦士だった。
ギャッピーは種族が絶えただろう最後の狼犬（ウルフドッグ）だった。
最後の狼犬（ウルフドッグ）の生きざまが……平穏（へいおん）だが船の上の生活……。
それは、もはや狼犬（ウルフドッグ）ではない。
最後の狼犬（ウルフドッグ）は、戦いを選ぶことにした。
ギャッピーは甲板を蹴って海に飛び込んだ。
陸に辿（たど）りついたギャッピーは、しかしフィレーナに会いに行かなかった。
フィレーナたちはともかく、人間に姿を晒（さら）すのは危険だと感じた。

ギャッピーはつかず離れず距離をおいてフィレーナを見守ることにした。

*

湾内に一隻の船もいないことがわかった翌朝……

反乱軍の間に動揺が走ったが、さらに大きな動揺がそれを吹き飛ばした。

街頭拡声器から帝国の告知が聞こえてきたのだ。

「反乱軍の諸君……われわれは帝国の上層部、最優秀種の更なる進化種、皇帝種である。これから聞こえてくる告知は、帝国の最重要機密であり、虚偽ないこの世界の実情である。この告知は諸君のみならず帝国の各都市……帝国人、異民族、奴隷の分け隔てなく知らされるものとする。現在、世界の環境状況は最悪と言っていい。食糧、水、空気すべてが急速に劣化の一途を辿っている。

帝国のいかなる科学技術もこの窮地を救うことは不可能だった。

救える機会もあったろうが、それは、帝国創設以前になされるべきだった。

帝国の時代にはすでに手遅れだった。

人類の祖先を恨んだところで、今さら、時が戻るはずもない。

ただいまより、世界の現状を発表する。

一年後、この星に生存が許容される人間の数は、五百万人弱にすぎない。仮に一年後に人口が五百万にしぼられたところで、さらに二年後は百万しか生存できない。……このままでは五年以内にこの星から人類は絶滅してしまうだろう。

この急激な絶滅から、一時的にも人類を救うには、今ただちに、この星の人口を十万人以下に減少させなければならない。
この計算にはもはや疑念の余地はない。
現在、この星には、たびかさなる反乱によって急速に人口が減少したものの、ほぼ三千万の人間が生きている。
諸君は、苛酷な状況の中、生存競争を見事に生き延びた人間だといえる。
だが、さらに、生き延びることができるのは、三百分の一、諸君一人が生きるには、三百人の人間が消えねばならない。
ここまできては、たとえ、われわれ、全世界を支配する、帝国上層部皇帝種といえども、だれが生き延びるべきか、判定することはできない。
ここまで生きてきた諸君に優劣をつけ、劣者を見極め死を命ずることは不可能だ。
諸君のだれもに、生き延びるべき資格があるといえる。
だが、しかし、生きられるのは十万人にすぎない現実も確かである。
その十万人にだれがなるか……その前に、今……、帝国には二種類の人類がいる。
帝国人と、帝国人にあらざる者たちだ。
この二種は、同じ人類でありながら、帝国人種の急速な変化によって、人類学上の旧人と新人ほどの違いができてしまった。
帝国人の急速な変化をわれわれは進化と呼んだが、残念ながら、この星に生存するに適した

人類という見地から見れば、帝国人の進化種が必ずしも優れているとは言い切れない」

帝国上層部の告知を聞きながら、ネストはテスに言った。

「かなり、正直な告知だ」

「まるで、不治の病の告知です……いくら正直でも、いうべきことなんでしょうか？」

「少なくともこの告知は、患者はともかく、告知者の苦悩は救うさ。彼らは、真実を言うことによって、助からないものを助けるふりをするという嘘からだけは逃れることができる。そのあと、どう考えるかは患者次第だ……」

告知は、さらに続いた。

「生存許容数はわずか十万……帝国人と非帝国人の体質と性質は、もはや共存不可能なほど違っている。帝国人にとって適切な環境は、非帝国人に適すとはいえず、逆もまた同じである。二つの人種の環境を保持する余裕はこの星にはない。どちらか一種が精いっぱいである。ならば、この星に生きることのできるのは、どちらか一種に絞られるべきである……もう一度言う……われわれはどちらが選別されるべきか、決定的な判断をつけられない。決めるのは、諸君自身である。そして、どちらの人種も滅亡は望まぬだろう。どちらが生き延びるべきか、帝国人と非帝国人の戦いによって決めるしかない。帝国人が勝つにしろ、非帝国人が勝つにしろ、この戦いに破れたほうが消える。われわれは、人類の特定の種を瞬時に消滅させる新爆弾という武器を持っている。戦いの結果が出たと判断したとき、われわれはこの爆弾を使用するつもりだ。今現在、この星の帝国人と非帝国人の比率は五分と五分である。戦闘可能な人間の数も

五分五分である。どちらが勝つかは諸君次第である。帝国上層部、皇帝種はどちらにも荷担しない。なぜなら、われわれは、帝国の存続よりも人類の存続を切望するからだ」

「まるで、自分が帝国人ではないようなくちぶりだな」

　バンニルが呟いた。

「彼らは帝国人というより……なにより策士なのさ。人類存続という目的を達成するためには、必要でないものは忘れる。目的のためには、国も民族もすぐに捨てられる」

　ネストが言った。

「おれも策士の一人だが……」

　バンニルが肩を竦めた。

「やつらはもっと玄人(プロ)だ。もし、非帝国人が戦いに勝ったなら、帝国人である彼ら自身をも消すつもりだ」

　ネストが言った。

「そういうのは玄人とはいわんよ。玄人は人間だ。作戦遂行に自分の生きざまを計算にいれないような失敗は、電算機のすることだ。もっとも今回はこのおれも、電算機以上の作戦は立てられないが……」

　バンニルは苦笑して、続けた。

「おれなら、おれの側が負けても、作戦どおり死のうとなんぞは思わんよ。その場に及んでも、じたばた、てめえだけは生き残る算段をするだろうね」

帝国全土に向けて告知は流れ続けた。

「決戦の地は、デビス中央高原……今現在、帝国領内に生存するものは、帝国、非帝国、老若男女、傷病のいかんを問わず、集結せよ。帝国のすべての輸送機関は、今後、デビス中央高原への人員輸送に利用される。この地は現在帝国内で、自然環境が最も劣化していない地区で、帝国人の体質にとっても、非帝国人の体質にとっても公平かつ快適に戦える場所である。この地は、空にもっとも近い帝国の聖地として、帝国人、非帝国人を問わず人々の立ち入りが禁止されていた地区である。したがって地理は一般の帝国人にとっても不明であり、帝国人に地の利による優位もない。デビス中央高原の勝者がこの星に存続する権利を持つこととする。なお、武器は白熱光線から旧式の火薬まで、環境破壊が懸念される近代、および前近代兵器の使用はこれを禁ずる。

基本として、剣、槍、矢、斧……などの金属兵器に限られる。

白熱光線発射可能の剣および槍は、必ず発射回路を取り外すこと……。

付け加えておくが、近代および前近代兵器を無断で持ち込もうとしても不可能である。

聖地の周囲は、探知装置による厳重な警備がなされており、感知されしだい自動白熱砲により攻撃を受けることになろう。

白熱砲の破壊力は、周囲五百四方である。

一人の不心得者のために、多くの者がまきぞえを食わぬよう互いに注意されんことを……」

そして、さらに、ほとんど脅迫ともいえる通告が続いた。

「もしも帝国人、異民族を問わずこの告知にしたがわぬものが出た場合……すなわち逃亡者、潜伏者の感知された都市、および地域は、汎用型の新爆弾の洗礼を浴びることになる。この爆弾は、炸裂した範囲に生存する人間以外の生物にはなんら影響はないが、遺伝子に人間の要素を持つ生物は、すべてが死滅する。すなわち、人種性別にかかわらず、人間は生きていない。すなわちこの戦いに参加せぬものは、生存する可能性すらない……ということである」

告知の流れる全帝国の都市に、動揺はなかった。

自暴自棄になった暴動もおこらなかった。

立て続く戦乱に慣れ、生き残り、しかも疲れ切った人々は、今さら、何が起こっても驚こうとしなかった。

すでに今までの日常が、明日をも知れない命だったのだ。

何かに希望や夢をみつけだしそれに精神の救いを求めたり、理不尽な現実に精神を痛め苦悩し暴発するほど繊細な神経を持つ人間は、もうほとんど生きていなかった。

むしろ、帝国上層部の告知に、願ってもいなかった光明を見いだしたものが多かった。

なぜなら……この戦いに参加しさえすれば、絶望しきっていた明日に、確率は限りなく微小であっても生き残れる可能性が示されたのだ。

「武器の制限……、決められた場所……、しかも、戦いを断れない……まるで闘技試合だ」

フィレーナは溜め息をつく気もしなかった。

「勝ったとしても、生き残れるのは、そのうちの十万……」

リラが携帯通信電算機を見つめながらポツンと言った。
「本当の計算だと、五万人がいいところ。帝国はまだまだ、サバを読んでいる。ま……十万人が五万人になったところで、消えていく人の膨大さに比べたら、たいした誤差じゃないけれど」
「でも、とりあえず勝たなければ、次はない……。なんだかこの星に住むみんなが、闘技場にむりやり引き出された闘技士にされちゃったね……」
「そんな闘技試合を見て、いったい、だれが、喜んでいるんだろうね」
「そんなやつがいるとしたら、そいつこそこの剣で……」
フィレーナは、愛用の剣を鞘から抜いた。
そして、溜め息をついた。
「だれもよろこんじゃいないよね……」
そして、剣の柄をはずした。
フィレーナと同じ名のその剣は、白熱光線の代わりに、武器としての効果はないが、水質を浄化する青白い光を放つことができた。
殺傷能力はないが、光線には違いない。
フィレーナは、告知の指示どおり、発射回路をはずそうと思ったのだ。
だが、柄の中には、それらしい仕組みはなかった。
「困ったな……いままで光線をめったに使わなかったから、調べたことがなかったけれど……

この発射装置は普通の仕組みじゃないみたいだ。この剣、戦いに持ち込めるかなあ」

「武器探知で反応するかどうか調べてみるわ」

リラはそう言ってフィレーナから柄を受け取った。

リラは、検査芯棒（しんぼう）で、柄の部分を何度も調べた。

「武器反応はまるでないわ。……この剣は、大昔の剣以上の武器能力はない。光線の浄化作用は、武器として価値はない……持ち込みは大丈夫（だいじょうぶ）だと思う」

「光線は飾りか……確かに、なんの役にもたたなかったよね」

フィレーナは柄をもとに戻すと、光線を発射した。

青白い光があたりをおおった。

いつもなら、なんとなくやさしい気分にさせられるその光も、あの告知を聞かされたあとのフィレーナとリラの暗鬱（あんうつ）な気持ちには、なんの効果もなかった。

＊

帝国全土への告知は、そのあとも同じ内容で間断なく流れ続けた。

人々はまるで旅鼠（レミング）の群れのように、デビス中央高原に向かった。

旅鼠は集団自殺する動物として知られているが、少なくとも人々のそれは、集団自殺ではなかった。

どんな犠牲と殺戮（さつりく）が待っていようと、自らの生存へのわずかな希望が足を動かしていた。

ルシベに再上陸したフィレーナたちも、デビス中央高原に進軍を開始した。

硝子の城……皇帝種たちの見守る帝国の地図に点滅していた都市部の明かりが、ひとつまたひとつと消えていく。
その明かりは、人間のいる印だった。
明かりの消えるたびに無人の街が増えていく。
そして、街から離れ移動していく光は、人の流れだ。
光の流れは帝国の至るところからデビス中央高原に集中していく。
「大した混乱もなく告知にしたがってくれているようです」
皇帝種の一人が言った。
「新爆弾を使わずに済んで助かりましたわ。使おうとしても使えませんけれど……」
女の一人がほほ笑んだ。
「新爆弾は今、超皇帝種の意のままです。もし、告知にしたがわぬ者がでた場合、超皇帝種は新爆弾をつかったでしょうか？　彼らにその決定ができる勇気があるかどうか、知りたいものですね」
両性の皇帝種が言った。
皇帝種の会話を聞いているに違いない超皇帝種の答えを、明らかに挑発するような口ぶりだった。
しかし超皇帝種が、答える気配はなかった。
両性の皇帝種は肩を竦めて続けた。

「いずれにしろわれわれのやらねばならなかったお膳立てはもうすぐ終わります」
もう一人が、感慨深げに言った。
「われわれ皇帝種の終わりも近づきました。人類が存続するか否かは、われわれの責任から別の者たちへ移る」
「そう、もう、あなたたちは無用の長物だ」
部屋の片隅から男の声がした。
皇帝種たちは声の主を見た。
それは皇帝種でも帝国人でもない男だった。
皇帝種以外の人間が、この部屋に入ってきたのは初めてだった。
フィスが剣を持って立っていた。
「私が、ここに入ってきたことは気がついていたでしょう」
「もちろんだよ」
皇帝種の一人が答えた。
「ここは、無断で入れるほど、警備の杜撰な場所ではないからね。もっとも、今さら、おまえに隠しだてする秘密もないけれどね」
「では……」
フィスが言った。
「私が、何をしにここへきたかもおわかりですね」

両性の皇帝種が答える。
「ああ……ただ手に持ったその剣はいささか不粋だけれどね」
フィスは微笑を浮かべ肩を竦めた。
「私の信用できるのはこれだけです。私の一生はそう長くない。使う必要のあるときは惜しまず使います」
最年長の皇帝種が聞いた。
「ともかく、おまえの言いたいことを聞こう」
フィスは、皇帝種たちをゆっくりと見回してから言った。
「この戦い……、あなたたちはどちらが勝つとお考えですか」
最年少の皇帝種が答える。
「五分と五分の勢力だ。どちらともいえない。私は、公平な戦いを仕組んだつもりだ」
「公平ね……確かに数の上ではね……しかし、帝国はこのままでは負けますよ」
フィスはずばりといった。
「ずいぶん、はっきりと予想するね。根拠でもあるのかな」
皇帝種の一人が言った。
「あなたたちもわかっているはずです。帝国が勝てないことを……確かに、帝国軍と反乱軍は五分と五分の戦力です。……しかも、戦法も戦略もさして役に立たない正面衝突の戦いの場合勝敗を決めるのはわずかの差でしょう。……大雑把な言い方が許されるなら、運がいいほうが

勝つ……たとえば勝敗の決め手は、偶然でも、事故でもいい、指揮官の死んだほうが負けということになるかもしれません。では、反乱軍の指揮官、フィレーナを殺せば、帝国軍は勝てるか？　帝国軍と反乱軍が、おっしゃるように五分五分なら勝てるかも知れません。でも、この戦いは本当に五分と五分でしょうか？　そうではないでしょう？　戦力は同じでも、戦意は明らかに帝国が劣っている」

「帝国人には戦う意欲がないというのかな？」

皇帝種の一人が聞いた。

「戦う意欲はあっても、生きようとする意欲で劣ります」

フィスはきっぱりと言ってさらに続けた。

「反乱軍の人々は、帝国の支配下で虐げられながらしぶとく生き続けてきた。帝国人なら死んだほうがましだと思える状況の中でも生き続けてきた。そこに今、生き延びることのできる希望ができた。わずか十万人でも、十万人という数がでただけ、今までの状況よりはましかもしれない。しかも、彼らの先頭には、奇跡を起こした人物がいる。フィレーナは、今やこの世界の最下層から全反乱軍の頂点になり上がった。彼は帝国の人種の中で、もっとも虐げられた奴隷だ。普通なら、闘技場の片隅で斬り刻まれ豚の餌にされても、なんの不思議もない男です。そんな奴隷が可能にした奇跡を、他の人間たちができないはずはない。だれもがフィレーナになれるかもしれない。フィレーナは人々にそう思わせた。フィレーナの存在は、それだけで十分な効果があった。フィレーナが仮にこの戦いで首を斬られ、さらしものになっても彼らは意

気消沈などしない。死ねば死んだで、むしろフィレーナが今まで生き残れてきた奇跡を確認し、次のフィレーナを目指すでしょう。フィレーナがここまでできたんだ。ならば、われわれにできぬはずはない……もう、フィレーナはひとりではないのです。今は反乱軍のすべての人々が、生き残りの十万を目指すフィレーナなのです」

「なるほど……」

両性の皇帝種は頷いた。

「で、われわれ帝国人をおまえはどう分析（ぶんせき）するかね」

フィスは淀（よど）みなく答えた。

「帝国人は諦めることになれている……としか言いようがありません。帝国人は生まれたときから、種という選別で階級差をつけられました。普通種は普通種以上にはなれず、優秀種はそれ以上にはなれません。そんな可能性のなさに慣らされた人間たちが帝国人です」

皇帝種の一人が、さして反論する口調でもなく言った。

「だが帝国人種は、更なる高みへの進化を、可能性を目指し続けてきた人種だ」

フィスは、素直に頷いた。

「人種としてはね。全体としての帝国人種はそうでしょう。けれど、個人としてはどうですか？　帝国人は、進歩という言葉が好きです。人種の進歩を願う。科学の進歩に熱狂する。国家の勝利、民族の勝利に夢中になる。けれど、それは、実のところ、個人としての進歩でも勝利でもありません。進化も進歩も自分のことのように思ってはいるが、実は、帝国という総体の

ものであり、個人自身はその進化や進歩からは取り残されています。帝国の価値観の中では、可能性も夢も、本人の中にはなく、新しく生まれてくる優秀な種の中にあります。優秀種は最優秀種に可能性と夢を託し、最優秀種は皇帝種に託し、あなたたち皇帝種は、さらに新たに生まれてくる種に存続の夢を託す。帝国人は自分ではなく次世代にしか夢を託せない。帝国人の可能性や夢に、本人は不在なのです。帝国人は帝国という集団の可能性には夢を見ることができるが、自分自身の可能性に夢を見る発想はない。帝国人は自分自身の可能性をあきらめている。いいえ、あきらめている自分自身にすら気がついていないでしょう」

フィスは、人なつっこい笑顔で、皇帝種たちを見た。

「生後四年しかたっていない子供による帝国の分析はこれくらいにしましょう……この戦いは、人類の存続を賭けた帝国軍と反乱軍の決着というお題目はついていても、生き残れるのはわずかな数の人間……なにはともあれ個人が生き残らなければ、次は語れない戦いです。この戦いはいわば個人の生存競争です。帝国人は集団目的をもって戦うときは強いかもしれない。だが、個人が生き残るための戦い……自分の命と死に直面しなければならない戦いに、自分自身の夢や可能性のない帝国人はしぶとくなれますか。自分自身の生だけにすがって戦えますか。自分の可能性をあきらめることに慣らされた帝国人が、自分の生をあきらめずどこまで戦えますか？」

「確かに帝国人は生きる意欲において、反乱軍の人間たちに数段劣るだろう。帝国軍は負けるかもしれないね」

両性の皇帝種はあっさりと認めた。
「ところが……負けられては困るんです」
フィスは笑みを絶やさず言った。
「あなたたちは、もう、今までの帝国人を捨てている。……とりあえず、人種の存続の資格を失ったように見える今までの帝国人は消えてもらい、存続の判断は次にまかせるつもりでしょう？」
両性は顔色一つ変えず聞いた。
「次とは？……」
「生まれているんでしょう？　次の帝国人種が……でなければ、ここまで徹底的に今までの帝国人種を捨てた計画を実行できない……まあ……旧式の帝国人種が消えようと消えまいと結果的には、どうでもいいようなことですが、今は困るんです……」
フィスは、手に持った剣の柄に目を下ろした。
そして、白熱光線の発射装置を切りながら言った。
「いずれ、旧式の帝国人種が新爆弾によって消える運命にしても、今度の戦いはとりあえず帝国に勝ってもらいたいんです」
「私たちの予想を少し変えたいわけだね」
「ええ……今、帝国軍が負けてしまっては、フィレーナが苦しまない。私は、フィレーナをできるかぎり痛めつけたい。肉体的にも心理的にも苦痛の極みの中で殺したい。帝国人が滅びる

のは、それからでも間に合うでしょう？」
両性の皇帝種が言った。
「おまえはすべてがフィレーナなのだね」
「他に私が存在する理由がありますか」
フィスは鞘から剣を抜いた。
「帝国を勝利に導くために、以後の帝国軍の指揮権は私が頂きます……」
皇帝種たちは、怯む様子もなく平然としていた。
両性の皇帝種は静かに言った。
「おまえがそうするだろうことは、予想できた。しかし、その剣は何のためかな……？」
「剣は剣なりの使い道です。光線などの不粋なものは使いません。ですから、ここの防御装置も役にたたないでしょう。あなたたちもまさか、剣が通じないほど人間離れした体ではないでしょう？」
「われわれを殺す必要があるのかな」
「必要絶対条件というわけではありません」
フィスは言った。
「ただ、私がこんなふうに存在しているのは、ひとつはフィレーナ、そしてもうひとつは、あなたたちのせいでしょう。フィレーナだけを殺しただけですます訳にはいかない、と思うのです。それに、あなたたちの冷静な態度が、どうも私は気に入らないのです」

フィスは、いい終わらぬうちに四人の皇帝種を、斬り倒していた。
残っていた女の皇帝種が言った。
「あなたを育てたのは私たちですよ」
「ありがとう。だから、責任とってください」
女の皇帝種の頭から股間までが二つに割れた。
「超皇帝種……あなたはこれを許すのですね」
六人目の皇帝種が呟いた。
彼の脳裏に、だれも語りかけなかった。
語りかけたにしても、聞いている時間もなく首が飛んだ。
両性の皇帝種がフィスに言った。
「ま……われわれ皇帝種は、しょせん橋渡しにすぎない……特に私などは、人類にとって無用の長物だった」
「私にとってもです」
両性の胸にフィスの剣がつきたった。
フィスは、剣についた血を払い、目に見えぬ相手に語りかけた。
「あなたたちは、黙ってこれを見ていた。止めることもできたでしょうに……。ねえ……私に答える気はないのですか……？　私は、あなたたちの出方をなにより伺いたかったんですが……」

答えはなかった。
フィスは頷いた。
「それじゃあまあ……とりあえず、私は私の好きなようにいたしましょう」
フィスは、剣の柄についた光線の発射装置を開けた。
そして、皇帝種たちの屍体を消滅させた。
硝子の城の武器探知装置も警報も鳴らなかった。
超皇帝種が、フィスの皇帝種殺害を知っていて見逃したことは確かなようだった。

*

デビス中央高原……
この星の帝国領内に生存するすべての人間が、この高原に集まっていた。
人々は二種の人間だった。
帝国人種と帝国人種でないもの……。
本来なら反乱軍であっても、帝国人種に属するものは、帝国側になるしかなかった。
反乱軍が勝てば、どちらに属していようと帝国人種を抹殺する新爆弾が炸裂するのだ。
ネストやテス、ラズルのような反帝国の帝国人種は、この戦いでどう動くのか……？
逆もまた同じだった。
帝国人種でないものが帝国に味方して、帝国が勝利しても、帝国人種以外を抹殺する新爆弾が炸裂すれば消えるしかない。

人種によって、これほど明確に敵味方が分かれねばならない戦いは、かつて、人類の歴史上なかっただろう。
だが、帝国軍の指揮官であるフィスという男が、帝国人でないことを知る者はいなかった。
そして、フィス以外、新爆弾の発射装置が、超皇帝種という新しい種に握られていることを知る者も、いなかった。
人類存続への戦い……その舞台のデビス中央高原に、出るべき駒は出揃(でそろ)った。
戦いは始まろうとしていた。

第4章

フィレーナ永遠に……

デビス中央高原に集結した人々は、自分の属する種によって、二つに分かれた。
硝子(ガラス)の城のあるデビス中部高原地方ジャンガーを背にして守るように帝国人種……。
対峙(たいじ)する側に帝国人種でないものが集まった。
帝国側の総指揮官(そうしきかん)フィスから反乱軍指揮官(しきかん)フィレーナに、戦闘開始の時を知らせる告知が来た。
その日時は、告知の三日後とされ……日付は帝国暦(ていこくれき)で示されてはいなかった。
告知には……「新時代元年一月一日……日の出とともに戦闘を開始する」と表記されていた。
反乱軍側に断る理由は、今さら何もなかった。
告知を受けた夜……。
指揮官の天幕に集まった幹部たちにフィレーナは言った。
「みんなが生き残ってほしい……でも、それ以上、もう、僕(ぼく)は何も言えない」
パンニルが頷(うなず)いた。
「それで十分だ。みんなこの戦いの意味を知っている。結果がどう出ようと、だれも文句は言えない。ここまで来たら生き残る生き残れないは、その人次第だ」

ナスカが肩を竦めて言った。
「御武運を祈るぐらいは言えるかもしれんがね。ま……しらじらしいか」
帝国人でありながら反乱軍にいるナスカやネストたちの複雑な心境が、フィレーナにはいまさらながら辛かった。
ナスカはフィレーナを見つめほほ笑んだ。
「何もいうな。もともと帝国人が帝国人をやめるのは、結構面倒くさいんでね。おれは今さら、もとに戻るほどまめじゃない。どうかね？　ネスト闘技作家大先生は」
ナスカはネストに話をふった。
「まあ……辛辣な批評家先生にからまれるような終幕にはしたくない」
「ともかく、とりあえずは帝国軍を倒すことだ。何の策もないがね」
パンニルがそう締めくくった。
「計算もいらないってことか……おつかれさま……」
リラは、やさしく携帯通信電算機の蓋をなでて閉じた。
実際、二度と携帯通信電算機を開くことはなかった。
三日後の戦いに計算や迷いをもうだれも持っていなかった。

＊

会議が終わったあと、フィレーナは病人たちが収容されている仮設天幕に行った。
そこにはオルカも寝かされていた。

つぎはぎだらけの顔は表情がなかったが、フィレーナを見つめる目には親しみがこもっていた。
「凄い回復力です。意識もはっきりしています。でも、お話はまだ……」
テスが治癒状態を説明した。
フィレーナはオルカの枕もとに座って囁くように言った。
「戦いは三日後に決まったよ」
オルカはかすかに頷くと、力をふりしぼって手を上げ、足元を指差した。
超大型剣があった。
「これかい？」
フィレーナは超大型剣をオルカの手に持たせた。
そのフィレーナの手を、オルカは握った。
そして、フィレーナの手のひらに指で字を書いた。
……世界一の闘技士はだれか……おまえと、戦いたかった……
「昔、戦ったじゃないか、僕は負けたよ……」
……おまえは……あの時、あきらめていた。生きること……死にたがるやつとの戦いは勝負ではない……
フィレーナは頷いた。
「いつかしよう……本当の戦い……」

オルカの目がほほ笑んだ。
そして、オルカはフィレーナの手のひらに書いた。
……戦うな……フィスとは……
「そいつが強いってことはわかる。でも、……戦場で出会ったなら……」
オルカは首をかすかに振った。
……あの男は、他の闘技士のだれとも違う……あの男の剣は、生きるためでもなく、相手を殺すためのものでもない。あの男の剣は、相手を無残に凌辱する。なぜ、そこまで人間を凌辱できるのかしらないが……あの男の剣は人間とは思えない……いくらあの男が強かろうと、そんな剣と一対一で戦っても意味はない……たとえ勝っても気味の悪さが残るだけだろう……あの男とは止めろ。おまえには、あの男と戦わなくても、戦わねばならぬ相手は多いはずだ……
オルカの指はたどたどしく、しかし、しっかりとフィレーナの手のひらに思いを伝えた。
「覚えておくよ……」
フィレーナは頷いた。
……いいか……あの男はおれにまかせろ……傷が治ったらおれがけりをつける……おれに残しておけ……
オルカは念を押すように、フィレーナの手をしっかりと握りしめた。
精いっぱいの力がこもっていた。
フィレーナはオルカの気持ちがありがたかった。

常識的に見て、オルカが負けたフィスに、フィレーナが勝てるはずがなかった。
それに、帝国人と他人種のどちらが多く生き残るかが勝負のこの戦いに、一対一の戦いが、ほとんど無意味なこともわかっている。
フィスという男の命も、剣を使う術をろくに知らぬ帝国の一般人の命も、一つには変わりない。
数が勝負の時に、相手にこだわってはいられない。
だが、フィレーナはフィスと戦場で出会えば戦いを逃げるはずがなかった。
闘技士は、挑まれた相手に背を向けはしない。
オルカはフィレーナを優秀な闘技士として認めてくれている。
だからこそ、口もきけぬほど辛い体調でありながら、「戦うな」と念を押してくれるのだ。
「オルカさんも……」
フィレーナは言った。
怪我で動けないオルカに対して、考えてみればしらじらしい台詞だが、フィレーナの本心から自然に出た言葉だった。
「生き残ってほしい……その剣が寂しがるよ……だれもその剣、使いこなせないもの」
オルカは頷いた。
目が笑っていた。

*

「フィレーナさん」
　オルカと別れ仮設天幕を出たフィレーナをテスが呼び止めた。
「戦いが始まったらお別れします」
　フィレーナは頷いた。
「仕方ないと思う。テスさんは帝国人だもの。いままで、病人や怪我人……いろいろありがとう」
　フィレーナは素直な気持ちで感謝した。
「いいえ。私はどちらの側にもつきません。私は帝国人である前に看護人です。私とここにいる看護人たちはみなさんと別行動をとります」
「別行動……？」
　フィレーナは聞き返した。
「怪我人を助けます。反乱軍、帝国軍を問わず、戦いで傷ついた怪我人を助けるつもりです」
　フィレーナは呆然とテスを見つめた。
　この戦いは、人類の存続という目的で、実は、この星の人間を減らすための戦いでもあるのだ。
　生存競争の中で、まず最初に消えていくのは、戦えない病人や怪我人の命のはずだった。
　テスはフィレーナの気持ちを察したのか、ほほ笑みながら言った。
「もちろん、この戦いの意味はよくわかっています。私たちのしようとしていることは戦いの

目的からすれば矛盾していいます。いずれ消されていくだろう命を助けても無駄だ……。きっと、みんながそう思うでしょう……でも……いいえ」
テスは首を振り気負った様子もなく淡々と言った。
「命を助けることに無駄なんて言葉はない。人類がいなくなったって、この星がなくなったって、生きようとしている命があるかぎり、看護することが無駄なはずがない。私はそのためにいます。世界がどう変わろうと、私が私でいる限り、私は変わらない。私は看護を止めませんん」
「私が私でいるかぎり……」
フィレーナは、テスの言葉を繰り返した。
「そうだね……確かにね」
フィレーナはテスを見つめて言った。
「必要なものがあったら言ってください」
「ありがとう……でも、今となっては、あえて必要なものなどありません……」
テスは、そこまで言って、付け加えた。
「そう……指揮官のあなたから、戦うみなさんに伝えてください。どんなことになっても、生きるのをあきらめないで……と……」
フィレーナは頷いた。
「ええ……必ず伝えます……もちろん」

その夜のうちに、反乱軍から独立した形で、負傷者の治療を目的とした救護部隊が生まれた。
「敵味方を問わず、怪我人とそれを救護する者を攻撃してはいけない」
そんな指令が、反乱軍全体に伝えられたが、それが実践されるとはだれにも思えなかった。
敵味方を問わず一人でも多くの人間を減らせば、それが結局、自らの生存につながる。
この戦いの本質からすれば、守られるはずのない指令だった。

＊

戦いの前夜……三つの月が、デビス中央高原を照らしている。
反乱軍に戦いの作戦は何もない。ただ、帝国軍を見つけたら戦うだけだ。
とはいえ、全員の武器の確認、さらに励ましや景気づけは必要だ。
フィレーナたち幹部は、それぞれ各部署での戦いの準備に忙しかった。
だが、今となっては何もすることのないリラは、一人で天幕の前に立ち野営の灯りを見つめていた。
灯りは、北辺の地で見た月のない夜の星空のように、瞬いている。
この数を多いと言っていいのか悪いのか……ともかくこの光のすべてが帝国に生存する人間のすべてだった。
……明日、夜が明ければ戦いが始まる。そして、この灯りのほとんどが消える。
……私もその一人になるかもしれないけれど……それでもまあ、ここまで生きてこられたのだからみっけものだったのかもしれない。

……だって、接待用奴隷(エンターテインメントクレチア)が帝国人にまともな奴隷(クレチア)として扱われる寿命は二十歳(さい)までだと言われている。あとは、格下げされ、使役用奴隷(クレチア)としてぼろぼろになるまでこき使われる。

そして、元接待用奴隷(エンターテインメントクレチア)で三十まで生きている女奴隷(クレチア)はめったにいない。

……私は、フィレーナのようにどこぞの血筋を引く由緒(ゆいしょ)なんてないし、両親が何者かも知らない。……ほとんど木のねっこから生まれたようなもので、おまけに、頼みもしないのに、奴隷(クレチア)として育てられてしまった。

この世界の女の子として、生まれた条件は最悪に近い。

それに容姿にしたって自分ではいいほうだと思うが、みんながみんな私の言い分を認めてくれたわけでもない。

でも、私はきっぱりいい切れる。

この灯りの下にいるだれよりも波瀾万丈(はらんばんじょう)で、だからこそ、幸せな時間を過ごせてきたと……私は胸を張って言える。

私は、この星を支配した帝国の末期をしっかり生きてた女……リラなんだぞ……って……リラは自分自身にそう叫んだ。

……でもなあ……

リラは肩を竦(すく)める。

けれど、こうして、一人で人々の灯りを見ていると、やはりなんだか物足りない。

あの灯りの一つ一つに……「私リラなんですーっ」って、わざわざ威張(いば)る気はないけど、ほ

んとうにそう言えるのかな……「フィレーナさんちのリラさんでーす」って、言わなきゃわからないとしたら……ま……いいか、フィレーナ大好きだし……フィレーナがいなきゃ今の私はないし……あ……フィレーナだって私がいなきゃ……今のフィレーナはない……私自信あります。……でも、私はリラだ。リラはリラであってリラ以外の何者でもない……まてよ。こんなこと考えてしまう私って、変かな。……欲が深いのかな。……いかんいかん……終幕近しの感傷で焼きがまわっているのかな……でもさあ……ようするに、私のお話は私が主役ってことでさあ……でも、これってなんだか妙ですね……決戦前夜……最終章の女性主人公（ヒロイン）って気分の盛り上がりじゃないんですよね……まいったな。こりゃ……しっかりしろ……リラ……あはは。

リラは独り言を言っている自分自身に照れて笑ってみた。

「元気な人だね。いつも」

天幕の影から声がして、男が現れた。

ラズルだった。

「あ……ども、やだな……私って馬鹿（ばか）みたいですね」

リラはますます照れた。

「いや、おれにとってあんたは驚きだった。まったくいつも意表をついていた」

「え……？」

リラは意味がわからず首を傾（かし）げた。

ラズルはほほ笑んだ。

「黙っていようと思っていた。だが、最後の最後に、言いたくなった。おれを全く忘れてしまったのかな……」

「忘れたって……？」

リラはまじまじとラズルの顔を見た。

「もったいぶる気はないから言うがね……昔、あんたと何度か俺は会っているんだ。あんた、最初出会ったときは仮面をつけて踊っていた……そして、次は……女性のしうちにしては、いささかきつかったな……」

リラは唐突に首都ボーでのあの日のことを思いだした。

「あ……あなた……」

リラはあとずさった。

……酔ってからんできて、その後も私をしばらくつけまわしていた奴……それがこの人なんて……

「思い出してくれたかな……」

リラはこくりと頷いた。

「ええ……だって……今さらとぼけてもややこしくなるだけですよね」

「ややこしくなったのは、おれの生きざまだった。あれ以来ね」

「……怒っているんですよね。落とし前つけるんだ……最後に……」

「ずいぶん長い間、そのつもりでいた。それだけが生きがいだったときもある」

「生きがい？　そんなに悪いことしたんですね。……私」
「悪いかどうかはともかく、それで帝国人を廃業した」
「……なら、たぶん、相当、ひどいことですよね」
リラは唇をかみしめた。
そしてラズルに言った。
「……わかりました。なんでもしてください。私に」
「え……？」
ラズルは意外そうな顔でリラを見つめた。
「落とし前、つけてください。私がしたことで、どれだけひどい目にあったのか……受け止めます。それって、私の責任ですもん」
「借金をかえすように言うね」
ラズルは肩を竦めた。
リラは今にも泣きそうな顔で言った。
「だって……他に言いようないです」
「別に、責任などないよ。あんたには」
「え……？」
「あんたはあんたを一生懸命生きていた。おれはそれにかすっただけだ。あんたにとってはおれは大した問題じゃない。それがあんたを見ていてよくわかった。あきれるほどにね。あんた

にとって大した問題じゃないことを、責任とらせて面白いかね？　だがあんたに出会ったことには違いない。おれにとっては大きな出会いだった。あんたとの出会いはおれを変えた。そのことだけを言おうと思った。最後にね」
「私になにも……しないの？」
「なにもしない。きっかけはあんただったのに、もうおれには、あんたとは関係ないおれ自身のやることが見えている。不思議なもんだ。一つの出会いってもんは……」
「ですか……」
「おれは、怪我人を治療する救護部隊を、この馬鹿げた戦いから守るつもりだ。こいつは帝国から落ちこぼれたからこそ見つけられた生きざまだ。あんたにお礼をいわなきゃいかんのかもしれんな」
リラは何も言えなかった。
まさか……「どういたしまして……私こそありがとう」
なんて言えないではないか。
「……さあ……そろそろ行くか……」
ラズルはそんなリラを見つめてほほ笑んだ。
「リラといったよね……あんたの元気は、気にいっている。生き残れよ……」
ラズルはそう言って、足早に去っていった。
リラはその後姿を見送りながら、急に元気になっていく自分を感じた。

「そうです。私はリラです。みなさん、私がリラです。生き残ります！　うん！」
リラは、自分に頷き野営の灯りに向かってにっこり笑った。

＊

その夜……。
救護部隊の仮設天幕はすでに戦場さながらの忙しさだった。
戦いに巻き込まれぬために救護部隊は深夜のうちに、反乱軍の陣地から離れていかねばならなかった。
背後からの声に、あわただしく医療器具を車に詰め込んでいるテスの手がふっと止まった。
「最後まで看護なんだね」
振り返るテスの前にネストが立っていた。
テスの肩から力が抜けた。そして答えた。
「はい……でも……他の生き方を、考えたことあるんです……なんども……けど……」
ふたりは見つめあった。
いきなり何かがはじけたように、テスは、ネストに駆け寄った。
ネストはテスを強く抱きしめた。
そしてロづけをした。
わずかな時間だったかもしれない。
しかし、長い時間のようにも感じられた。

仮設天幕の喧騒の中で、そこだけ時間が別だった。
やがてふたりは離れ……テスは涙に潤んだ目でネストを見つめて言った。
「会えてよかった……あなたと」
ネストも頷いた。
テスは自分を取り戻したように、いつものほほ笑みを浮かべ肩を竦めた。
「忘れません」
ネストは何も言わず頷いた。
テスはぺこりと頭を下げて、再び医療器具を運ぶ作業に戻った。
テスはもう振り向かなかった。
ネストは、そんなテスを今さらながら美しいと思った。
ネストは、その後姿をしばらく見つめていたが、ゆっくりと踵を返し、仮設天幕から出た。
そして、ネストは立ち止まった。
フィレーナが立っていた。
もしも、この戦いで最後まで生き残れる人々がいるなら、フィレーナは救護部隊にこそ生き残ってもらいたいと思った。
そう思えば思うほど自然に足がここへ向いてしまったのだ。
「いたのか……？」ネストが言った。
「ええ……さっきから……でも、僕のせいで、ふたりの邪魔しちゃいけないと思って……」

「邪魔か……おまえのせいで……」
ネストはふーっと溜め息をついた。
「邪魔なんかしちゃいないよ。おまえは……だれの邪魔もしちゃいない」
「え……？」
ネストはデビス中央高原に無数に瞬く人々の灯を見つめながら言った。
「ここに集まっただれもがフィレーナの名を知っている。明日から始まる戦いを、フィレーナと帝国の戦いだと言う者もいる。だが、この戦いは、生き残りを賭けた個人の戦いだ。フィレーナという名のおまえは、たまたま、この時代の反体制の象徴の位置にいた。そして、それにつきあおうとしたのはおれの意志だ。おれが決めたことだ。フィレーナ……何もおまえのせいじゃない。おまえはだれの邪魔もしていない」
「でも、僕の行く先、行くところでずいぶん大勢の人が、死んでいった」
「確かにな……だが、おまえにその責任をとれと言ったやつがいるかね……」
「え……？」
「むしろみんなは、自分の死より、おまえに生きろと言わなかったかね」
フィレーナは、立ち止まった。
確かにそうだった。
死ぬ間際にだれもがフィレーナに「生きろ」と言った。
そう言わないものも、呪いや恨みをフィレーナに吐きかけはしなかった。

まるで、フィレーナを容認するように、頷いて死んでいったような気がする。

「なぜ……？」

「そうだろうな。おまえはそういう気にさせるんだ。たぶん、人は自分の死際になって死と生を体で意識する。そして、生がいとおしくなる。そこに、おまえがいる。全身で生きているおまえがね。そんなとき、だれがおまえに、『生きろ』以外のことを言えるだろう」

ネストは自分に対して呟(つぶや)くように言った。

「……結局、人間は生きることが好きなんだろう……」

「生きることが好き？……それって……でも」

「そう……。当たり前のことだ。だが、その当たり前のことに結構気づかない。人間は、人が懸命(けんめい)に生きている姿が好きだ。だが、その気持ちに気がつかない。だから、自分が息をしていることも、生きていることも気づかない。フィレーナ……おまえは人に自分が生きていることを気づかせてくれるやつだ」

「なんだかそれってリラのこと、言っているみたいだ」

ネストは頷いた。

「ああ……あの子もおまえと同じだ。だから……」

ネストは、フィレーナを見つめた。

「生きていろよ。ふたりとも……」

フィレーナは、頷いた。

「できれば……そうしたい」

「できれば永遠にな……」

「無理だよ。永遠なんて」

フィレーナは肩を竦めた。

「言葉のあやだ」

ネストはほほ笑んだ。そして、言った。

「早く寝たほうがいい。明日は早い」

「うん、おやすみ」

「おやすみ」

フィレーナは、軽く別れの合図の手を振ると、自分の天幕に駆けていった。

＊

「別れが済んだら飲まんかね」

酒瓶（さかびん）を持ったバンニルとナスカがネストの野営天幕で待っていた。

「あんたたちは……あの子たちとサヨナラしたかね」

ネストが聞いた。

「フィレーナとリラはどう考えても死ぬ気がしないんだ」

すでに酔いが回っているらしいバンニルが言った。

バンニルが酔った姿を人に見せるのは初めてだった。

「死なないかね。あの子たちは」
ネストが言った。
「死なないね、どう想像しても、情景が浮かばないんだ」
ナスカが酒をつぎながら言った。
「おれたちは死ぬ。だが、おれは遺書を残すような性格じゃない。だからサヨナラはいらない」
パンニルが注がれた酒をのみ干しながら言った。
「帝国人のナスカとおれはともかく、あんたまで今から死ぬと決めることはなかろう」
ネストがパンニルに言った。
「面倒だからだれにも言わなかったが、あいにく、体だけは帝国人なんでね。おまえさんたちと同じさ」
パンニルは肩を竦めた。
「物好きな帝国人が集まったわけか」
ナスカが新しい酒壜の蓋を開けながら言った。
「こんな時は、普通だと酒など飲まない方がさまになるんだがな」
ネストが呟いた。
「いつまでも肩こって生きていろよ」
パンニルが言った。

「飲めるのも生きている証拠か」
ネストは、酒壜を手にした。
「確かにいいおじさんは肩がこった。悪いおじさんに戻ろう」
三人は潰れるまで飲んだ。
三人は、酒に酔うより、格好悪い駄目なおじさんを演じることに酔うことにした。

＊

「お腹、減らない？　夜食作ろうか？」
フィレーナが天幕に入ってくるなりリラがそう聞いた。
「お腹いっぱい。もう、寝る」
「風呂は……お湯あるよ」
「うん……軽くお湯、かぶるだけでいい。一人でやるよ」
「じゃ、先、寝るね」
「うん、お休み」
「はい。お休み」
ふたりはいつもと変わらなかった。
お湯をかぶりおえたフィレーナが、毛布にくるまると、隣では、すでにリラの寝息が聞こえていた。
眠れるときに眠る癖のできているフィレーナも、すぐに眠りに落ちた。

それは戦いや危険のない夜の、いつもと変わらぬふたりだった。

＊

翌日、デビス中央高原に朝日が昇るとともに、確かに戦いは始まった。

死者の数は定かではない。

数えるものもいなかったし、数え切れる数でもなかったろう。

戦いが何日間、続いたか、それも定かではない。

この星の人類の歴史上、残されている最後の年月日が「新時代元年一月一日」……すなわち戦いの始まったとされる日までだった。

それ以後の年月は歴史に記載されていない。

戦いの記録らしいものは、帝国海軍全滅の時と違って、ほんのわずかだが残っている。

記載者の名は、定かではないが、反乱軍側の集結していた位置に落ちていた旧時代の小冊子の余白に、肉筆で走り書きされたものだった。

小冊子の半分はやけただれて判読不能だった。

せめて、金属性の電子手帳のようなものに書かれていれば、焼けることも少なく手帳に内蔵されているはずの時計によって時が判明したはずである。

小冊子の題名は「酒中毒の心理分析と治療法」

余白の書き込みの一行目はこう書かれてあった。

「夜明け……久しぶりの酒……飲み過ぎ……頭痛……あわててこの本を読む……」

そして、次の行が続く。

「帝国軍、凸型陣形を整え反乱軍に突入……帝国軍は、この戦いを勝つ気でいる。バンニル、……総力まかせのでたらめな白兵乱戦には、作戦の立てようなしと言っていたが、敵が陣形を持つならと手の打ちようありと二日酔いなれど驚喜……ただちに、反乱軍の陣形を指示……その作戦はかねてより、味方にも秘密にして用意していた節あり……崩れかけた反乱軍を、いったん後退させ、凹状陣形にて迎え撃つ……。古代文明期の大戦争の歩兵戦を思わせる……バンニル、帝国軍の命令系統、司令中枢を叩くべく攻撃部隊を出撃させる。フィレーナ、行方不明とか……」

そのあとの記載はまばらで、時間の前後関係も不明になっていく。

「攻撃部隊、成功？　帝国軍陣形崩れ、敵味方混戦。当初の予想どおり……白兵乱戦。昼……、帝国軍兵士遭遇……交戦……倒した敵三……

六……

五……

剣、折れる……

負傷者を治療する女性……救護部隊。テスにあらず。

死傷者の剣、拾う……

八……

二……

六……

数を数えて何になる……

味方死傷者、数え切れず。倒した敵……又数え切れず……

死屍累々(ししるいるい)……

野営地、炎上。

名を知る味方無し。

位置不明。

救護部隊……テスにあらず。

雨……どしゃぶり……

死者の血、洗う。

なぜこんなものを書いている。

疲労……

死傷者……

殺戮(さつりく)……敵味方区別つかず。

人間でいることは難しい。

夜……雨。

あてもなく探している。

テス……フィレーナ……リラ。

泥まみれ……
不思議……生きている。
雨……
夜……星空……
空が近い。
月……
ふたつ
巨大」
小冊子の記載はこれで終わっていた。

＊

フィレーナはどしゃぶりの雨の中を、真っすぐ進んでいた。
目指すは帝国軍の背後……皇帝種がいるはずのところだ。
本来、反乱軍の総指揮官である立場なら、軍の中央に鎮座し、戦いの決着がつくまで全体の戦況を把握し続けるべきなのだろう。
反乱軍の象徴としてのフィレーナなら、軍の士気を鼓舞し続けるために、少なくとも戦いの最後までは生き残るべきだろう。
しかし、この戦いはフィレーナが象徴とされ、反乱軍の勝利が第一目標ではあるが、最終的には個人個人が生き残るための戦いだった。

この戦いが終わっても、個々の生き残りのための生存競争は続くだろう。

「どこかでフィレーナは生きている。だから……私も生きる」

それがフィレーナの価値だとしたら、フィレーナは死んではならない。

それこそ、反乱軍に属するものが生き続ける限り、象徴としてのフィレーナは生き続けなければならない。

しかし、象徴としてのフィレーナが生き続けることとは、本当にフィレーナ自身が生きていることになるのか……。

……だれもが「僕に生きろ、生き続けろ」と言う。

だが、僕が生きるとはそういうことなのか……？　日が昇り、戦いが始まるまで、フィレーナはそれを考えないわけではなかった。

だが、陣営を整えて接近してくる帝国軍を見たとき、迷いのようなものは吹きとんだ。

……このままでは負ける……みんな死ぬ……生きたい……そのために敵の急所を叩く……敵の中枢……帝国軍の背後……皇帝種を刺し貫く……

一瞬のうちに、フィレーナはやるべきことを決めた。

それは、パンニルの作戦のように計算して導かれるものではなく、戦いに直面した闘技士としての直感だった。

そして、闘技士は、他人の力に頼らない。

どんな理屈があろうと、僕が戦わなければならない時、それは僕自身の戦いだ。

僕の戦いは僕ひとりがやる。手伝ってもらうのも、足をひっぱられるのも嫌だ。
それはボーの街で、ひとりで神殿を破壊したときと同じだ。
バンニルが攻撃隊を出撃させる前に、すでにフィレーナは一人で行動を始めていた。
「ちょっと行ってくる」
リラに言ったのはそれだけだった。
「いいよ。待ってる」
リラは軽く答えた。
ちょっとじゃないことはわかっていた。
出ていったきり帰ってこないことはよくあった。
だからといって他に言うことはなかった。
少なくとも行方のわからない間は、フィレーナは生きている。
今まではそうだった。
だから、これからもそうだ。
そう思うことにした。

＊

フィレーナはどしゃぶりのなか、一日中歩き続け硝子の城の下までやってきた。
何人もの帝国兵と擦れ違ったが、だれとも交戦しなかった。
戦いはすでに始まっており、だれもが前方の戦場に気持ちが飛んでいた。

どしゃぶりも手伝って、敵の一人が、隣を通り過ぎたと気づくものはいなかった。
最終的に、本人が生き残ることが大切な戦いだ。
敵の真ん中に一人で現れる無謀さを信じられるものはいなかった。
硝子の城は、豪雨を滝のようにはじき飛ばしそそり立っていた。
暗い空の中、いかにも帝国の、いや人類の最高位を誇るように、にぶく尊大に光っていた。
見上げるフィレーナは、はじけ飛ぶ雨粒のひとつよりも小さく見えた。
フィレーナは、城の入り口を探そうとした。
しかし、その必要はなかった。
……フィレーナ、よく来た。……
いきなり、声が頭の奥から聞こえた。
フィレーナは慌てなかった。
砂漠の森にいた人たちの伝達法によく似ていたからだ。
「あなたは……？」
フィレーナは聞いた。
……動揺がまるでないね……
「あなたはだれだと聞いているんです」
……帝国の一部で超皇帝種と呼ばれているものだ……今のところ、人類の進化の最前線だ……

フィレーナはくすっと笑った。

……おかしいかね……

「人類ってまるで、玉葱からっきょうだ。むいてもむいてもきりがない」

……なにごとにもきりはある……きりがなければつけねばならない……ここへ入りなさい……

硝子の表面に円形の筋が入り、穴が開いた。

フィレーナはいまさら躊躇しなかった。

この城が、闘技場だとすれば、場外で乱闘しても試合として成立しない。

フィレーナは、硝子の城に入っていった。

狼犬ギャッピーは、岩陰からそんなフィレーナを見つめていた。

……フィレーナは手の届かない別のところへ入ってしまった……

あの城は、ギャッピーの牙が通用するような生き物の領界ではない。

ギャッピーはそう感じていた。

……ここでフィレーナの出てくるのを待つべきなのか……

ギャッピーは少し迷った。

だが、すぐに決めた。守るべき別の者が浮かんだのだ。

牙は、牙が必要なところで使うべきだ。

ギャッピーはリラのいる戦場に向かって走った。

*

硝子の城の中……入り口の穴から続く通路の奥は、何もない小さな部屋だった。
部屋に入ったフィレーナを待ち構えるように、通路が閉じた。
床がかすかに震えた。
部屋全体の空気が重くのしかかるような気がした。
「どこへつれていくんだ……」
……わかるかね……移動してるのが……
体が急に軽くなった気がした。
……着いた……
頭の奥で超皇帝種が言った。
次の瞬間、部屋中が赤い光に覆われた。
……気にしなくていい……おまえの体についている雑菌を消毒しているのだ……
赤い光が止まると通路が開いた。
かすかに風が吹き込んできた。
……どうかね……ここの空気は……
「空気？」
フィレーナにとってそれは空気と呼べるかどうかわからなかった。
匂いがまるでなかった。

ただの無味乾燥な気体の流れだった。
……無味乾燥か……これは不純物のない純粋な空気だ……私たちは純粋な空気の中で生きる純粋な人間なのでね……
「純粋……？　ここはどこなんだ……」
……でてくるんだね……その部屋から……
部屋の外は広い空間だった。
空間を覆うように湾曲した硝子の壁があり、その向こうに金属の巨大な球体の浮かぶ星空が広がっていた。
足元の下方には、綿を散らしたような雲が浮かぶ赤茶けた陸と海が広がっている。
フィレーナは、一瞬驚きはしたが、動揺はしなかった。
砂漠の森の人々に見せられた光景に似ていたからだ。
ただ、足元に広がる星は、もっと青かった。
……宇宙飛行士たちがこの月にいたころは、あの星もまだまだ青い星と呼ばれても恥ずかしくなかったかもしれない……だが、これが本当の今の姿だ……そう、ここは、空に三つ浮かぶ月のひとつ……おまえはそこからわれわれの星を眺めている……これは、おまえの頭に浮かぶ幻ではなく現実の景観だ……
「ここは本当に人間が作った月なんだね。僕はどうやってあそこからここに来たんだ？」
……城の中に発射装置を作った。私たちにとっては難しいことではない……この月を作った

のもとはといえば人間なのだからね……簡単なことだ……

「簡単？」

突然、フィレーナの胸にいい知れぬ怒りがこみ上げた。

「だったらなぜ、あの星を青いままにしておけない！　あんたにとっちゃ簡単なことだろう。あんなに大勢をぶっ殺さなくったって、人間は生きていけるはずじゃないのか！　月まで作れるあんたたちが、どうして人一人助けられないんだ！」

超皇帝種は黙っていた。フィレーナの中の唐突な激怒に戸惑っているようだった。

超皇帝種はフィレーナの感情の振動が収まるのを待ってから話し始めた。

……助けようとしたよ。実は、われわれは、帝国の超皇帝種として生まれて以来、その方法だけを考えてきた。われわれは残されている人類の歴史の隅々まで調べ、そして、人類の生みだした今までの科学を集積し検討し、何とかこの現状を救おうと思った。帝国人、帝国人にあらざるもの、人類だけではない、この星に生き残っているすべての生物が、生存できるような方法はないものかと探し続けただが、無理だということがわかった。この星は現存する科学では救えない。この星は生命が存続できる能力をもはや持っていない。そこまで人間はこの星を破壊しつくしてしまった。もちろんそれは、今を生きている私たちの責任ではない。帝国の責任ですらないだろう。この星がこうなることは、帝国が成立する前にわかっていた。だが、われわれの先祖たちは何もできなかった。帝国を作る計画がたてられたときは、もうおそすぎたのだ。やるなら、もっと前だった。環境破壊が騒がれ、なおかつ、人間が当時理想的な社会

だという幻想をいだいていた対立する二つの方法、共産主義と資本主義のふたつとも破綻が明確になった時代こそ最後の機会だった。その破綻は、もはや人間中心の物の考え方では、百億に近いこの星の人類が、平穏に存続できないことを示唆していた。

人類の十分の一に満たない先進国の豊かな暮らしの維持に、残りの十分の九が飢えなければならない状態の中で、どんな体制も主義も思想も限界を露呈していた。

そのとき、人間中心でなく、この星の生態系、環境維持を第一義にした新しい生き方で、世界中の人類が一体になって、この星の危機を救うべきだったろう。

この星の環境と生態系の破壊に人類が気づいてから、手遅れになるまでの時間は、わずか五十年余りだった。

それはもはや早期発見という時期ではなかった。

ただちに思い切った処置をすべきだった。

問題は気がついたときに、問題を起こしている人間たちが解決すべきだったのだ……

「問題を起こしている人間……」

フィレーナは思わず呟いた。

……彼らは、この星の問題になるとこう言った。

……問題を起こしている張本人……当時の文明先進国の人間たち……人類にとってというより、この星にとってのかれらは癌だ。……彼らが自らで解決すべきだったのに、彼らがやったのは、環境破壊と、開発途上国の文化的生活への欲求という癌細胞をふりまき、病状を悪化さ

せただけだった。

彼らは、この問題について彼ら同士で互いに警告しあうだけだった。

この星の危機を評論したにすぎなかった。

解決すべきだった最後の機会は、まさに彼らの生きていた五十年だったのに、彼らは、飢餓で死んでいく人々を、破壊されていく環境を、家庭の電影機器で見つめ、同情の溜め息をもらしながら言った……

……問題は重大だが、今、解決する余裕はない。われわれは、われわれの今の生活を豊かにするだけで精いっぱいだ。この星の環境にかんしては、やるだけのことはやるが、あとは、次の世代の英知に期待する……

フィレーナは、帝国艦隊の遺書を思い出した。

……今言っているのは帝国のことではない。フィレーナ、おまえの母国フィロセラは、かつてその典型だった……

「そんなことは知っている！　だからどうだっていうんだ……」

フィレーナは吐き捨てるように言った。

……いいや、おまえも私たちも今を生きる人間に責任などない。責任があるとしたら、呪われるべきとしたら、やり直しがきいたかもしれない時代に生きた人間たちだ。そのときに何もしなかった人間たちだ。そのあと、作られた帝国は、焼け石に水……手遅れになったこの星と人類を存続させるために、藁にもすがるような気持ちで作られた、いわば人類の悪あがきだ。

悪あがきだから、焦る。焦れば、焦るほど、状態は悪化する。種の進化という名目で新種が産み出されていけばいくほど、人間本来の形から離れていく。だが言うことだけは昔の人間と同じだ。……やるだけのことはやった。あとは生まれくる次世代に期待する……と……だが、何もできなかった者たちの次世代に何ができるというのだ。生んでくれと頼んだわけでもないのに、劣悪な状況を押しつけられても、言えることはひとつだけだ。……やるだけのことはやった。あとは生まれてくる次世代に期待する……。無責任で空虚な期待……それを知りながらい続ける。いつまで、それが続くのか……そして、私たち、超皇帝種も同じことを言わねばならないのか……。私たちは、もうそれを言うつもりはない。超皇帝種は、人類が人類と呼べるぎりぎりの人種だ。この星も生命保存の限界点を超えている。期待の先送りはできない。人類は私たちでけりをつける……

「演説を聞かせる気でここにいれたのかい？」

「けりをつけるか……ずいぶん自信がありそうな口ぶりだ……」フィレーナはつぶやいた。

……実は、十万人という数は選択はできない……だが、もっと少数ならできる……

「少数……？」

……この人口の月の中に、何があるか教えてあげよう……

フィレーナの背後に、立体映像が浮かび上がった。

それは、硝子の管の林のように見えた。

その管の一つ一つに、動物の画像が描かれた金属板がつけられていた。

フィレーナにとっては見知らぬ動物がほとんどだった。

……この管にはつがいの生物が入っている。この月ができたころ、あの星に生きていた採取可能だった生物が必要十分素の姿で入っているのだ。

「必要十分素？」

……人類が宇宙に進出する際の、実験材料として集められたものだ。それは、いつの日か、宇宙にわれわれの星のような環境が見つかったとき、そこで、生物が生存可能か否かを調べるための実験だ……この星の一億年前の状況を作ることができれば、ここにいる生物たちは再生できる……ここにあるのはみんなこの月計画が中止されたとき、そのままここに残された……

計画は中止されたが、これだけの巨大な建造物を取り払う余裕をもつ国も団体もなかった。

人類史上最大の粗大ごみとして、太陽熱利用の月の維持装置は動き続けながら、この星の上空に浮かんでいた……だが、その維持装置もそろそろ寿命がくる。二つの月は、もうすぐ、本当の粗大ごみになる……

立体映像に一本の硝子管が映された。

フィレーナが今まで見たこともなく聞いたこともない黒い動物の金属板がつけられていた。

……それが、この星に最後まで生きていた鳥だ……

「鳥……？」

聞いたことのない言葉だ。

……その一種で……俗名で烏と呼ばれていた。大きく拡がって見える手のようなものは翼と

いう。その動物は空を飛べた……

「空……を飛ぶ？」

フィレーナは、飛ぶの意味を把握できなかった。

とぶという行為は、地上から跳ぶことであり、空を飛ぶとは言わなかった。

虫は、空間を飛ぶのであり、見上げる空を飛ぶ動物ではなかった。

……かつて、空には飛ぶ動物がいたのだよ。それが鳥だ。鳥は、恐竜の生きていた太古の時代に生まれ人間などとうていおよびもつかぬほど長い時間、この星に存続してきた動物だ。だが、この月の完成する直前、最後の鳥が死んで絶滅した。理由はいろいろある。飛ぶべき空が、汚染された。飛んでいっても降りるべき土地が荒廃している。そこで待ち受けるのは、飢えた人間だけだった。なにより、生存できる空間がなくなったとわかったとき、生物は急速に生命力を失うものらしい。人間による保護などおいつかなかった。いつの間にか絶滅してしまった。……人間は空に憧れた動物だった。空の向こうに希望があると信じたがる動物だ。おそらく、それは鳥を見慣れていたからだろう。だが、鳥がいなくなり、月の計画が挫折して、空とその果ての宇宙に、なんの希望を持てぬと知ったとき、鳥という言葉も存在も忘れようとした。まるで、帝国人が海という言葉を忘れようとしていたように……そして、消えた。人間は忘れようとしたらどんなものでも、集団催眠のように忘れることができる動物だ……

そのとき、フィレーナの背後で声がした。

「それでも、鳥を目指そうとして、あんたたちは作られた。宇宙に進出する人類としてね。だ

が、鳥にはなれない。この星で生まれたものは、この星でしか生きられない。違いますか」

　フィスが立っていた。

　……来たね。もう一人が……

　超皇帝種が言った。

「フィレーナがここにいると、だれかが私の頭の中で呼びかけました。城の中に戻ってみると、いつの間にかここにいた。……呼び寄せたのはあなたたちですね」

　……これで、皇帝種がもくろんだ人類の後継者候補の三種がそろったわけだね……

「後継者？……そんなものはどうでもいい。私の目的は、フィレーナ、この人だ」

　フィスはフィレーナをみすえて言った。

「あなたがフィレーナですね。私の頭の中にある記憶のとおりだ。残念ながらあなたの反乱軍の損害は大きい。この戦いは、私の率いる帝国軍の勝ちだ。せっかくもう少しで勝ちを確認できたのですが、敵の指導者の御本人がこんなところにいるのでは、私もここに来るしかないではないか」

「フィス？」

「そう、あなたに殺された道化のフィコスの息子だ」

「本人なのか……？」

　フィスは頷いた。

「不思議がるのはもっともですが、本人です。帝国は私を四年で、こんな体にした。……じゃ、

やりましょう」
フィスは剣を抜いた。
殺意のみなぎる構えだった。
フィレーナも思わず剣をぬいた。
問答無用に防御の態勢をとらせる殺気を感じたのだ。
……待ちなさい……フィコスを殺したときの事情を知らぬはずはあるまい……
まるでフィレーナの気持ちを代弁するように超皇帝種が言った。
フィスは答えた。
「わかっていますよ。フィレーナにとっては仕方なかった。だが、そんなことはどうでもいい。私の存在は、フィレーナが父を殺したことに始まる。それ以上でもそれ以下でもない。フィレーナを殺して初めて私の存在の意味がある」
フィスのフィレーナに向けられた殺気は、フィレーナが今まで体験したどんな殺気よりも強烈だった。
フィレーナは、瞬間的に説得は無駄だと諦めていた。
剣を受け止めるか、斬られるか。それとも、こちらから斬りかかるか、選択肢は三つしかないと感じていた。
問題は、目の前にいるフィスを、自分がどう思うかにかかっていた。
フィスの憎悪を自分の責任として浴びるか……はじきとばすか……どちらも問答は無用だっ

た。

……止せ。おまえの存在価値は別にある……

超皇帝種がフィスに言った。

……確かに、私たちは、宇宙に進出する人類として生み出された。だが、それが無理なことは、私たちを生みだした皇帝種にもうすうすわかっていたことだ。宇宙は、すでに宇宙飛行士の段階で、人間の進出を拒絶した。たとえ、私たちが進化した人類といえ、広大な宇宙を駆けて人類の生存可能な天体まで到達できるとは思えない。仮に行きついたとしても、それまでの間に、宇宙空間の中で何世代も経過し、人間という生物としてのかたちで存在できるかどうかもわからない。私たち超皇帝種にとっても、生きるべき星はこの星しかないのだ。だが、今のままでは、私も、他の人間たちも生きていける星ではない。私たちは、地球の汚染に影響がおこる懸念のある兵器はすべて使用不能にして、その間、考え続けた。そして考えついた最善の方法は一つだ。この星の不純物質をすべて焼き払う……

「焼きつくす……」

フィレーナは呆然と立ちすくんだ。

超皇帝種は淡々と続けた。

……月の一つを、大気圏内の最も効果的な地点で爆破する。大気内の不純物質は炎上し、さらには連鎖反応を起こしこの星全体の大気を焼くだろう。世界各地に設置された核や超爆弾の誘爆は心配しなくてもいい。その誘爆を防ぐためにこそ、私たちは、誕生してからの数か月間、

硝子の城の中から出て動き続けていた。今、あの星に爆発、核物質漏出の危険のある兵器は一つもない……

フィレーナは首を振った。

「違う……僕がいいたいのは……」

超皇帝種はフィレーナの言葉を遮るように続けた。

……さらにフィレーナの持つ剣の海水浄化作用を増幅して、海の汚濁を浄化する。増幅装置は私たちが完成した。海の自然再生能力を期待すれば、この星のやり直しは可能かもしれない。そして、焼きつくし、不純物の消えた大地に、月に保存された動植物の必要十分素を蒔く……

「違う！　そんなことじゃない！」フィレーナは叫んだ。

フィレーナの聞きたいのは一つだけだった。

「今、あの星で戦っている人々はどうなるんだ」

……少しは生き残るかもしれない……しかし、十万人よりはずっと少ないだろう。だが、心配はいらない。人類は私たちを含めて帝国以前の種も生き残る。なぜなら、ここにふたりいる。実は、この月に保存されていない生物がいる。いうまでもなく人間だ。この月ができたころは人間を保存の実験対象にするには問題が多すぎる時代だった。いいかね、きみたちは、再生するあの星の最初の一歩になる。今、生き残る十万人を選択するのは難しいが、二人なら難しくはない。どちらも、人間を代表するふたりだ……

「馬鹿ばかしい！」
フィスが吐き捨てた。
そして、フィレーナに言った。
「フィレーナ、心おきなく戦うために、このうるさい人類保存狂に一言いわせてもらいます。あなたにもわかるように声に出して言います。だからといって油断はしていないですから、オルカさんのように軽率に斬り込んでくると痛いですよ」
言われなくても、フィスの殺意がいささかも衰えていないのをフィレーナは感じていた。
フィスは、超皇帝種に言った。
「あなたたちは人間として、どういう位置にいるんですか。人間を生存させたいなら、何も、私やフィレーナを残さなくても、そう、あなたたちだけが生き残ればいいではないですか」
超皇帝種は答えた。
……帝国人の進化は、再生するあの星の環境に合うものとはいえない……私たちは、人類の最終の進化形として、人類を二度と間違わぬ方向へ導きたい……
「神様でも気取る気ですか？」
……いいや、人間だよ……ただ、普通の人間より、すこし知能が優れているだけだ……その知恵を、人類のために役立てるのは当然のことだ……
「人間なら、姿を見せてください……同じ人間同士なのに、あなたの交信法はいささか一方的すぎませんか……なに、実体を見せても危害を加える気はありません……もっとも、こう言わ

なくてもあなたたちには私の頭の中はお見通しで、危険のないことを知っているはずだ」
……確かに……
超皇帝種はふたりにそう言った。
「私たちの姿を見せよう」
フィレーナとフィスの前に、何かの気配が現れた。
やがて、人間の姿が現れた。
裸身だった。
三人いた。
男と女と両性と……
おそらく、人間が大人として成熟した肉体……おそらく、それより前では若すぎ、それよりあとでは衰えが忍(しの)びよるだろう、人間という生命にとって最高潮の一瞬がそのまま肉体になってそこにいた。
フィレーナにはその肉体が信じられないほど美しい人体に思えた。
見つめるだけで陶然(とうぜん)となり、気が遠くなりそうな美しさだった。
フィスもそう感じたのだろう、軽く溜め息をついて言った。
「完璧(かんぺき)です。言葉で表現できない美しさです。フィレーナもそう感じているでしょう」
フィレーナは頷かざるをえなかった。
文句のつけようがない美しさだった。

フィスのいうように美しい人間としか表現しようがなかった。
「しかし、これは変だ」フィスが言った。
「フィレーナと私は違う育ちかたをしている。美意識も違うはずだ。それが、同じようにあんたを美しく見てしまうとはどういうことだ？」
フィスは苦笑した。
「答えは簡単だ。あんたの実体はそれじゃない。あんたは、私たちが、それぞれ持っている美意識に沿った形で、自分の姿を見せている。おそらく、私に見えている三人の超皇帝種とフィレーナに見えている三人は違う姿をしている」
「違う姿で見えている？　でも、気配は確かにそこにいる」
フィレーナが言った。
「ええ……」フィスは頷いた。「いることはいる。でも、姿は違うはずだ。今見えている姿はわれわれの視覚を操縦する催眠術のようなものですよ。しかし、なぜ、そんなことをするんです」
……私たちはおまえたちに好感を持たれたいのだ。人間は視覚によって、物事を評価したがる傾向がある。だれもに好感を持たれるためには、相手によって、見える姿を変えたほうがいいだろう……
「それだけじゃないでしょう……」フィスは首を振った。「あなたたちは、本当に人間の姿をしているんですか……あなたたちは、先刻、自分たちを人間だと言った。本当にそうなんです

か。生みの親の皇帝種にすら、あなたたちは姿を見せていない。あなたは、本当の姿を私たちに見せて、人間と思われないことを恐れているんじゃないですか」

……おまえたちは私が人間の姿形をしていないと、人間ではないというのかね……

超皇帝種が言った。

フィスは肩を竦めた。

「人間とは何か……そんな哲学めいた話は、図書館に行ってやってください。けれど、私とフィレーナの戦いの場を図書館に変えたいなら、言っておきます。あんたたちは、帝国のもっとも進化した人間として作られた。しかし、あなたたちは、人間たちを救えもしなければ、あの星に生き残ることもできない。宇宙に飛び出そうとしても、宇宙は受け入れてくれない。さらに言わせてもらえば、あなたたちは、今三人いる。男と女と両性と……しかし、それは性の差でしかない。いったい、今まで私たちに語りかけていた超皇帝種は三人のうちのだれなのです」

……三人の総意だ……

超皇帝種が言った。

「三人が同じことを考えるのですか。では、あなたたちには性の違いのほか、個人の差はないわけだ……さあ、悔しかったら、それぞれが、それぞれの意見を言ってみてください」

超皇帝種は黙っていた。

「あなたたちはここに三人いながら三人の個性がない。違いますか？　それが優れた人間なん

ですか？　あなたたちは直接の親の皇帝種より優れているはずだ。確かに、知能は高く、超能力といえる力も持っている。

だが、超能力など一部の人間には昔からあったし、動物にも似たような能力があるといわれている。その力の強い弱いが優れた人間であることを決めるわけでもないでしょう。

そして、あなたたちは、先刻言いましたね。フィレーナの持つ剣の海水浄化作用を増幅し、海の汚濁を浄化する……とね。しかし、なぜ、増幅装置が作れて、肝心の浄化作用そのものを考え出せないのです？　浄化作用を作り出したフィロセラの技術は、何十年も昔のもののはずです」

フィレーナは、ただ呆然としてフィスの話を聞いていた。

自分を父の仇として狙いオルカを残忍に斬り刻んだフィスと、超皇帝種を理詰めで追い詰めていくフィスが、同一人物にはとても思えなかった。

フィスは、超皇帝種に哀れみともとれる笑顔を見せて続けた。

「皇帝種を遥かに超える知能を持っているあなたたちが、なぜ、浄化装置を作れないか……理由は簡単です。フィレーナの剣の、海を昔の形に戻す浄化作用は、フィロセラの学者の独創的機知から生まれ、帝国の科学技術にはなかったものです。帝国の科学で浄化とは、殺菌、除去。よけいなものを殺し、取り去ることだ。科学に限らずこれはいかにも帝国的な思考です。だが、フィロセラの浄化は、海水の中の有機物を生かし育て活性化することで海を浄化しようとした。フィロセラはこの学者の研究を国家機密にしたたし、困ったことに帝国は、海を浄化しようとい

う考えそのものをとっくに捨ててしまっていた。帝国にとって価値のない研究を、盗もうとする者もいなかった。浄化の研究は、フィロセラだけで細々と続けられた。

結局、帝国の図書館に、フィロセラの浄化法は資料として入らなかった。

それにしても、昔の人間が考えたものを、あなたたち超皇帝種が作り出せないのはなぜなんです」

超皇帝種は黙っている。

「そう……」フィスは冷ややかに苦笑した。

「そうやって最初から黙っていてくれれば、よかったんです。うるさいから、よけいなことを言わなければならない。あなたたち、超皇帝種の知能は、すでにある知識を膨大(ぼうだい)に蓄え、組み合わせることはできるが、新たなものを考え出すことはできない。あなたたちの知能には、発想がない。帝国の図書館の中にある知識を集積した分しか、ものごとを考えられない。昔のフィロセラの科学者ほどの思いつきもない。いや、手にはいるものならなんでも玩具(おもちゃ)にする四歳の赤ん坊の思いつきすらないでしょう。そんなあなたたちを、あなたたちは人間とは呼べない」

罵倒(ばとう)の連続に耐(た)えられなくなったのか、やっと超皇帝種が沈黙を解いた。

……浄化の増幅装置を作ったのは私たちだ……

「真面目(まじめ)に答えろというのですか」フィスがあきれたように肩を竦めた。

「浄化作用はフィレーナの剣の光線が持っている。光線と名のつくものの増幅なら、ありとあ

らゆる光線兵器を開発した帝国のお得意でしょう。問題は増幅される光線がどんな光線かということです。増幅装置は作れても、増幅すべきもとのものは生み出せない。個性もなく独創性もないこの星の空間を鳥のように浮かんでいる人間もどき、それが、超皇帝種じゃないんですか？　そう、まるで、あなたたちは人間から鳥を作ろうとして運命だけ鳥と同じになってしまった鳥もどきだ。飛びたつ先もなく降りるべき土地もない。皇帝種は、そんな超皇帝種が生まれることを危惧した。彼ら自身も、少なからず人間から逸脱している自覚があったようですからね。もしも、生まれてきたあなたたちが彼らが危惧したものだったら、彼らはあなたたちを処分したかもしれない。けれど、いち早くあなたたちは先手をとった。実体を見せずに、帝国の実権を握った。そして、私が皇帝種を殺したときも、あなたたちは黙って見ていた」

……私たちが生まれれば、彼らはもう旧種で不用の帝国人だ……そして私たちは人類の問題を次世代に持ち越さないつもりだ……

「次世代に持ち越さない？　そもそもあなたたちは、帝国における人類の次世代なのですか……？　人間と呼べる人類は、珍種にしろ皇帝種で終わったんじゃないんですか。あなたにも次世代があるとしたら、それは人類ではなく別の動物の次世代ではないのですか……」

……私たちは人類だ。少なくとも人類を存続させる目的は果たすのだから……そして、ここで、けりをつける……あの星と人類は、どんな犠牲を払っても再生する……

「ふざけるな！　黙って聞いていりゃ。なにが再生だ……」

フィレーナが、叫んだ。

「人間をみんな焼き払って、いったい何が再生するっていうんだ。種を蒔いて芽が出ればそれで再生だとでも思っているのか！」
「そう思っているらしい」フィスが頷いた。
「そこが超皇帝種のいう人間らしいところです。超皇帝種さん？」
フィスが超皇帝種に聞いた。
「そもそも、蒔くべき人類の種というのをどうするつもりなんですか……？」
……フィレーナは女で……おまえは男だ……
「女……？　馬鹿な」
フィスは呆然とフィレーナを見つめた。
「だからなんだ……」フィレーナが言った。
「僕は、何であろうと、まず、反乱軍のフィレーナだ」
「なるほどね……」
フィスは肩を竦めた。
「フィレーナは女……私は男……どうやら超皇帝種は人間というものを勘違いしている……それに四歳で大人になった私はそう長く生きていない」
……成長促進を弱める方法は、私たちが短期間で開発した。独創的とは言えないが、今までの帝国の生化学の集積と私たちの頭脳をもってすれば難しいことではない。おまえは、人並み以上の寿命を持てる。四歳にして、普通種の大人の天才を遥かに超えたその知識と頭脳を、並

みの寿命だけ、持ち続けることができるはずだ……もうおまえは生き急ぐ必要も、死に急ぐ必要もない……

「ほう……私は生きられるわけですね……」フィスは溜め息をついた。

「……だが、あなたたちはやはりわかっていない。私は、人類の存続のために生きようとは思わない」

そして、フィレーナに言った。

「フィレーナ、あなたは人類の存続のために、私の子供を産めるかい？」

フィレーナはフィスを見返した。

何も言わなかった。

ただ、剣を握るこぶしにかすかに力が入った。

交わされている会話のすべてを叩き斬ってやりたかった。

フィスはフィレーナの怒りを感じとって頷いた。

そして、美しい肉体を見せている三人の超皇帝種に言った。

「超皇帝種、あなたたちは、人間を……ここにたった二人しかいない人間さえわかっていない。人間には人類よりも生存よりも重いものがある。少なくとも男の私にはある。男と女と両性の違う姿をしていても個性のないあなたたちにはわかるまい。私にとってなにより大切なのは、私が私であることだ。他のだれでもない私自身の存在だ。そして、私は、フィレーナを殺す。この世界のだれよりも憎しみを込めて……それが、私の存在だ」

フィスは剣を構えた。

「フィレーナ、あなたはどうなんだ？」

フィレーナも剣を構えた。

フィレーナは怒っていた。

だが、顔にはほほ笑みが浮かんでいた。フィレーナは言った。

「わからないよ。わかっても、あんたたちには、話す気などない」

超皇帝種が突然言った。

……フィスは憎んでいる……なによりも……だれよりも……フィレーナを……なぜそこまで憎むことができる？……何のために……

そこにはフィスの頭の中を覗きこんだ超皇帝種の困惑があった。

「うるさい」

フィスは超皇帝種の言葉をはじき飛ばした。

超皇帝種はフィレーナの頭を覗いた。

そして当惑した。

……フィレーナは愛している……なによりも……だれよりも……自分自身を……

鏡の中の自分に見惚れる自己愛はわかる。だが、フィレーナのそれは違っていた。

自己防衛的な本能なら超皇帝種にもわかる。超皇帝種自身の中にもあるからだ。

しかし、それとも違っていた。

フィレーナは自分を愛していた。……まるで最愛の恋人を愛するように……
フィスの憎しみにフィレーナという対象があるように、フィレーナには愛する対象があった。
それがフィレーナ自身だった。
……なぜ、自分をそこまで愛することができる……何のために……
超皇帝種は混乱した。
「うるさい」
フィレーナは超皇帝種の思考を払った。
……何のために……
超皇帝種は繰り返した。
フィスの中にもフィレーナの中にも、そこから先の答えはなかった。
……答えが読めない……理解不能だった。
超皇帝種にとってわけのわからない意味不明な光がふたりの中に光っていた。
フィスがフィレーナに斬りかかった。
フィレーナがいままで経験したことのない鋭さだった。
よけられない……剣で受け止めることもできない……フィレーナは瞬時にそう思った。
フィレーナの衣服が切れた。
「ん……？」
フィスは戸惑った。

剣先に必ず感じるはずの肉の手応えがなかったのだ。
フィレーナの体は剣の先をわずかにかわしていた。
フィレーナ自身もなぜ、フィスの剣先を避けられたのかわからなかった。
ただ、その瞬間、フィレーナは心の底から感じたのだ。
……生きたい……生きるんだ……僕は生きるぞ……
そのとき、心が体が、剣先をかわしていた。
フィスは再び斬りかかった。
斬れたのはフィレーナの衣服だけだった。
フィレーナからの攻撃はなかった。
フィレーナはフィスを殺そうとは思わなかった。
殺す理由など何もないからだ。
フィスに対する憎しみなどあるはずがなかった。
だが、自分は死ぬ気などなかった。
生きたかった。
フィレーナは、体全身が生きたいという意志に化していた。
闘技士の時のように……
闘技士フィレーナの本能は、相手に勝てぬと知ったとき、執拗に生き抜く方向を求めた。
そして、今までだれもフィレーナを殺せなかった。

フィスにとって勝とうとしない剣は初めてだった。
それでいながら、逃げているわけでもない。
フィレーナの体は、逃げの態勢をとれば、たちまちフィスの剣の餌食になって死ぬことを知っている。
フィレーナは生きるために向かい合っている。
油断も隙も見えない。
だらんと垂れ下がった剣は、生きる隙を見つけたら、フィスに咬みついてくるだろう。それは決して勝つためでなく、生きるためだ。
フィレーナは強くない。フィスに勝てないのだから……
だが、弱くもない。負けないのだから……
こんなやつは、敵として軽蔑もできないし尊敬もできない。怒る気も笑う気もしない。
やはり憎むしかない。
フィスはこの戦いが嬉しくなった。
そして、焦りもせず、憎しみだけを剣に込めて叩きつけた。
その一撃一撃が、わずか四年間で大人に成長させられた自分というものの存在の証のような気がした。
フィレーナはその剣をかわすたびに、自分の生を確かめられる気がした。
自分の生に手応えがあった。

フィスの剣には今、自分への憎しみしかない。
避けることになんの躊躇もいらない。
生きたいと願う心と体の思うままに動けばいいのだ。
フィレーナもまたこの戦いが嬉しくなっていた。
人工の月の中で、いつまでも戦いは続いた。
フィスの憎しみも衰えを見せなかった。
ますます燃えさかった。
フィレーナの生きる意志もうせるはずがなかった。
生まれて今までなんども死に直面し結局はへこたれなかった自分の生が、今、逞しく息づいていた。
そして、フィスとの戦いの中でフィレーナは気がついていた。
フィレーナは、だれよりも自分の生を愛していた。
生きようとしている自分を愛していた。
超皇帝種は、フィスとフィレーナのいつ果てるともない戦いを見つめていた。
そして、呟いた。
……戦っている彼らには、人類の存続もあの星の再生も関係ないようです……
超皇帝種は自問自答した。
……あの二人の男女が、子供を生み次世代を作るなど考えられますか……

……永遠に彼らは戦い続けるでしょうね……

……ふたりの選択を間違えたのでしょうか……

……いいえ……あの星にいるどの男女をとったところで、それぞれに個性があり、それぞれに違い、これこそ人類の後継者といえる者を選び出すことなどできないでしょう……

超皇帝種は戦う二人を見つめ続けた。

……それにしても、どうしてあんなに生き生きとしていられるのでしょう……

……私たちは、人間をなにもわかってはいない……

……あの男のいうように、私たちは、もう人間ではないのかもしれない……

……飛びたつ先もなく降りる土地もない、私たちは鳥のようなものですか……

……鳥は、少なくともあの星で人間以上に長い期間を生き続けていましたよ……

……それに比べ私たちは……

……自分で死ぬこともできない身体(からだ)だ……

……せめて彼らの救い主として存在したかったのですが……

……人間がそれを認めてくれないならどうしようもありません……

三人は、硝子の外に見える赤茶けた星ともうひとつの人工の月を見つめた。

……人類が滅(ほろ)びるにしろあの星を再生する目的は果たさねば……

……月の維持装置はもう持ちません……

……せめて私たちの存在した価値を見つけましょう……

三人はもう一つの月を凝視(ぎょうし)した。
そして三人は、超皇帝種の本来の体に戻った。
十を越える数の肉の塊(かたまり)が宙に浮いていた。
やがて、もうひとつの月がゆっくりと落下し始めた。

＊

夜……。
悲鳴と怒号がすぐそこまできている。
「いよいよですね……」
天幕の中でリラは小型剣を握った。
反乱軍と帝国軍の勝敗の行方は、見当がつかない。
だが、ここが戦場になることは明らかだ。
自分の身は自分で守る。
「最悪でも、フィレーナよりは往生際の悪いところを見せなければまずいわ。なにしろ同じ女の子でも、あっちは闘技士、私ゃ接待用奴隷(エンターテインメントクレチア)。危険度が違うんだから先に死んだら笑われちゃうわ……だれが笑うって……？　あはは……私だよ」
リラは自分で自分にそう言った。
リラは、少なくともフィレーナが戻るまでは死んでも生き抜くつもりだ。
そのとき、いきなり天幕がまくりあげられた。

血まみれの剣を持った帝国兵が入ってきた。
血走った目は正気ではなかった。
リラを見ると、剣を振り上げ飛びかかってくる。
小型剣を鞘から抜く間もなかった。
やられる。
目を閉じるしかなかった。
……あいた……私……口ほどにもないなあ……
一瞬、そう思った。
だが、何も起こらなかった。
おそるおそる開けた目の前に、帝国兵が倒れていた。
二つの目を光らせた毛の深い仲間がいて、早く逃げろとでも言うように、リラの裾をくわえ引っ張った。
ギャッピーだった。
天幕を出たリラは、しかし、その場に立ち竦んだ。
ギャッピーも、同じだった。
そのとき、だれもが戦いを止めて空を見上げざるをえなかった。
月がみるみる大きくなっていく。
こちらに向かって落ちてくる。

＊

フィレーナとフィスは、戦い続けていた。
二人は時間も場所も忘れていた。
今、フィスはフィレーナに斬り込むことだけを考え、フィレーナは剣をかわして生きることだけを思い続ける。
ただそれだけだった。
戦いは永遠に続きそうにすら思えた。
だが、突然、その時間は中断された。
最初は床を走る鈍い震動だった。
フィスは、太刀筋がぶれるのを嫌い、剣を構え直した。
次の瞬間、突き上げるように床が揺れた。
ふたりは倒れるのを堪えるのがやっとだった。
そして、硝子の外に斜め下方へ落ちていくもう一つの月を見た。
それればかりか、わずかずつ、赤茶けた大地が大きくなっていく。
こちらも落ちているのだ。
「馬鹿が……邪魔をする気か……」
フィスが吐き捨てるように言った。
「落ちていく……月が……」

フィレーナは唇を咬み締めた。
「ああ……。私やおまえを無視して再生とやらを始める気だ」
「あの星にいる人たちは……」
フィレーナは思わず硝子に駆けよった。
その瞬間、握った剣から気持ちがそれた。
フィレーナの剣が手からはじけ飛んだ。
フィスのせいではなかった。
剣は宙に浮いたまま止まっていた。
……もう、おまえたちを待てない……戦っているがいい。この月が落ちるまで……
剣が宙を滑っていく。
見えないが剣を動かしている人の気配がある。
「そこだ!」
フィスの剣が、空間を斬った。
超皇帝種の絶叫が、ふたりの頭の奥に響いた。
空間に赤い血が拡がった。
そして、人の頭ほどの肉の固まりが床に落ちた。
「これが超皇帝種か……」
フィスは、腰に差した小型剣をフィレーナに投げ渡した。

「まだ何人もいるぞ」
「気配はわかっている。あなたたちが三人だけでないこともわかっている」
フィレーナは剣を抜いて気配のほうを向いて言った。
「僕の剣が欲しいのはわかる。だが、このままではあんたたちが何人も死ぬ。ふたりともあんたたちの気配がわからないほどへぼじゃない。剣を返してくれ」
だが、フィレーナを無視して剣は空間を動き始めた。
……だが、私たちは目的を果たす。おまえたちは好きに戦っていろ……
「剣のないフィレーナを殺しても寝ざめが悪い」
フィスは空間を斬り裂いた。
血のしぶきが飛ぶ。
肉塊が落ちる。
フィスは空間を斬り続け、フィレーナの剣のあとを追った。
血まみれの肉塊が次々と、床にころがっていった。
斬られる瞬間こそ見えないがほとんど虐殺だった。
「よせ！　相手は抵抗していない」
フィレーナはたまらずフィスに叫んだ。
「かまうものか。超皇帝種は逃げようとすれば逃げられる。だが逃げない。超皇帝種はもう生きる気はない。自分にけりをつけたいんだ。やつらだって、生まれたくて生まれたわけじゃな

い」
……生まれたくって、生まれたわけじゃない……そう僕だって……こんな時代に……でも、
……フィレーナはフィスの後姿を見すえた。
フィレーナと同じ時代に生まれ、違う生き方を選んでいる男がいた。
フィスは、空間を斬りまくった。
フィレーナの剣は空間を走り、別の広間に入っていった。
壁に、赤茶色の星と二つの人工の月の軌道を映し出した画像があり、無数の計器が並んでいた。
「ここは……？」フィレーナは思わず呟いた。
……この月の制御部だ……いまさら、おまえたちには自慢しても意味のない私たちの能力を見せてやる……超皇帝種が言った。
フィレーナの剣は広間の片隅にある硝子管に吸い込まれた。
とたんに硝子管からフィレーナの剣の青白い光がほとばしり出た。
目が開けられないほどまぶしかったが、フィレーナとフィスの体に異常をひきおこす光ではなかった。
光はみるみる月全体を覆った。
そして帯状になって、赤茶けた星に降り注いだ。
……浄化光線の増幅装置が作動した……もうひとつの月が爆発し、あの星の不純物を焼き払

ったあとこの月が、五十年かけて生物の必要十分素の硝子管を蒔き散らす。まず植物……そして、動物……そして、この月は落下する。それまで、おまえたちは戦っている気かね……

「降りますよ。フィレーナを殺したら……。ここまできた私が、降り方も知らないと思いますか……私がこの制御室を操れないとでも、お思いですか。いや、あなたたちは私の気持ちが読めたんでしたね」

……おまえが、帝国の知識をほとんど頭にいれ、この月のことをよく知っていることはわかっている。だからこそ、人類の生き残りの一人として選んだのだが……

「あなたたちは私を甘く見た。あなたたちのいうなりに、私を説得できると思ったんだ。私のフィレーナへの憎しみを軽視した」

……そう、私たちは人間を勘違いしていた。人類の生存よりも個人の憎しみを優先させる。自分の寿命が延びるというのに私たちの言うことを聞こうとしない……そして、人類の生存より、自分を愛することを優先する女……私たちが知る資料の中にそんな人間はいない……

フィレーナが叫んだ。

「ふざけないでくれ！　人類を生存させるために、ふたり以外をみんな殺す……そんな人間も僕は分からない。ここで聞いたどんな話にも僕は吐き気がする。もうたくさんだ」

……どう思おうとおまえたちは勝手にするがいい……私たちは、やることをやった……あとは、殺し合うがいい……おまえたちを導くのはもう諦めた。私たちは人類のいないこの星の再生を見つめるとしよう……生き物たちはここにいくらでもいる……

「なにが見つめるだ……死にたがっているくせに……」
フィスが剣で空間を二度、三度払った。
肉の塊が床に落ち頭の中に聞こえていたざわめきのようなものが急に消えた。
「どうやら、ふたりだけになれたようだ。硝子の中から剣を取り戻せ」
フィレーナは壁の画面に映る月を見つめた。
もうひとつの月がどんどん落ちていく。
フィレーナはフィスに言った。
「どうやったらこの月を動かせる？」
「なに？」
「僕があんたに勝ったら、僕だってあの星に戻りたい。あんただけ動かし方を知っているのは不公平だ」
「勝つ気か……」
「その気になった」
フィスは計器板を指差した。
「簡単だ。帝国以前のものだから、人命尊重の脱出装置がある。その安全装置をはずし、その右の操縦桿を倒せば脱出装置が働く。おまえがこの月に入ってきたところからでていけばいいのだ。気をつけて……左の操縦桿は、倒した方向に落ちていく。もう月の維持装置が寿命に近い。一度落ち出したら止まらないかもしれない」

フィレーナは安全装置を動かしてみた。
すぐに、帝国語に似た字の組み合わせで安全装置解除の表示が出た。
「ふーん、本当に簡単なんだ。戦車や車と変わらないね」
「これだけ大きな月だ。徹底的に自動化しないと、小人数では手におえないし簡単でないと緊急の場合に間に合わない」
「なるほどね」
フィレーナはいきなり左の操縦桿に飛びついた。
狙いすまして倒した方向に、落ちていくもうひとつの月があった。
警報が鳴り響き、床が大きく傾いた。
フィスは驚きもせず呟いた。
「この月をあの月にぶつける気か」
フィレーナは頷いた。
「爆発するまえに、壊したほうが……被害は少ないだろう？」
「確かに……」
フィスが言った。
「かまわないよ。あの星の人たちが生きようが死のうが……私の目的はあなただ」
フィスは、剣を構えた。
「早く、あなたの剣をとってきなさい」

フィレーナは小型剣を見せた。
「これで十分だよ」
床が激しく揺れた。
月の落下が早まった。
「維持装置が予想以上に疲労しているようだ。時間がないな」
フィスは斬り込んだ。
フィレーナはかわした。
フィスが言った。
「のんきにやっていると、二人とも死ぬぞ」
フィレーナはにっこり笑った。
そして何の根拠もなく言った。
「僕は生きるよ」
「殺すよ」
フィスは再び斬りかかった。
そのときだった。
……衝突はさせない……
ふたりの頭の中で小さな声が聞こえた。
計器板の操縦桿の数本が跳び上がった。

宙に肉塊が浮かんでいた。
最後の超皇帝種が、身を潜めて生きていたのだ。
……あの星は再生させる……
落下の速度が落ちた。
と、同時に計器板が炸裂した。
爆風にあおられて肉塊はふきとんだ。
落下に無理な制御力が加わり、月全体の機能に異常をきたしたのだ。
さらに、制御部に小爆発が続いた。
それでも、ふたりは戦っていた。
いきなり大爆発が起き月の四分の一が吹き飛んだ。
さまざまな生物の硝子管が宇宙に大気圏に舞った。
それでもふたりは戦っていた。
フィスは斬りつけ、フィレーナはかわし続けた。
だが、それも、終わりの時が来た。
制御部の天井が崩れ落ちたのだ。
フィレーナは天井の割れ目から制御部の外に出た。
フィスの姿はなかった。
空気が薄くなっていくのを感じながら、フィレーナは走った。

「僕は生きる。僕は生きる」
呪文のように呟いていた。
やがて、向こうにこの月にやってきたときの部屋の入口が見えた。
緊急という意味らしい表示が点灯していた。
フィレーナは飛び込んだ。
目の前の巨大な硝子にもうひとつの月が大きく迫っていた。
部屋の扉が閉じ出した。
もうひとつの月はすぐそこだ。
扉が閉じきるその瞬間、黒い影が飛び込んできた。
フィスだった。
部屋の中が殺菌の赤い光に包まれた。
フィスの顔は半面が焼けていた。
その目には憎しみがあった。
狭い部屋の中でふたりは揉み合った。
フィスの焼けていない半面がフィレーナに向いた。
フィレーナは一瞬見たはずのない男の顔をそこに思い浮かべた。
ラリス……？
それは、フィレーナを救うために、白熱光線に消えていった男の名だった。

それが、わずかな気の緩みを呼んだ。
フィスの剣が胸につき立った。
しとめた……フィスはそう思った。
それがフィスの気の緩みを呼んだ。
フィレーナの小型剣がフィスの胸に食い込んだ。
赤い光が消えた瞬間、部屋は月からはじき飛ばされるように空中に飛び出した。
そして、二つの月は衝突した。
増幅されたフィレーナの剣の青白い光が、衝突の瞬間、さらに膨れ上がり夜空全体を覆いつくした。
フィレーナとフィスは抱き合ったような格好でずるずると床に崩れた。

＊

部屋は、大地に辿りついていた。
フィスは、わずかに意識が回復した。
そして、体の下にいるフィレーナの鼓動を聞いて当惑した。
……なぜだ……私はフィレーナの心臓を刺し貫いたはずなのに……
フィレーナは自分が死んだと思っていた。
生きているのが不思議だった。
だが、フィスの剣はわずかに心臓を外れていた。

刺される瞬間、身体が自然に身をよじり、剣先から心臓を守っていた。

「なぜだ……」

フィスの声が耳もとで聞こえた。

「なぜそうまでして生きるんだ」

「わからない」

フィレーナは呟いた。そしてフィスに聞いた。

「なぜ、そうまでして殺そうとしたの」

「おれはおれを生きた。そういうことだろう」

フィスの身体から満ち溢れていた殺意が消えていた。

「もっと生きたら？……」

フィレーナが言った。

「もう生きた。充分……」

フィスが答えた。

「僕は生きるよ」

フィレーナが言った。

「どうして……」

フィスが虫の息で聞いた。

しばらくフィレーナは黙っていた。

そして唐突に言った。
「生むよ」
フィレーナはただそう言いたかっただけだ。
「え……？」
フィスは聞き返した。
「子供……あんたの子は嫌だけど……生むよ……僕」
「そうか……なるほど……」
フィスは呟いた。
そして、苦笑して、目を閉じた。

＊

月は爆発はしなかった。
だが、ばらばらになって吹き飛んだ破片は、流星雨のように海に大地に降り注いだ。至るところで、大火災や津波が起こった。帝国各地のほとんどが焼かれ、平地は海に洗われた。
だれが生き残りだれが死んだか、それ以後、歴史は何も語らない。
しかし……この星の動物と植物……生物に関する限り、帝国創設時に比べ、遥かに多くの種が繁殖していることは確かである。

エピローグ

フィレーナは夜空を見上げていた。
二つの月が消えた夜は、暗闇と、降るような星を取り戻していた。
フィレーナは闇と星に包まれて眠った。

＊

朝陽の中、フィレーナはよろよろと立ち上がった。
胸は激しい痛みに襲われていた。
だが、それは生きている証拠でもあった。
痛みの外に、いつも胸の中で聞いていた響きがした。
フィレーナは歩き始めた。
いつも胸の中で嗅いでいた香りがした。
潮騒と汐風……。
フィレーナはかすむ目で向こうを見た。
青い海が拡がっていた。

フィアイの民の帆船がこちらに向かってくる。
「生きてたんだね……」
フィレーナはほほ笑んだ。
そして……
「生きてたんだ。やっぱ……やれやれですね」
聞き慣れた声がした。
フィレーナは振り返った。
リラが立っている。
そのそばでギャッピーが、そ知らぬ顔をして欠伸をしている。
「生きてるさ。もちろん」
フィレーナは頷いた。
「僕は生きるよ」
そのとき、海は蒼く、果てしなく、どこまでも永遠に続いて見えた。

永遠のフィレーナ　完

あとがき

これは、遠い星の輝きの中に閉じこめられている果てしない時の向こう……人々が空を飛びまわる術を知らぬ頃の世界に語り継がれていた一人の勇者の伝説である。

原稿用紙の一枚目にそう書き初めてから、十年……フィレーナの最終ページを書き終える日が来ました。この巻が、文字どおりフィレーナのフィナーレです。ぼくがフィレーナについて語れることはもうありません。人々が空を飛びまわる術を知らぬ頃の世界とはどんな世界を意味するのか、そこで一人の勇者がどう生き、どう生きようとしたか……そして、フィレーナの世界で生きた人々の生と死、その生きざまは、なにより彼ら自身と、読者のみなさん一人一人の感じるままにゆだねようと思います。

そして、ぼくはといえば、今、ぼんやり小学校の一、二年の頃を思い出したりしています。その頃、ある疑問が頭に浮かんで、夜も寝られなくなったことがありました。それは……ぼくはなぜここに生きているのか、……ぼくは、ほんとうにここに生まれたいと望んでいたのだろうか……この世界にとって自分は何なのか……自分にとってこの世界は何なのか……多分誰もが幼い頃に漠然と抱くだろう、自分が存在していることの不思議に、おそらく必要以上にの

め り込んでしまったのです。
　父が転勤がちの仕事だったために幼稚園、小学校を通じて転校生のぼくは、変化する環境の中で、おさなごころに絶えず自分の居場所を探していたからかもしれないし、さらに、父が動植物が好きで、家に小鳥や犬や花などの生きものがあふれていたのも理由のひとつかも知れません。……なにしろ、ひとつがいのカナリアが三十羽の大家族にふくれあがったこともありました……身近に生があふれていることは、同時に死も頻繁（ひんぱん）にあるということです。では、そんな生と死、出会いと別れに遭遇している自分とはなんなのか……自分の生とはなんなのか……けれど、自分が生きていることが無駄だとは思えませんでした。なぜなら、産まれ生きている小動物たちは、それぞれ懸命で、無駄に生きているとは見えなかったのです。だから、自分が生きているのも、懸命ではないにしろ……そう無駄な事ではないだろう。それにしてもなぜ、ぼくは、今ここにいるのだろう。あの頃は、思い出してもあきれるほど、考え込んでしまっていたようです。そのまま、考え続けていれば幼年性ノイローゼか、もしくは今ごろ哲学者か宗教家にでもなっていたかも知れませんが、幸か不幸かまたまた転勤……新しい出会いや環境の変化に夢中になり、いつの間にか、自分がなぜ存在するか、自分は何なのかという疑問は、遠のいていきました。けれど、長い間フィレーナと付き合ってふと思うのです。
　やっぱり、ぼくは、自分が何なのか、なぜここにいるのか……未だにどこかで気になっていたんだな……と……
　1巻から9巻まで……

絵の高田明美さんはもちろん、フィレーナに様々な形で関っていただいた全ての皆さんに感謝します。フィレーナの1巻目の1章は、1984年『アニメージュ』の連載小説として産声をあげ、翌'85年、当時の担当高橋望氏によって文庫になりました。

1988年、3巻以降から……作家は遅筆の上に、度々の入院……エンドマークが出せない危険があったにもかかわらず、ずっとフィレーナに付き添ってくれた担当の吉田勝彦氏、もし彼のはげましと助言がなければフィレーナの9巻は二十一世紀……いや、未完で終わったかも知れません。フィレーナを完成させたのは吉田氏の力です。本当にありがとう。

フィレーナの登場人物は、モデルがいるとはいえませんが、ぼくが今まで出会った人達がいたからこそ生まれました。その人達との出会いに感謝します。

リラ……テス……こころから幸せを祈ります。

そして個人的なささやかな感謝をどさくさにまぎれ、ぼくの両親に……

最大の感謝を読者のみなさん……いいえ、みなさんではなく、「永遠のフィレーナ」を読んでいただいたあなた個人に捧げます。

フィレーナの戦いは、なによりフィレーナのものであり、なによりあなたの戦いは、あなた個人の戦いでありますように……

今もフィレーナの戦いは続いています。

1994年　春

首藤剛志

アニメージュ文庫

永遠のフィレーナ 9

——青く果てしなく——



首藤剛志

'49年8月18日、福岡生まれ、脚本家・小説家。19歳でシナリオデビュー。「魔法のプリンセス　ミンキーモモ」などのシリーズ構成を務める。小説家としては「ゴーショーグン」と本シリーズが代表作。



高田明美

3月31日、東京生まれ。キャラデザイナー・イラストレーター。「クリィミーマミ　「うる星やつら」のキャラデザインを経て、「機動警察パトレイバー」のキャラデザインを務める。

1994年3月31日初刷　　N－088
Printed in Japan

著　者　首藤剛志
発行者　山平松夫
〒105-55　東京都港区新橋4—10—1
発行所　株式会社　徳間書店
電　話　03(3433)6231(大代)
振　替　東京4—44392番
印　刷
製　本　大日本印刷株式会社

〈編集担当　吉田勝彦〉

★この本を読んでの感想を上記までおよせ下さい。また著者へのお便りもお待ちしています。

©1994 TAKESHI SHUDOH

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。
乱丁、落丁本はお取りかえいたします。

ISBN4-19-900014-3

アニメージュ文庫

もうひとつの首藤剛志ワールド

戦国魔神ゴーショーグン・シリーズ

戦国魔神ゴーショーグン　絵/なにわ♡あい

その後の戦国魔神ゴーショーグン　絵/なにわ♡あい他

狂気の檻　絵/天野喜孝

覚醒する密林　絵/天野喜孝

時の異邦人　絵/天野喜孝

はるか海原の源へ　絵/天野喜孝

番外篇1　幕末豪将軍　絵/さかもとえみ

シリーズ最新刊

番外篇2　美しき黄昏（たそがれ）のパバーヌ

絵/羽原久美子

おなじみゴーショーグン・チームがたどりついたのは、なんと15世紀末、ルネッサンスにわくイタリアはフィレンツェの郊外だった！　一行はそこでブンドルの先祖たちに出会うが……。ブンドル活躍の一篇。

首藤剛志関連作品リスト

戦国魔神ゴーショーグン
その後の戦国魔神ゴーショーグン
狂気の檻
覚醒する密林
時の異邦人
はるか海原の源へ
幕末豪将軍
美しき黄昏(たそがれ)のパバーヌ
永遠のフィレーナ 全9巻
都立高校独立国上下
いつかきっとピーチブック(ミンキーモモ)
それからのモモ(ミンキーモモ)
夢の中の輪舞(ロンド)(ミンキーモモ)
ラインハルトとヤン(銀河英雄伝説)

カバーイラスト＝高田明美
カバーデザイン＝真野　薫
カバー印刷＝真生印刷(株)

9784199000140

1910174004201

デビス帝国に滅ぼされた海洋国家フィロセラの王女フィレーナは、奴隷の闘技士として育てられた。自らの運命の導くままに帝国の神殿を破壊したフィレーナの噂は帝国中に広まり、各地に非帝国民の反乱軍が乱立した。その後、南部海岸地方でNo.1の反乱軍を率いるようになったフィレーナは、単身極北の地に向かう。そこでフィレーナはフィロセラの大艦隊を発見。反乱軍を結集し、帝国との一大決戦へと向かう。シリーズ完結編！

ISBN4-19-900014-3

C0174 P420E (0)

アニメージュ文庫　定価420円（本体408円）